

宮城県文化財調査報告書第 141 集

山 王 遺 跡

－仙塩道路建設関係遺跡平成 2 年度発掘調査概報－

平成 3 年 3 月

宮城県教育教育委員会
建設省東北地方建設局

序 文

三陸縦貫自動車道は昭和62年に第4次全国総合開発計画において計画が定められた仙台市から石巻市・釜石市などを経て宮古市に至る約220kmの高速道路です。この一部となる仙塩道路は仙台市中野から利府町春日までの7.1kmの路線で、平成7年の供用開始を目標に、建設省東北地方建設局他工事事務所が担当して工事を進めています。

多賀城山王遺跡は七北田川や砂押川によって形成された自然堤防上に立地する遺跡で、古代の陸奥国の国府であった特別史跡多賀城跡の南西に位置し、古代時代の集落跡や多賀城に関連する古代遺構、中世の屋敷跡などが分布することで注目されている遺跡です。

仙塩道路のルートがこの山王遺跡を通過し、さらに遺跡内に多賀城インターチェンジが建設されることになったため、それに伴う遺跡の発掘調査を東北地方建設局から委託を受けて当教育委員会と多賀城市教育委員会が実施しています。

本年度はインターチェンジ予定地についての確認調査を行った結果、古墳時代中期の遺物包含層、古代の都市計画を示す道路跡および多賀城に関する人々の住居跡や井戸跡、中世の有力者の屋敷跡などが発見されました。このうち、古墳時代の遺物包含層は集落のゴミ捨て場で、多数の完形土器をはじめ、ザルや小刀の柄などの日用品類、獸骨・魚骨などの食料残滓が出土しており、当時の人々の日常生活を復元する上で極めて貴重な資料が得られました。

本書は当教育委員会受託分の発掘調査の概要をまとめたものです。速報とし活用していただければ幸いです。

最後に、調査に際して種々協力頂きました建設省をはじめとする工事関係各位、および直接発掘作業にあたられた方々に対して厚く感謝の意を表する次第です。

平成3年3月

宮城県教育委員会 教育長 大立目 謙直

例　　言

1. 本書は建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路建設計画に伴う山王遺跡の調査概報である。
2. 調査の主体は宮城県教育委員会であり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関から指導、助言を賜った(以下敬称略)。

岡村道雄(文化庁記念物課文化財調査官)、西本豊弘(国立歴史民俗博物館助教授)
辻誠一朗(大阪市立大学理学部助手)、藤沼邦彦、高野芳宏、加藤道男、山田晃弘(東北歴史資料館)、進藤秋輝、村田晃一(宮城県多賀城跡調査研究所)、工藤哲司、荒井格(仙台市教育委員会)、千葉孝弥、石本敬、相沢清利(多賀城市埋蔵文化財センター)、伊藤裕(松島高校)、赤澤靖章(山元町立坂本中学校)、藤沢敦、菊池芳朗(東北大学大学院)

東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、多賀城市埋蔵文化財センター

4. 竹製品の取り上げや保存処理に際しては、村山斌夫(雄勝町立大須中学校)、梅村聖一(東北歴史資料館)の両氏に御協力を頂いた。また、骨角器のX線撮影(ソフテックスM-1005S型を使用)は梅村氏にお願いした。
5. 本書における土色についての記述には『新版標準土色帳』(小山・竹原;1973)を利用した。
6. 本書の第1図は5千分の1の多賀城市都市計画図を複製して使用した。
7. 本書の執筆は調査員全員が協議しながら、第I章を白鳥良一、第III章1および第IV章1の土器を佐藤則之、その他は菅原弘樹が行った。また、編集は菅原が行った。
8. 本書中の遺物の実測・トレースは、土器を佐藤・天野順陽・高橋栄一、骨角器を菅原、木・竹製品を佐藤・吉川一明・高橋が行った。
9. 発掘調査の記述や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目 次

I 調査に至る経過.....	2
II 遺跡の位置と環境.....	4
III 発見された遺構と遺物.....	4
1 古墳時代	7
2 古代	30
3 中近世	39
4 その他の遺物	39
IV 考察.....	42
1 古墳時代	42
2 古代	49
V まとめ.....	52

調査要項

遺 跡 名：山王遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 18013）

遺跡記号：F1

所 在 地：宮城県多賀城市南宮字八幡

調査面積：5500m²

調査期間：平成2年4月16日～12月18日

調査担当：宮城県教育委員会文化財保護課

調 査 員：白鳥良一・佐藤則之・菅原弘樹・天野順陽・高橋栄一・堀江伸・
斎藤吉弘・岩見和泰

I 調査に至る経過

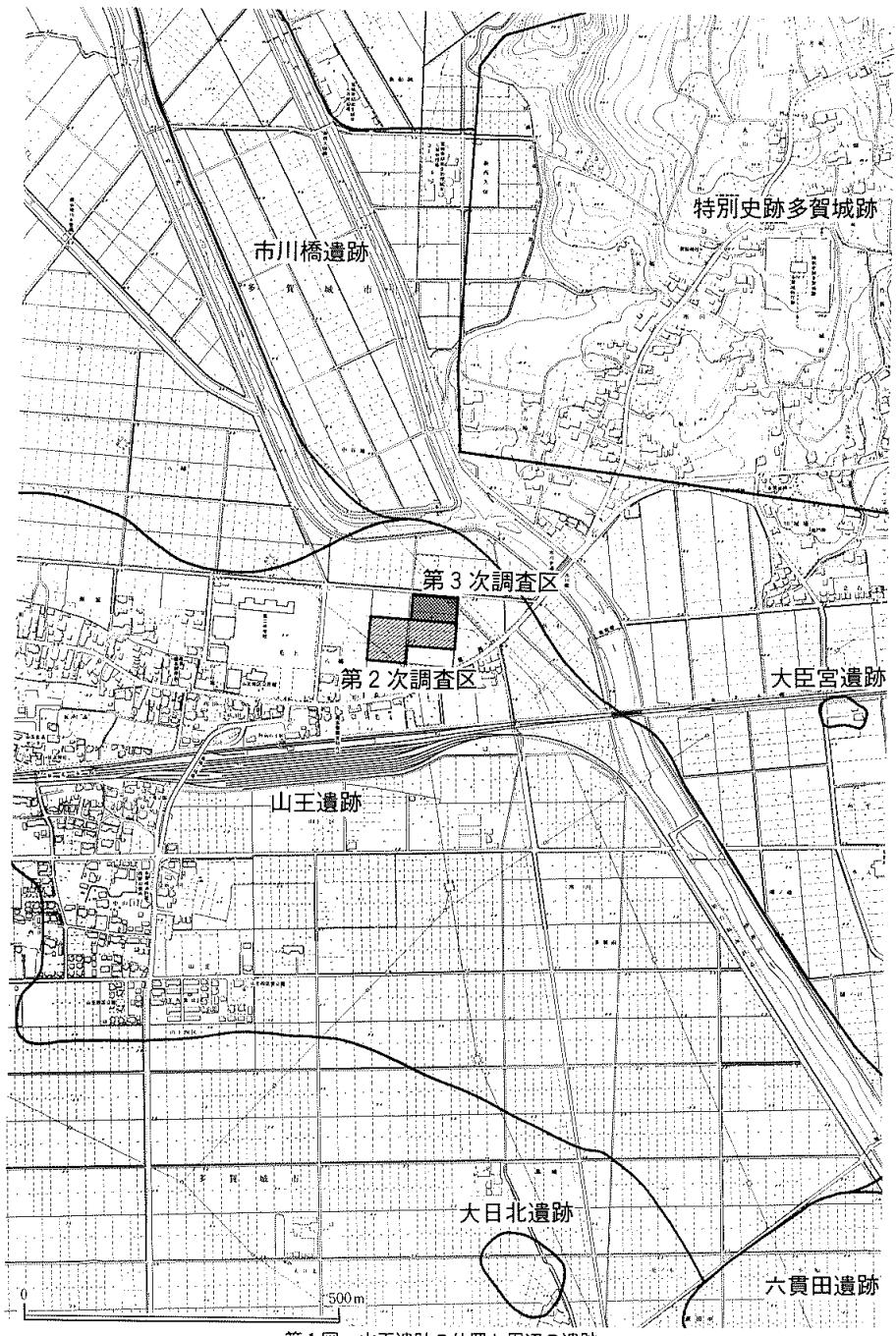
建設省東北地方建設局、日本道路公団仙台建設局、宮城県道路公社、宮城県、仙台市で構成する仙塩地区総合交通計画委員会は昭和47～52年に仙台灣高規格幹線遺路事業計画を立案した。その路線は亘理町中泉で国道6号線に連結して仙台市、多賀城市、利府町、松島町、鳴瀬町、矢本町、石巻市、桃生町を経て、岩手県宮古市に至るもので、そのうち仙台松島道路の一部(利府I.C～松島I.C間)は工事が完成し、昭和62年から供用が開始されている。この仙台松島道路の南終点である利府町春日から仙台市中野に至る7.1kmが東北地方建設局仙台工事事務所が建設を担当する仙塩道路である。

仙塩道路の計画決定に伴い、宮城県教育委員会は利府町教育委員会、多賀城市教育委員会と共に昭和57年3月に分布調査を実施した。その結果、利府町の丘陵部で5遺跡、特別史跡多賀城跡の西から南にかけて隣接する沖積地地域で市川橋遺跡、山王遺跡、六貫田遺跡がかかわることになった。これらの地域は奈良・平安時代の陸奥国府多賀城をとりまく地域にあたるため、路線敷のほぼ全てに遺構の存在が予想され、とくに山王遺跡はこれまでの他の事業にかかわる調査結果からみて、きわめて濃密な遺構の存在が推定された。

そこで昭和63年11・12月に山王遺跡と市川橋遺跡のうち1500m²について確認調査（第1次調査）を実施した。その結果、本遺跡では古代の掘立柱建物跡や多賀城に関わる道路遺構などが検出されたほか、その下層から古墳時代後期、中期初頭、縄文時代の遺構や遺物が発見された。また市川橋遺跡でも8枚にわたる水田遺構が重複していることが確かめられた。

昨年度の第2次調査は多賀城インターチェンジ予定地を対象として、自然堤防部分約7000m²について調査した。7000m²のうち、5000m²については宮城県教育委員会が受託して平成元年6月8日から、残りの2000m²については多賀城市教育委員会が受託して7月1日から調査を開始し、ともに12月14日終了した。その結果、多賀城に関わる道路跡や掘立柱建物跡をはじめ、竪穴住居跡や畝状遺構などの古代の遺構が多数検出されたほか、堀を方形に巡らせた中世の屋敷跡も発見され、その変遷が把握された。

本年度の第3次調査は昨年と同様に多賀城インターチェンジ予定地のうち、宮城県教育委員会が約5500m²、多賀城市教育委員会が約3500m²について東北地方建設局から受託し、調査を実施した。本概報は県教育委員会が実施した分の調査成果をまとめたものであり、多賀城市教育委員会受託分については別途調査概報が刊行される予定である。



第1図 山王遺跡の位置と周辺の遺跡

II 遺跡の位置と環境

多賀城市は市域のほぼ中央を流れる砂押川によって東・北部の丘陵部と、南・西部の沖積平野部とに二分される。平野部は仙台平野の北東部にあたり、海岸まで広がっている。

山王遺跡は仙台平野の北東端に位置し、東西に長い自然堤防上に立地する。この自然堤防上には新田遺跡、市川橋遺跡も立地している。遺跡の範囲は多賀城市山王および南宮を中心とする東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる。今回の調査区は本遺跡の北東端に当たる多賀城市南宮字八幡地区で、昨年度の調査区と隣接している。付近の標高は約4mである(第1図)。

本遺跡の周辺には北東約1kmの丘陵上に特別史跡多賀城跡をはじめ、館前・大臣宮遺跡、多賀城廃寺など、多賀城と密接な関連をもつ遺跡や寺院跡が存在する。このように本遺跡は、古代の国府周辺地域の様相を解明する上で重要な位置を占めている。

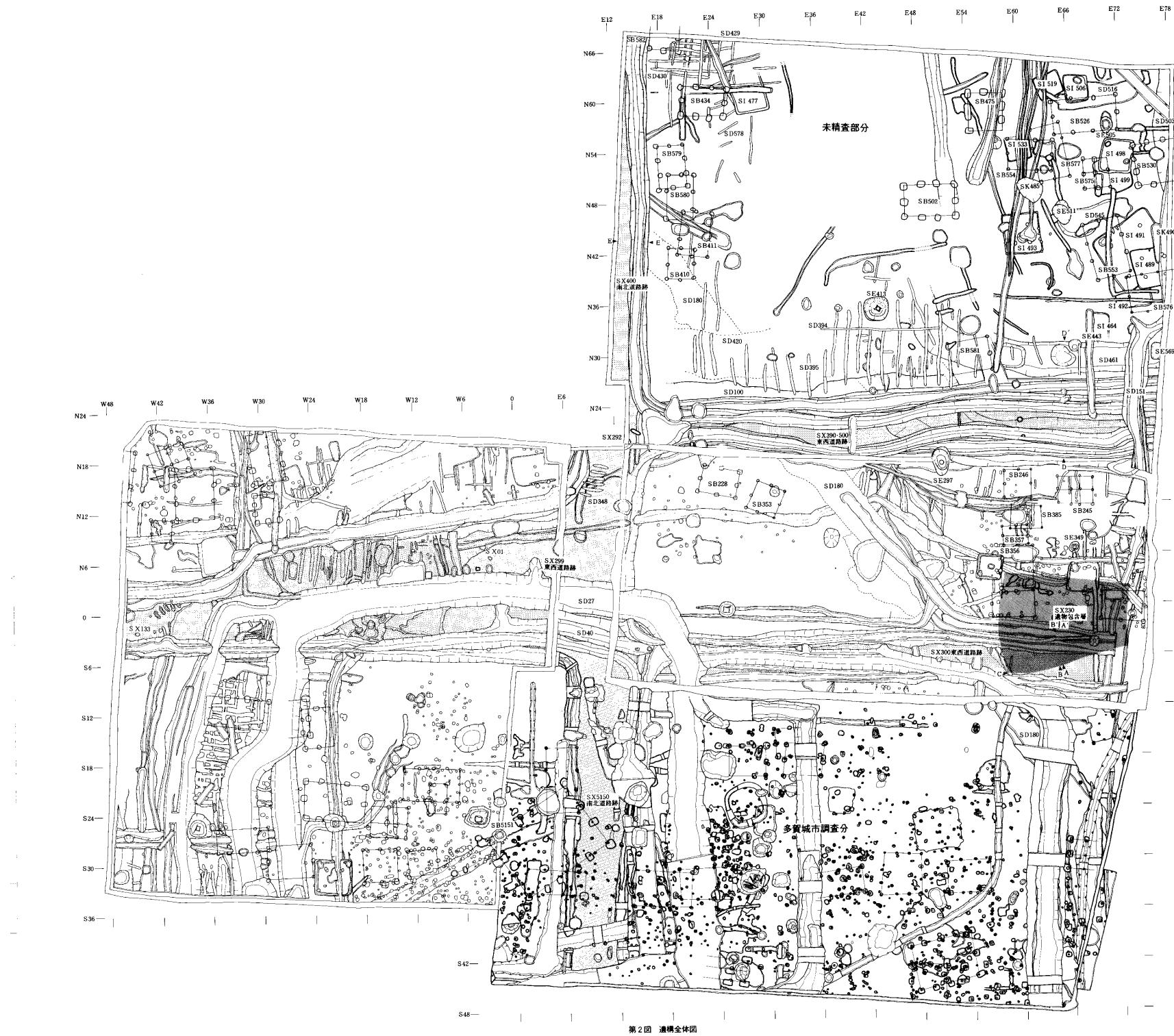
山王遺跡はこれまでに多くの調査が実施され、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構や遺物が多数検出されている。古墳時代の遺構は山王二区・西町浦・東町浦の各地区で検出されている。とくに西町浦地区では中期の土壙墓や竪穴住居跡とともに多量の石製模造品が出土している。また、東町浦地区では同時期の木組み遺構が検出されている。奈良・平安時代については多賀城跡との関連から遺構・遺物とも非常に多く、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙などが多数検出されている。そのなかでも第4・8次の東町浦地区的調査では、多賀城跡外郭南辺とほぼ平行する幅12mの東西方向の道路跡が発見されている。

III 発見された遺構と遺物

今回の調査は、昨年度調査したB区の北側約3,500m²(C区)とA・B区の中間で昨年末調査の農道部分約150m²(A-B区)を対象として行った。また、昨年度B区において未精査であった一部の遺構についても併せて調査を行った(第2図)。

平面図作成にあたっては、昨年度設定した原点(0,0)をもとに東西・南北の基準線を延長し、調査区内に3m毎の方眼を組んで行った。原点の国家座標はX=188.888.000、Y=13.230.000である。

今回の調査では、次のような遺構が検出された。道路跡3条、掘立柱建物跡20棟以上、竪穴住居跡11軒、井戸跡8基、土器埋設遺構1基、敵状遺構4面、溝跡80基以上、土壙80基以上、河川跡3条、多数の柱穴などである。またこれらの遺構や堆積層、表土などからは、土師器、須恵器、赤焼土器、陶磁器、瓦、鉄製品、銅製品、土製品、石器、石製品、古錢、木製品、



第2図 遺構全体図

竹製品、骨角器、動植物遺体などが出土し、量的には整理用の平箱で200箱以上になる。以下、古墳時代、古代、中近世の順に遺構および遺物の概要を説明する。

なお、調査が中途であることから現時点で明らかになっている遺構・遺物について報告することとし、その他のものについては本報告あるいは来年度の概報において詳細を述べることとする。

1. 古墳時代

古墳時代の遺構としては遺物包含層、竪穴住居跡7軒、井戸跡1基、溝跡、土壙などがある。

A. 遺物包含層

【S X230 遺物包含層】B区南東部のS X300 東西道路跡周辺で検出された。古代の遺構の検出面となった黄褐色シルト層によって覆われている。調査はこのシルト層を除去し、包含層の面的な広がりを捉えながら行った。最終的には東西約13m、南北約9mの範囲を調査した。

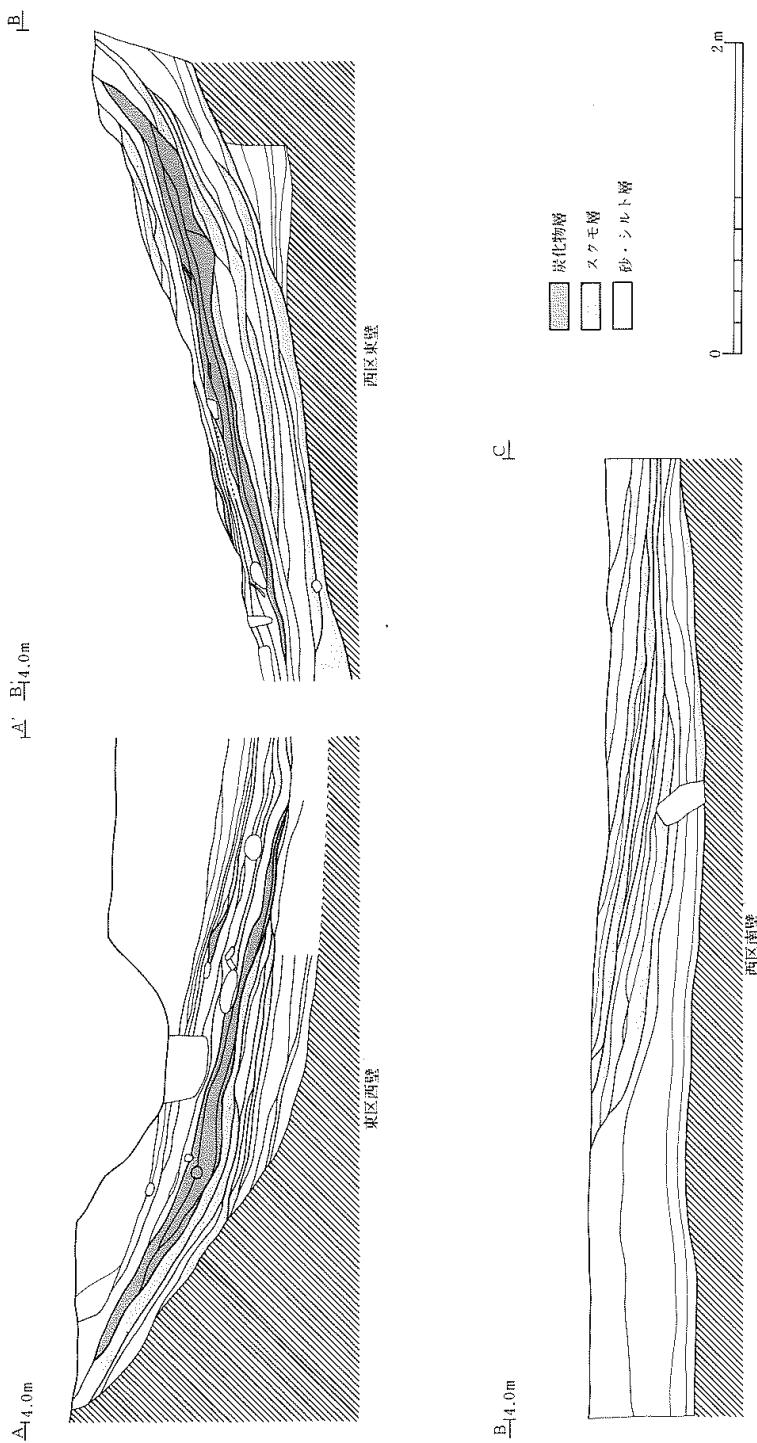
a. 層の堆積状況

S X230 遺物包含層は、遺跡の北から東を流れる砂押川の氾濫や流路の変化によって形成されたと考えられる北西方向から延びてくる自然堤防の北側の落ち際に堆積したものである。この斜面は北東方向に向かって傾斜しており、斜面上方で約30°、斜面下方で約10°の傾斜角をもつ。包含層はこの傾斜に沿って形成され、斜面上方では下層ほど傾斜が急である。層相は人為的な廃棄による炭化物層と砂およびスクモの自然堆積層からなり、これらが互層を成して包含層を形成している。平面的には炭化物層を中心としてまとまり、調査区内ではほぼ完結することから、廃棄は斜面の中でもこの場所を踏襲して繰り返されたものと思われる。最大厚は約70cm、深いところで古代の遺構面から1.8m程を測る。層の識別にあたっては土色、土質、含有物などの違いをもとに行い、調査区中央に設定した断面観察用のベルトを挟んで東で33枚、西で58枚を確認した。いずれも2~15cm程の薄い層で、炭化物層は斜面下方に向かって長い9×8m程の面的な広がりをもつ。

b. 遺物の出土状況

遺物は、層そのものがきわめて薄いため帰属する層位の認定が難しいものもあるが、炭化物層はもとより一部の層を除きほぼ全層から出土した。このことは自然堆積層が堆積する過程でも、断続的に廃棄が行われていたことを示している。出土状況としては斜面の上位ほど遺物量が多く、面的にもまとまりをもつ。斜面の下位では遺物が広い範囲に分布する反面、量的には少なく破片資料が多い傾向にある。また、これらの中には斜面の上位の

第3図 SX230 遺物包含層断面図



ものと下位のもので接合するものもあることから斜面の下位で出土した破片資料の多くは、廃棄の際あるいは廃棄後に本来のまとまりから離れて堆積したものと思われる。

c. 出土遺物

遺物包含層からは多量の土器をはじめ、骨角器、木・竹製品、石製品、動植物遺体など多種多様の遺物が出土した。これらの遺物の多くは、通常の遺跡では腐朽・消滅し残らない有機質のものであり、個々の遺物のみならず、これまで空白であったこの時期における諸々の活動を明らかにする上でも貴重な資料である。これらの遺物については現在整理中であり、今回報告するのはそのごく一部で代表的なものである。

以下、各種類ごとに説明するが、遺物の取り上げに際しては一部の遺物(一括土器・木製品など)についてのみ平面的な位置を記録した。その他のものについては“斜面上方” “斜面下方” “層の末端部”など大まかに分けて取り上げただけで、個々の平面的な位置は捉えていない。これは各層が一括して廃棄されたまとまりであり、その中の位置関係は意味を持たず、また前述のように本来の位置から移動したものもあると考えられるからである。また、手掘り発掘では検出不可能な微細遺物を抽出するため、土壤は総て採取し、4mmのフリイを用いて水洗選別(一部1mmでも実施)を行った。ただし、ベルトを挟んで西側の調査区では各層から整理用平箱(内測長さ54.0×幅33.5×高さ14.2cm)で1~2箱を最低基準として、層のまとまりや遺物の多寡に応じた量の土壤を適宜採取した。これについては、水洗処理が終わっていないため内容物の詳細は不明である。

なお、この遺物包含層を構成する層の堆積環境や遺跡をめぐる当時の自然環境などを明らかにするため大阪市立大理学部辻誠一郎氏に依頼し、珪藻および花粉分析用に土壤を採取した。また、植物遺体の検出および樹種同定ためのサンプリングも併せて行った。

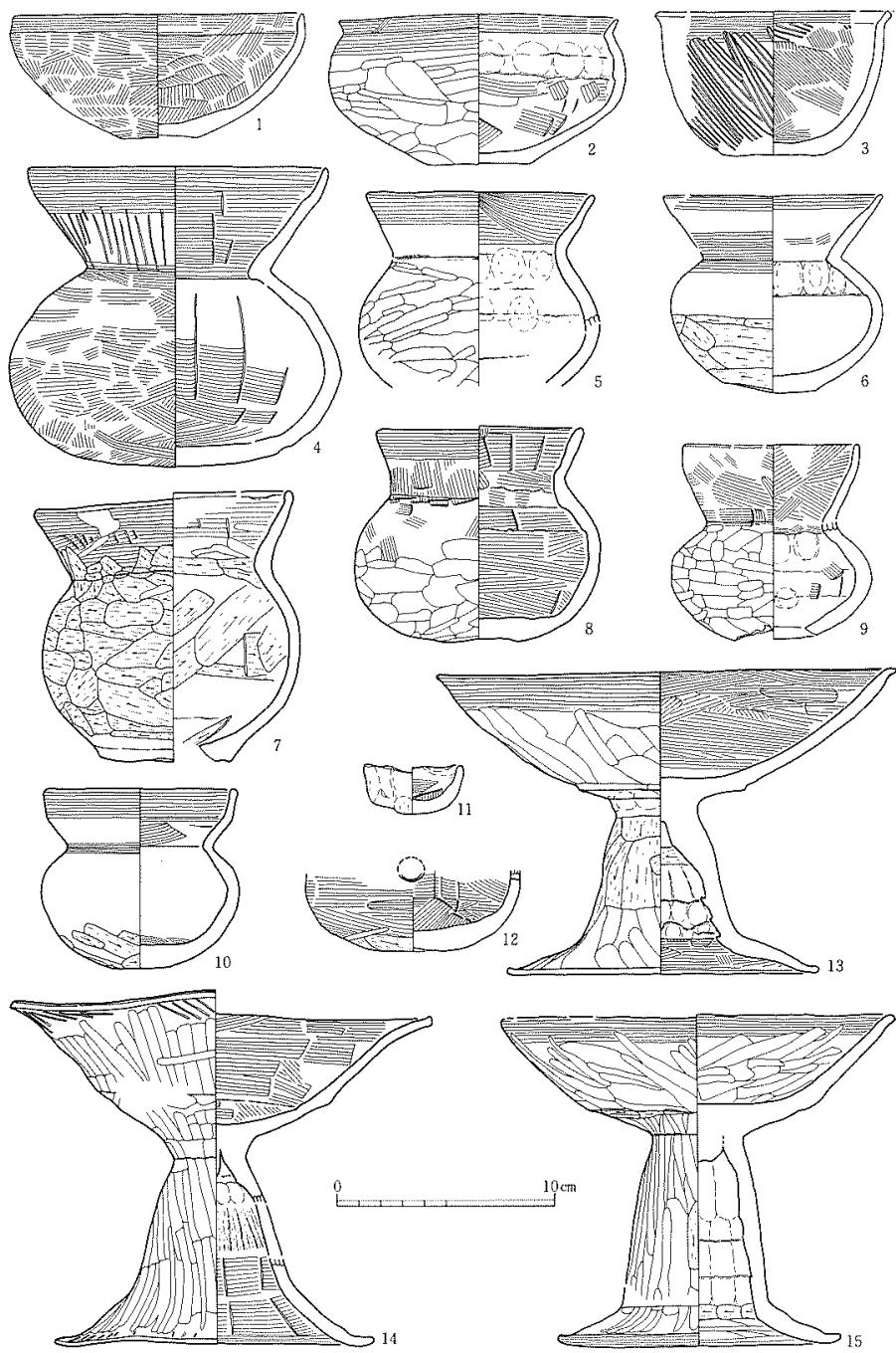
1 土器

土器は多量に出土しており、量的には整理用平箱で30箱ほどある。すべて土師器で、壺、高壺、壺、甕である。

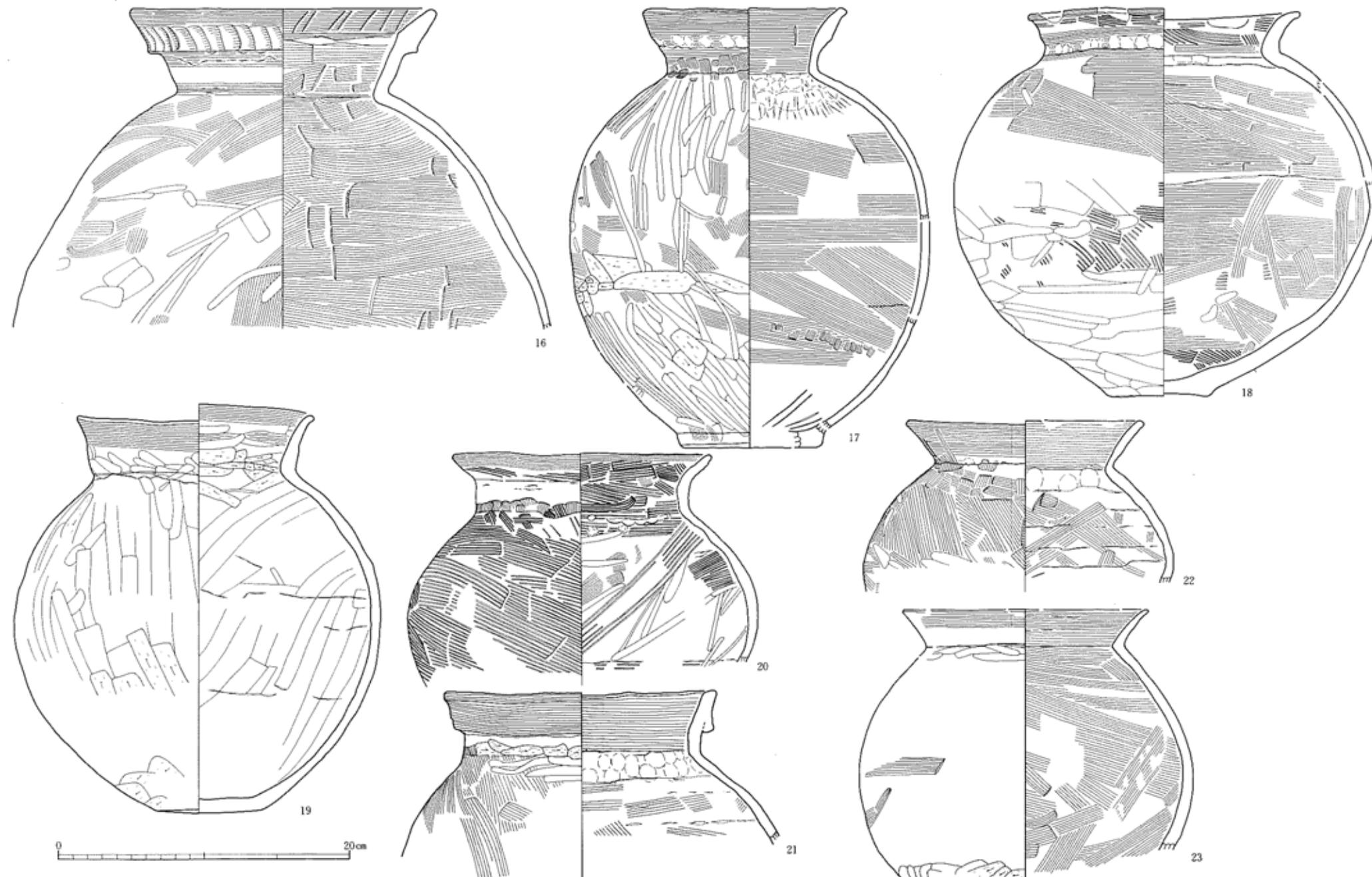
壺は図示できるものは3点で、他に小破片が数点みられるだけである。1はやや上底気味の小さな平底で、体部は内彎しながら外傾し、口縁部は直立する。内外面が赤彩されている。2は小さな平底で、体部は底部付近では直線的に外傾し、上部では内彎しながら立ち上がり頸部で屈曲し口縁部が短く外傾する。3は平底で、体部が内彎しながら直立気味に立ち上がり、口縁部が短く外傾している。

高壺は多量に出土しており3点図示した。赤彩されているものが少量存在する。また、脚部が轍の羽口に転用されたものもある。

壺部は体部から口縁部にかけて外傾し、底部が丸底気味のもの(14)と、平底のもの(13・



第4図 S X 230遺物包含層出土遺物（1）



番号	種別	出土地・層	外 壁 の 調 査		内 壁 の 調 査		底 面	口 径	底 径	高 度	壁 厚	容 量	参考文献
			直 土	側 土	直 土	側 土							
1	土器部	II 5層	口縁部コロナデ、体部へラナデ		ヘラナデ		ヘラケズリ	13.2	3.4	5.7	R-625	3-1	
2	土器部	II 西230 6層	口縁部コロナデ、体部へラナデ		口縁部へラナデ、体へ底部オサム、ヘラナデ		ヘラケズリ	12.8	4.7	6.9	R-628	3-2	
3	土器部	II 7層	口縁部コロナデ、体部ハナメ		口縁部コロナデ、体へ底部ハナメ、ヘラナデ		ヘラケズリ	10.8	4.6	6.7	R-627		
4	土器部	II 2層	口縁部コロナデ、ハナメ、体へ底部へラナデ		口縁部コロナデ、ヘラナデ、体へ底部へラナデ		ヘラケズリ	13.6	—	13.9	R-622	3-6	
5	土器部	II 1層	口縁部コロナデ、ヘラナデ、体部へラナデ		口縁部コロナデ、ヘラナデ、オサム		ヘラケズリ	10.4	—	—	R-620		
6	土器部	II 1層	口縁部コロナデ、ヘラナデ、体部カゲ、ケズリ		口縁部コロナデ、ヘラナデ、オサム、体部カゲ、ケズリ		ヘラケズリ	10.9	4.3	6.1	R-622		
7	土器部	II 西230 1層	口縁部コロナデ、ヘラナデ、ヤズリ、体部ケズリ		口縁部コロナデ、ヘラナデ、ヤズリ、体部ケズリ		ヘラケズリ	11.9	6.0	12.5	R-647		
8	土器部	II 西230 7層	口縁部へラナデ、体部ハナメ、オサム		ヘラナデ		ヘラケズリ	8.5	3.8	9.9	R-621		
9	土器部	II 2層	口縁部へラナデ、体部ハナメ、オサム		口縁部へラナデ、体部ナデ、ヘラナデ、オサム		ヘラケズリ	8.1	—	9.9	R-614	3-3	
10	土器部	II 西230 6層	口縁部へラナデ、体部ナデ、ヘラナデ		口縁部へラナデ、ナデ		ヘラケズリ	8.8	2.6	8.3	R-648		
11	土器部	II 西230 6層	ナデ、オサム		ナデ、ヘラナデ		ナデ	4.9	1.5	2.3	R-649		
12	土器部	II 西230 6層	体部へラナデ、ヘラケズリ				ヘラケズリ	—	—	—	R-628		
13	土器部	II 2層	井口縁部コロナデ、底部開口ギザ、輪郭ケズリ				シガキ、井部へナデ、輪郭オサム、ヘラナデ	25.0	14.3	14.5	R-648	7-2	
14	土器部	II 5層	口縁部ハナメ、シガキ、輪郭トギサ、ハナメ				輪郭へラナデ、輪郭オサム、ヘラナデ	19.4	14.7	19.4	R-621	7-4	
15	土器部	II 4層	井口縁部コロナデ、底部開口ギザ、輪郭ケズリ				輪郭コチヂ、1ガキ、輪郭オサム、ケズリ	18.0	13.9	15.2	R-623	7-5	
16	土器部	II 5層	口縁部へラナデ、体部へラナデ、シガキ				ヘラナデ	28.0	—	—	R-644		
17	土器部	II 2層	口縁部へラナデ、ヘラナデ、体部ハナメ、ケズリ、シガキ				口縁部コロナデ、ヘラナデ、体部へラナデ	14.1	9.2	20.1	R-615	8-5	
18	土器部	II 2層	口縁部ハナメ、ハナメ、ヘラナデ、体部ハナメ、ヒビ、ハナメ				輪郭ハナメ、ヘラナデ	18.0	6.6	26.7	R-617	8-6	
19	土器部	II 西230 6層	口縁部コロナデ、シガキ、ケズリ				輪郭ハナメ、1ガキ、ラズリ、体部へラナデ、シガキ	16.2	7.2	28.1	R-624		
20	土器部	II 4層	口縁部リリナデ、ハナメ、ヘラナデ、体部ハナメ				輪郭ハナメ、ハナメ、体部ハナメ、1ガキ、ヘラナデ	17.8	—	—	R-622	8-1	
21	土器部	II 2層	口縁部コロナデ、底部シガキ、ヘラナデ				輪郭コロナデ、体部オサム、ヘラナデ	18.5	—	—	R-628	8-2	
22	土器部	II 10 層下	口縁部コロナデ、体部へラナデ、シガキ				輪郭コロナデ、体部オサム、ヘラナデ	16.4	—	—	R-625	8-4	
23	土器部	II 10 層下	口縁部コロナデ、ナデ、体部カゲ、シガキ、ヘラナデ				輪郭コロナデ、ヘラナデ、体部へラナデ	15.8	—	—	R-649	8-2	

第5図 S X230遺物包含層出土遺物（2）

15) とがある。いずれも壺部外面に明瞭な稜もしくは段を持つ。脚部はすべて中空であり、裾部にかけて開く円筒状で、裾部は「八」字状に強くひらくものが大部分である。これらには円窓はみられない。

壺部と脚部は、壺部から棒状の粘土を脚部に差し込み固定する方法で接合されているものが大部分である。

壺は多量に出土しており、赤彩されているもの(9)が少量存在する。法量から小型のものと(5~10)、中型のもの(4)、大型のもの (16・17・21) とがある。

小型のものは口縁部が外傾し、体部が潰れた球形のもので、口縁部と体部の最大径がほぼ等しい。口縁部には単純に外傾するものと (5~8) 、いくぶん内彎気味のもの(4・9・10) とがあり、底部は小さな平底である。また、これらのなかには焼成後に底部に穿孔されたもの (7・9) が存在する。

中型のものは口縁部がいくぶん内彎気味に外傾し、体部が潰れた球形で丸底のものである。

大型のものは複合口縁で、体部は球形になると思われるものである。口縁部が外傾するものと(16・17)、直立して外傾するもの(21) とがある。

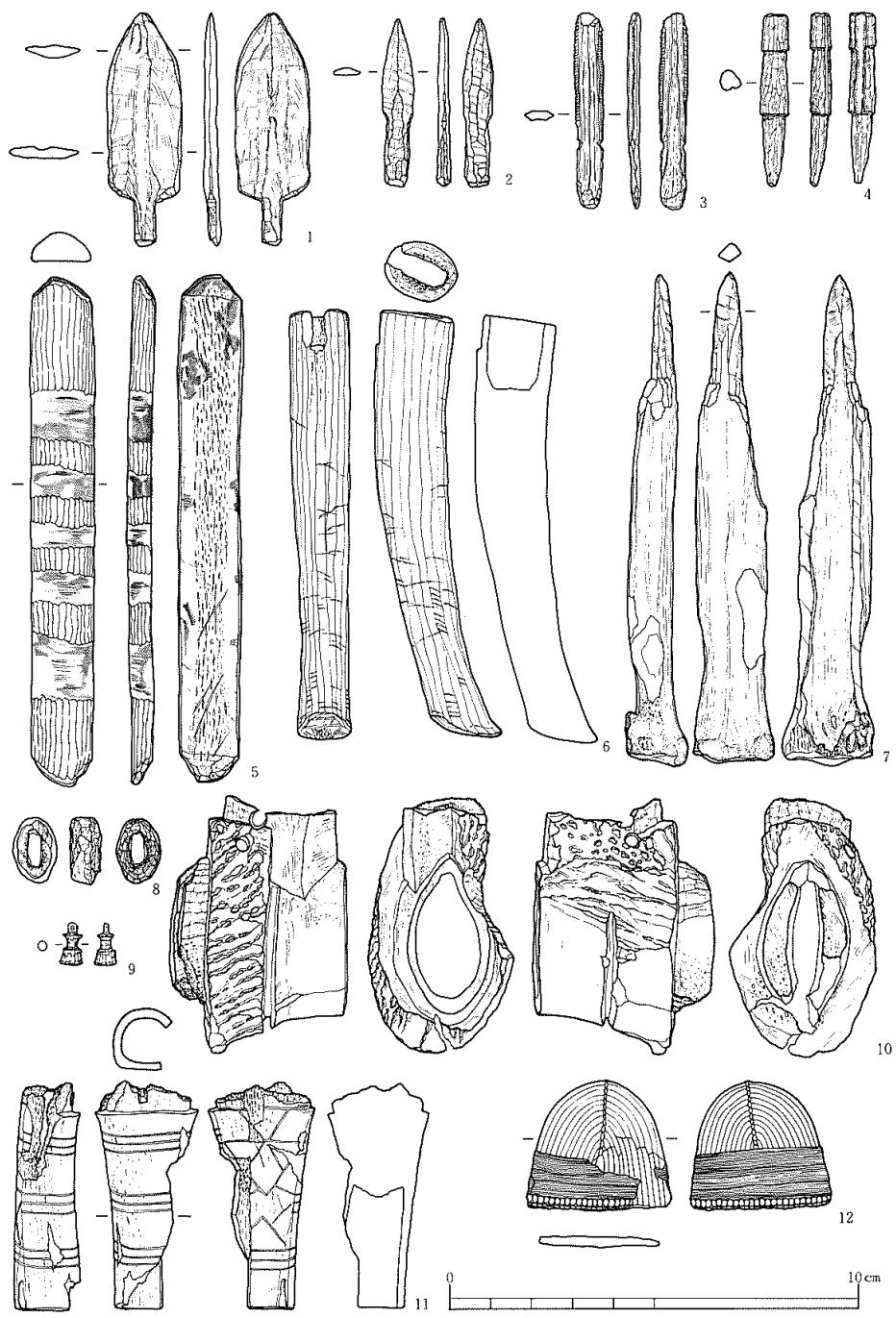
甕は多量に出土しており、媒などの付着物が目立つ。口縁部は外反するもの(18・19)、外傾するもの (22・23) 、直立して外傾するもの(20) とがあり、いずれも体部は球形である。

このほかに 鳥とミニチュア土器がある。鳥は底部の破片で、体部は潰れた球形と思われ、小さな平底である。最大径のある部分に円孔があけられている。ミニチュア土器は壺である。

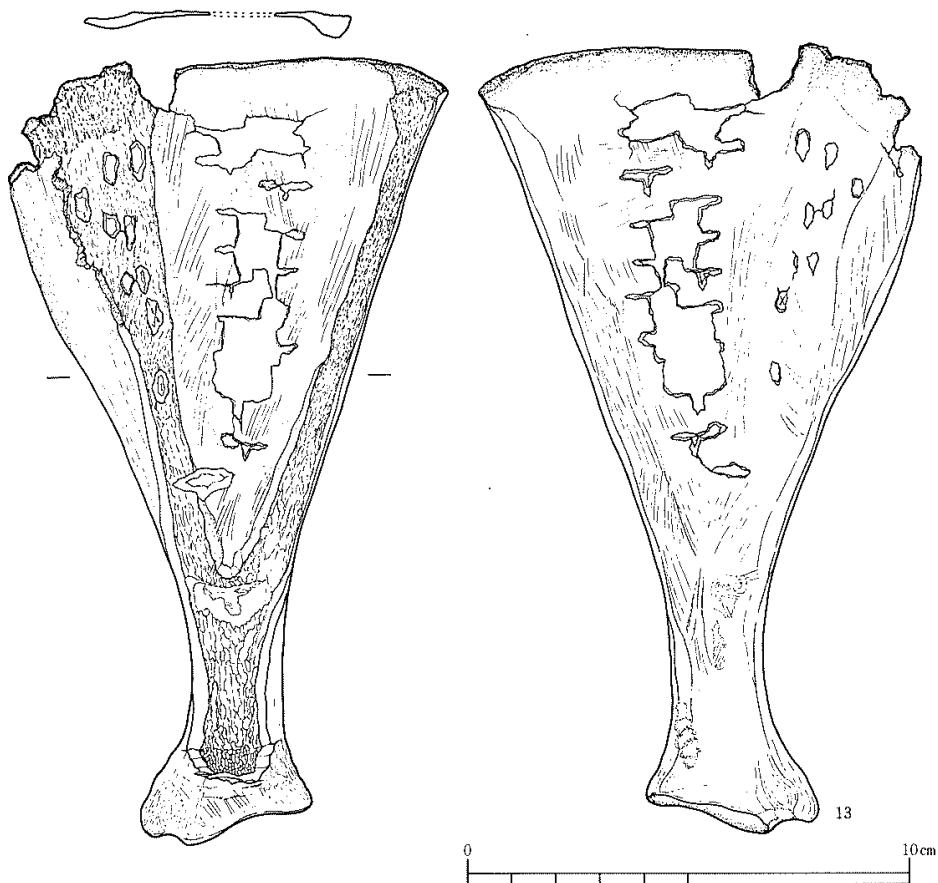
2 骨角器

これまでにわかつたもので鏸、弔、刺突具、刀子把、刀装具などがある。製品としては15点程であるが、これらの未製品や未整理のものも含めるとかなりの数になるものと思われる。製作に際しては金属器を使用しており、素材取りや大まかな整形段階のものには状の工具による痕跡(図版11-9・10) が、細かな整形および仕上げ段階のものには刀子状の工具による削りの痕跡(図版11-11・12) が明瞭に認められる。また、これらの骨角器とともに、素材となつた鹿角や骨、製作過程で廃棄された廃材や屑も多量に出土している。

骨製の鏸は5点出土した。形態的には図示した4種類のものからなる(第6図1~4)。1はニホンジカの中足骨の前面もしくは後面を素材にして、長三角形式柳葉形の鏸身に茎を作り出したものである。鏸身の断面は両面に稜を持つ菱形状を呈するが、全体的に薄く素材と形態からみても必ずしも実用的なものとは言い難い。表裏には素材を示す縦溝およ



第6図 S X230遺物包含層出土遺物（3）



番号	種別	出土層位	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	素 材	備 考	図 版
1	鎌	層位不明	57	18	3	ニホンジカ中足骨		9-1
2	鎌	東2 g層	31	8	3	骨	削り明顯。	9-2
3	鎌	西9層	(48)	7	3	ニイ尾鱗	先端欠損。	9-4
4	鎌	西26 e層	(43)	7	5	ニホンジカ中手or中足骨	先端欠損。火を受け白色灰化。	9-5
5	刃?	東2 b層	125	15	6	鹿角	削り明顯。体部5×8mmに黒色擦布(ほか?)。	9-6
6	刀子把	東2層	105	基部(18)底部(18)	14	鹿角	基部内径13×6mm、深20mm。	10-1
7	刺突具	東9層	120	17	10	ニホンジカ中足骨L近位内側	刺突部長30mm、幅7mm、厚5mm。刺突部の削り明顯。	9-7
8	把?	東6 b層	7	16	11	鹿角	刀子把の一部か?。基部内径9×3mm、火を受け黒変。	10-4
9	?	東6 a層	10	6	6	鹿角	棒状の素材を櫛工。頂部に1mm程の孔を穿つ。	10-5
10	刀袋具	西20 a層	44	(62)	35	鹿角	把手道具。頭削(30×16mm)、尾削(25×8mm)、白色灰化。	9-9
11	?	西16層	(56)	26	16	鹿角	径12mm、深さ28mm程のソケット状の盲孔をもつ。	9-10
12	堅骨	東2 b層	(32)	35	3	竹	箆部破片。黒漆で固めた上に赤漆が一部残存。	16-3
13	ト骨	西26 f層	(179)	(102)	脛甲高<1mm	ニホンジカ脚甲骨L	背面面・肪骨面の凹面に焼灼痕。	12

第7図 S X 230遺物包含層出土遺物 (4)

び齶腔壁が痕跡的に残る。2は鎌身を細い柳葉形に薄く仕上げたもので、断面は三角形状を呈する。茎は浅い切り込みによって作り出されているが、鎌身関部は撫角であり、鎌身と茎の境が不明瞭である。素材の特徴を残しておらず断定できないが、ニホンジカカノシシの長骨を素材にしたものと思われる。3はエイの尾棘を利用したもので、全体の1/3下半に両側から「V」状の抉りを入れ、茎部を作り出している。4はニホンジカの中手あるいは中屋骨後面側方の稜を利用したもので、2ヶ所に鎌状の浅い切り込みがある。先端部が欠損しているため、全体の形態や大きさなどについては不明である。裏側には齶腔壁が溝状に残る。

附(第6図5)は偏平で横断面がカマボコ型を呈しており、やや彎曲する。体部表面には弓に固定するのに巻き付けた5条の纖維質の痕跡とその上を固めた漆とみられる黒色の塗布痕跡が残っている。これらは体部中央を中心にほぼ等間隔に認められ、これ以外の部分については弓に固定された後、軸に平行する粗い削りによって仕上げられている。その際に生じた、削りの方向と直交する刃先の痕跡も顕著である(図版11-12)。

刺突具(第6図7)はニホンジカの中足骨を縦割にして割断面を調整し、先端を尖らせたものである。骨の近位端から体部にかけての内側部分を素材に、先端部を遠位側に作り出している。身者は断面を菱形状に丁寧に仕上げているが、身部以外はほとんど手を加えていない。同様の形態のもので身部が折れているものも出土しており、かなりの力が加わるような用途に使用されたものと思われる。

刀子把(第6図6)は鹿角の枝の部分を素材にしたもので、素材の彎曲を生かして製作されている。全体をほぼ均等な径に仕上げ、把頭部も丁寧に削っている。表面には把の軸に平行する削りとこれと直交する金属器の刃先の痕跡が顕著に残る。刀子の柄を入れる孔は浅く目釘穴もない。把基部の刃部側が破損している。なお、鹿角装の刀子把については、素材および整形段階の未製品や破損品も出土しているが、いずれも同様の形態的特徴を持つものである。

刀装具(第6図10)は鹿角製のもので把縁装具にあたる。楕円錐台形の本体部と尾側の鞘口装具に挿入される突起部、背側の柱状突出部からなる。角幹基部から第1枝にかけての最も幅の広い部分を利用しておおり、本体の喰出鐸(はみだしつば)に相当する部分には自然面が顕著に残る。鍔(はばき)に相当する尾側の突起部および把間装具の挿入される柄穴の横断面はいずれも倒卵形をなす。柱状突出部には2個の貫通孔が穿たれているが、破損しており全体の形態や装飾については不明である。火を受け白色灰化状態にあり、一部焼けはじいている。なお、刃関部の孔をもとに推定すると刃幅が2.5cm、刃幅が0.5cm程度であり、この時期の刀としては小さいものである。

このほか用途不明の骨角器の中には、鹿角幹の髓質部をくり抜きソケット状に加工し、表には3条の線刻を3段に施し、裏には表からの3条の線刻と三角線刻を施しているものがある（第6図11）。破損のため全体の形は不明だが、横断面がカマボコ型をしており、孔は器体の1/2に達する。また、器体上部中央には透かしが認められる。

3 木・竹製品

木製の鋤および鋤未製品、竹製の籠編物（ザル・カゴ）、堅櫛などがある。また、このほかにも用途不明のものや未製品をはじめ、切り出しただけの材やこれらの廃材・屑も多量に出土している。なお、木製品の素材については樹種同定を行っていないため不明である。

鋤はいわゆる「ナスピ形」を呈し、刃部が二叉状をなすものである。着柄部は欠損しており不明だが、身部前面には膝柄着装のためと思われる溝状の削り込みが認められる。また、刃部先端には鉄製刃先の装着部が作り出されている。身部は長さ35.0cm、最大幅15.7cm、最大厚2.2cmで、着柄幅は3.7cm、刃先装着部は幅10.0cm、厚さ0.8cmである。

鋤は2本出土した。いずれも粗形段階の未製品で、柄と身が一本から大まかに作り出されている。柄と身が平行してまっすぐ伸びるもので、握り部は三角形状を呈する。第9図1は長さが123.0cmで、柄部は幅5.4cm、握り部最大幅15.3cmで、身部は長さ56.2cm、幅14.4cm、厚さ2.8cmである。2は長さが103.0cmで、柄部は幅6.2cm、握り部最大幅12.7cmで、身部は長さ46.8cm、幅14.4cm、厚さ4.1cmである。なお、これらは斜面下方において互い違いに2本並んだ状態で出土した。同様の製作段階にあり破損もしていないことから、何らかの理由でこの場所に置かれた可能性もある。

籠編物は4点出土したが、このうち形や大きさが推定できるのは図示したザルとカゴ2点のみである。ザル（第9図6）は円形の皿形のもので、口径約50cm、底径約48cm、口縁部は4cm程の立ち上がりを残している。底部は幅0.4cm程の竹条を用いて六つ目に編み、口縁部は底からの竹条で筋目に編んでいるが、縁については不明である。竹に節は見られず、布や漆などの痕跡も認められない。ただ、表と裏で底部の目の大きさが異なることから、異なる2枚の編物が重なった状態で出土した可能性が高い。一方、カゴ（第9図5）は円筒形を呈すると思われるもので、口径約35cm、現存高約35cmで、底部の形や大は不明である。幅1.0cm前後の竹条を用いて下半部は筋目に編み、上半部では下半部からの竹条で六つ目に編んでいる。縁は竹条を巻き付けて固定している。上半部には竹条を径6cm程に束ねた環状のものが編目に巻き付いているが、反対側では確認されなかった。また、植物の細い茎を束ねて編目に縛り付けている。

堅櫛は2点出土した。いずれも竹製の頂部破片で櫛歯部分は残存しない。第6図12は幅・厚さとも1mm程の薄く細長いひごを12枚重ね、中央を糸でかがって折り曲げ、頂部下端

をさらに糸でかがってひごで巻き付けたものである。全体を黒漆で固定しており、頂部には痕跡的にではあるが、赤漆が認められることから黒漆の上から赤漆塗りであった可能性が高い。

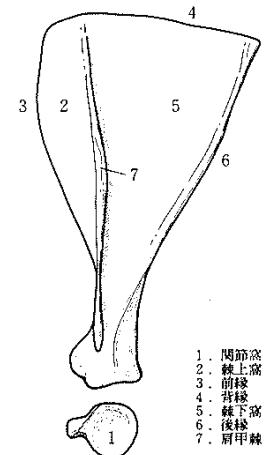
このほか用途不明の木製品の中に、刀剣の形をした材の側辺に鋸歯を刻んだものがある(第9図4)。柄と身からなり側縁を薄くし片側に歯をつけたもので、長さ19.5cm、幅3.9cm、厚さ0.9cm程のものである。作りが雑で使用の痕跡は認められないなど、日常的な生活用具というよりほむしろ祭祀に伴う木製の形代(刀形)の可能性がある。

4 石製品

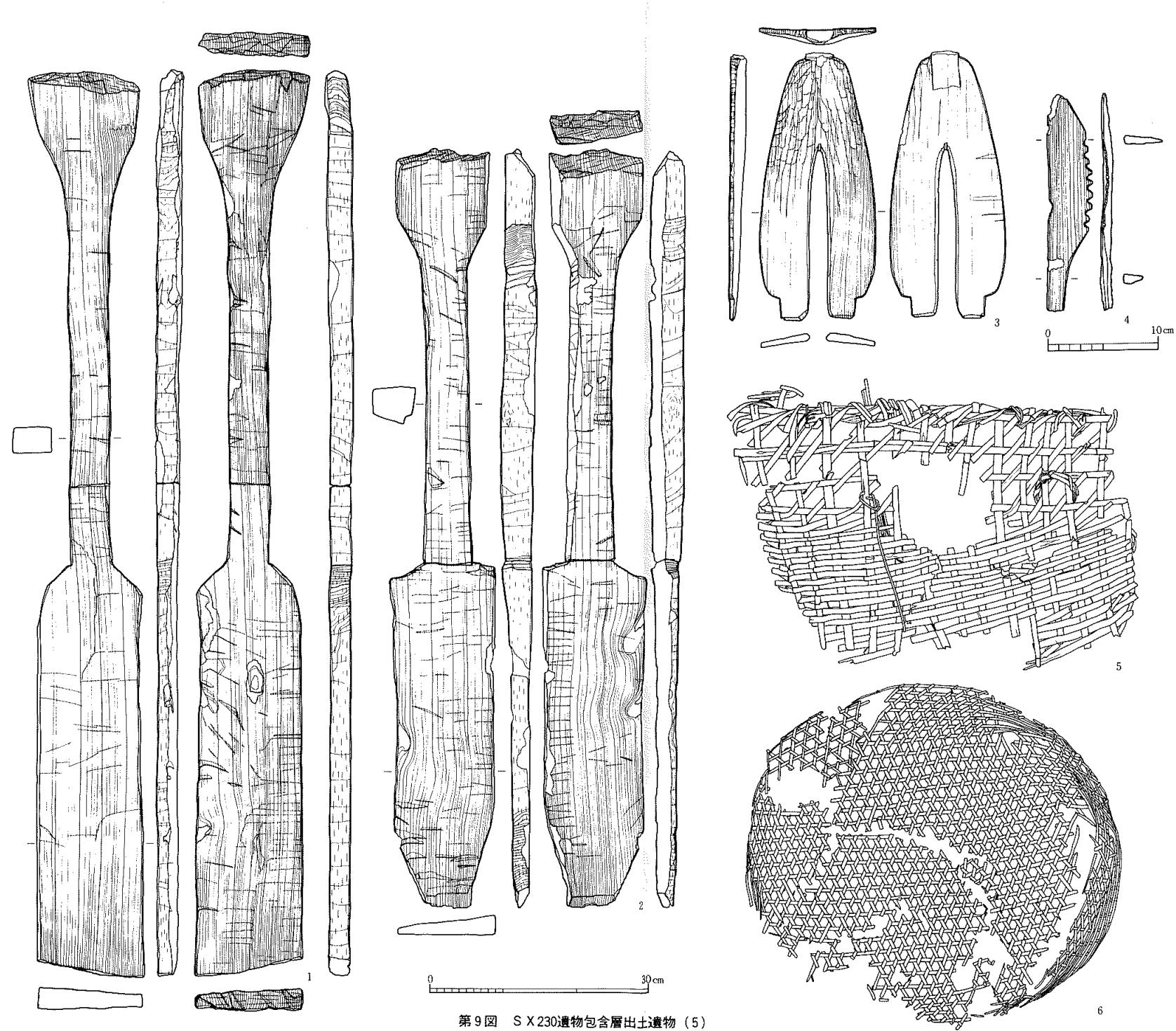
石製模造品とその破片が出土した(図版17)。西側の調査区については一連の作業を終えていないため、総数やその内訳については不明である。現時点では剣形石製模造品が4点、鏡形石製模造品が2点、これらの破片が5点、臼玉が273点出土している。

5 その他の人工遺物

このほかにト骨や鉛滓などが出土している。ト骨はいずれもニホンジカの肩甲骨が利用され、左傾肩甲骨が2点、右側肩甲骨が1点出土している。齢査定は行っていないが、大きさからみていずれも異なる成長段階にあるもので左側肩甲骨については2点とも若齢個体のものである。第7図はそのうちの1点で、素材の内外両面を削り、両側から灼を加えている。外側(背側面)は関節窩の上部から背縁に向かって肩甲棘および後縁の隆起部分を除去し、棘下窓を鋭利な刃物で削り、さらに研磨している。また、内側(肋骨面)も後縁の隆起部分をはじめ、肩甲窓のほぼ全面が削られ、同様の痕跡を残している。焼灼はこの加工痕を切って両面に加えられていることから、これらの行為は焼灼面を薄く、水平にするためのものであったと思われる。背側面における焼灼は肩甲棘を除去した海面質部分に行われ、9ヶ所で確認できる。灼痕は7×4mmの長楕円形状に残り、ほとんどのものが内側に達し貫通しているが、黒褐色に変色し直に火が当たったことを示しているものもある。一方、肋骨面における焼灼は肩甲下窓の薄平にされた部分に行われている。一辺が1cm前後の十字形状を呈する灼痕が縦に連続して2列認められ、これらが近接するところでは鉤形に焼け抜けている。他の2点のト骨についても約灼面の調整や



第8図 肩甲骨の細部名称（背側面）



第9図 S X 230遺物包含層出土遺物 (5)

焼灼方法は同様であり、内外両面に異なる焼灼痕を残している。焼灼による顕著な亀裂は認められないが、灼痕の数や位置に違いが認められることから、これらの違いが占いの目的や内容を具体的に示しているものと思われる。

鉱滓については、成分分析などの金属学的な分析を行っていないため、素材や精製段階については不明である。しかし、高坏の脚部を羽口に転用したものがあり、この周辺で鍛冶が行われたことは間違いないと思われる。

6 動物遺体

今回、以下に示す動物遺体が検出された。

貝類—ヤマトシジミ、カラスガイ科の一種、アサリ、マガキ?

軟骨魚類—エイ目の一一種

硬骨魚類—サケ科の一一種、マイワシ、マアジ、カツオ、クロダイ

棘皮類—ムラサキウニ

両生類—カエル類

哺乳類—ニホンジカ、イノシシ、イヌ

鳥類—種不明数種

ただし、すでに述べた通り西側の調査区については選別・同定・集計作業を終えていないため、遺物包含層全体についての種および量的な分析はできない。また、東側の調査区についても、資料の計測や細部にわたる観察など分析が不十分な状況にある。これらについては今後の課題とし、ここでは傾向および特徴を指摘するにとどめる。

今回得られた動物遺体の中で大半を占めるのはニホンジカとイノシシであり、とくにニホンジカはほぼ全層で出土した。ただし、全骨格が揃って検出されたものではなく、いずれも散乱した状態で検出されている。部位別の出現頻度については詳述することはできないが、ニホンジカでは角、肋骨、四肢骨とくに中手・中足骨、手・足根骨、指骨、イノシシでは四肢骨や指骨などが目立つ。この中で鹿角は、落角状態の頭骨が出土していないことや枝先の磨滅が進んでいることなど、いずれも枯角化した以後の特徴を示している。

これらの骨の残存状況としては、堆積後の環境や保存状況に起因するものも少なくないと思われるが、塊状を呈する骨(距骨、手根・足線骨、種子骨、指骨など)を除く長骨のほとんどのものが割れた状態にある。割れ口は骨が生の状態で割られたことを示すような螺旋状を呈するものが多く、四肢骨にいたっては部位や大きさを問わざることごとく破片となっている。このような状況については、一般的に骨髄摘出によるものと考えられている。

一方、これとは異なり金属器による剥離や削りの痕跡が認められるものがある。これはニホンジカの角や中手・中足骨などの骨角器の素材となつた特定の部位に顕著であることか

ら、骨角器製作に伴うものと考えられる。また、関節部付近を中心として認められ解体の際に付いたと思われる切傷(図版11-13)やイヌなどの肉食動物が噛ったと思われる痕跡(図版11-14)を残しているものもある。なお、これらの骨は焼けて黒変あるいは白色灰化状態にあるものが少なくない。現時点での原因や頻度について述べることはできないが、解体や骨髓摘出、骨角器製作の後で火を受けている可能性が高い。

この地の動物遺体については、量的に少なく当時の諸活動を反映するほどの資料は得られていない。ただし、検出された魚類についてはサケ科を除いて、おもに鹹水域に生息し、出現する季節が春～初秋頃に限られるという共通した生態的特徴を有するものである。イヌについては同一個体と思われる尺骨と橈骨が同一層から出土している。完存資料であり、ニホンジカやイノシシに見られるような人為的な痕跡も認められないことから、異なる扱われ方をしていた可能性がある。

7 植物遺体

炭化した材および種子が多量に検出された。ここではこれまでに確認された種名のみを列挙するにとどめる。同定にあたっては、辻氏の御教示を得た。

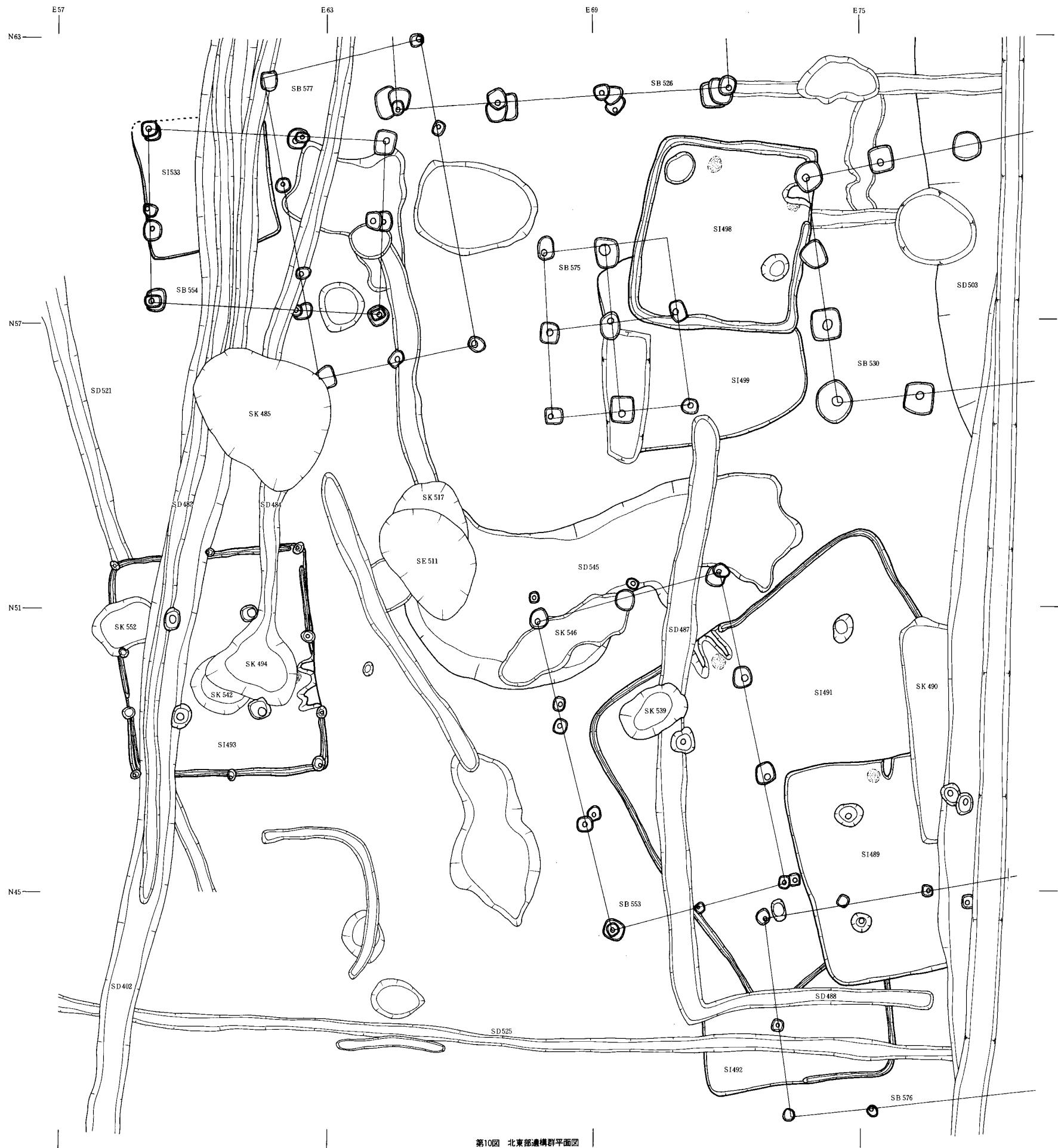
カヤ、マツ、クルミ、トチ、ブナ、クリ、ヒシ、エノキ、メロン仲間、ヒヨウタン仲間、イネ

B. 壺穴住居跡

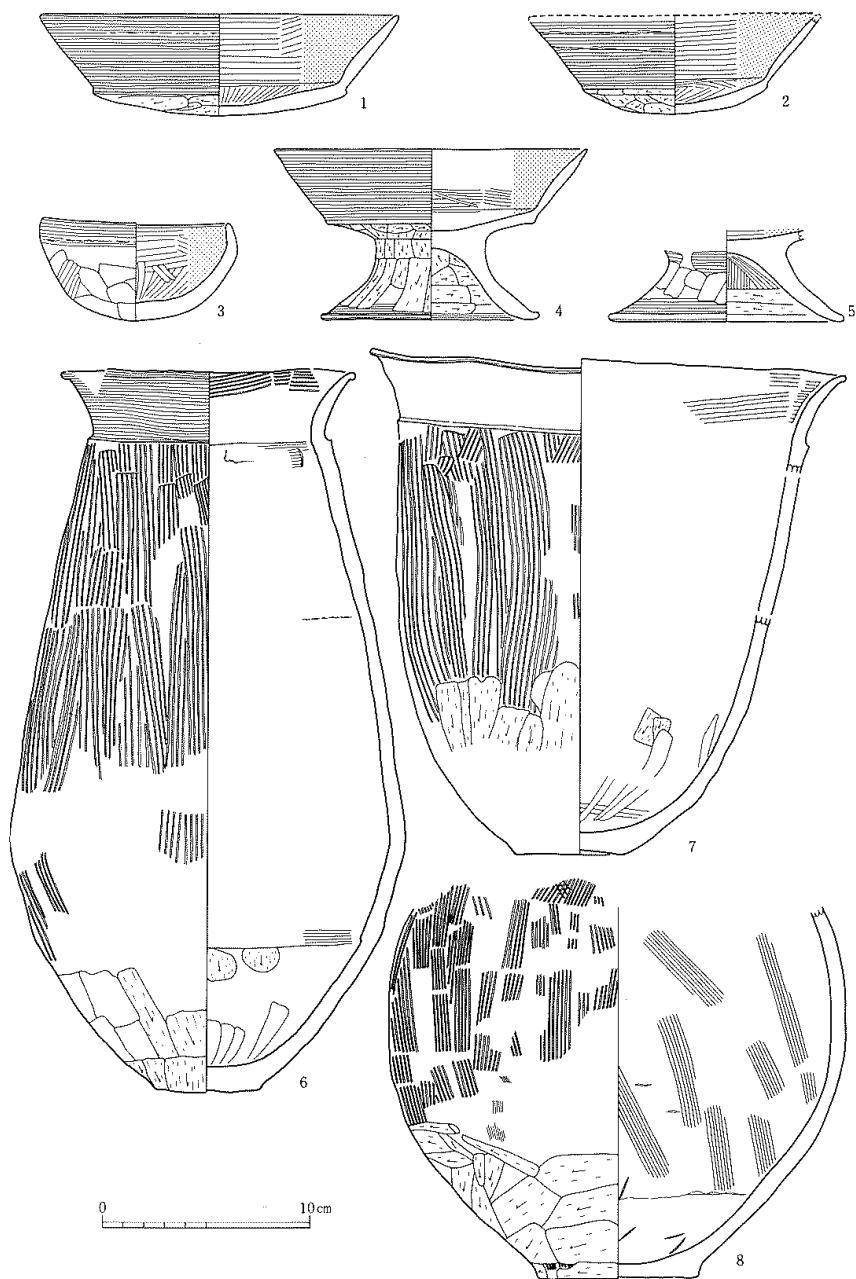
古墳時代の壺穴住居跡はC区北東部に集中して検出されたが、他の遺構や後世の搅乱等により削平されているものが多い。ここでは比較的残りが良く、遺物量の多いS I 491について説明する。

【S I 491壺穴住居跡】多数の遺構と重複しており、S B553掘立柱建物跡・S I 489壺穴住居跡・S D487, 488溝跡・S K490, 539土壙より古く、S I 492壺穴住居跡よりも新しい。一边が7.5mの正方形で周溝が巡っており、カマドは北辺の西寄りに位置する。住居の方向は西辺でN-40° -Wである。掘り方埋土の上面を床面としており、住居の中央部では硬い面を形成している。埋土は地山粒および炭化物を含む灰黄褐色の自然堆積土1層からなり、壁高は最も高い部分で約20cm残っている。周溝は断面が「U」形、幅約10cm程、深さ10cm程である。カマドは地山土を貼って作られている。柱穴は4個検出され、柱間隔は北辺で4.5m、西辺で4.3mある。形状は方形で一边が40～60cm程、深さ約40cmで、埋土はにぶい黄褐色土である。柱痕跡は直径約15cmの円形である。そのほかカマドの西隣で貯蔵穴と思われる1.5×1.0m、深さ40cm程の長楕円形を呈する土壙を1基を検出した。

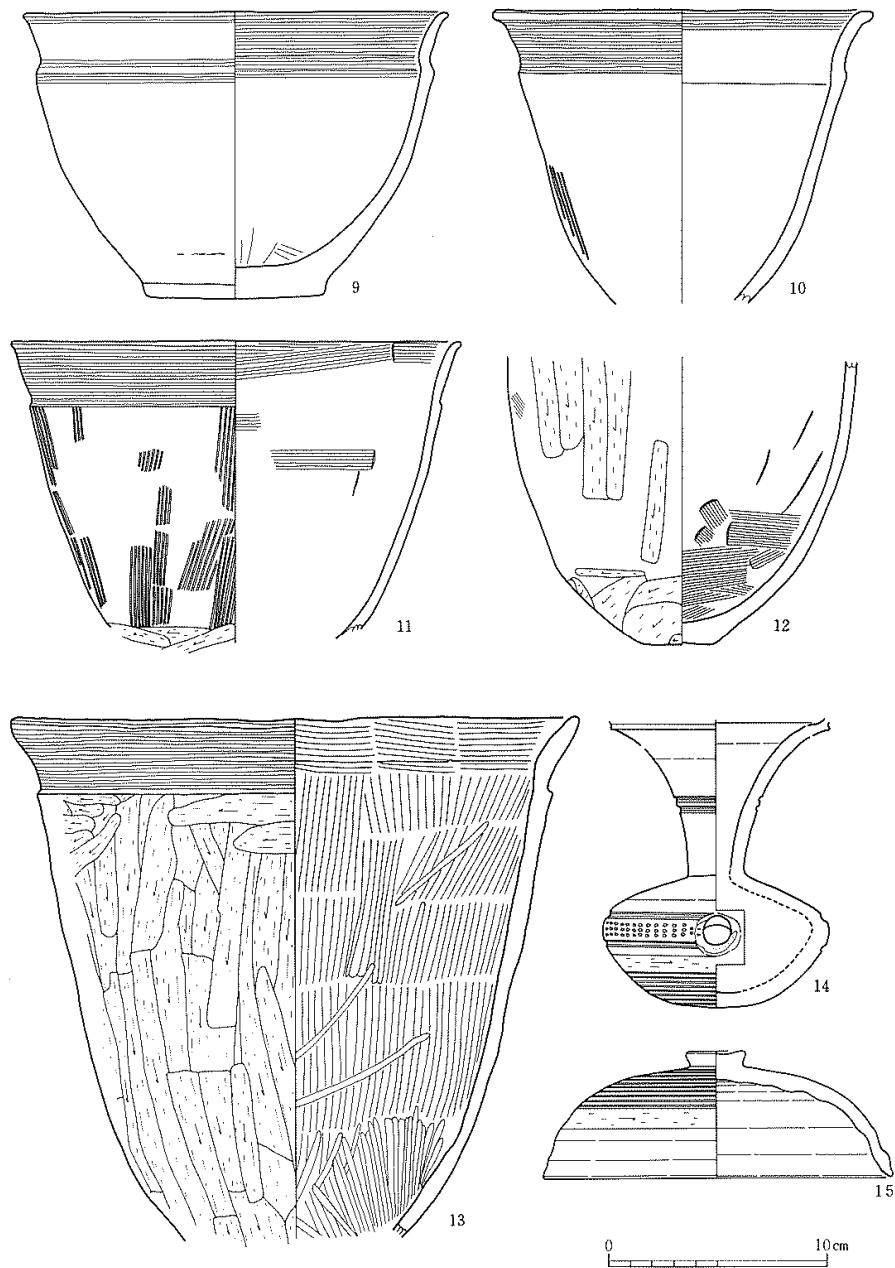
床面から土師器高坏(第13図4・5)・甕(6～9・11・12)・甑・(13・16)、須恵器甕(19)、



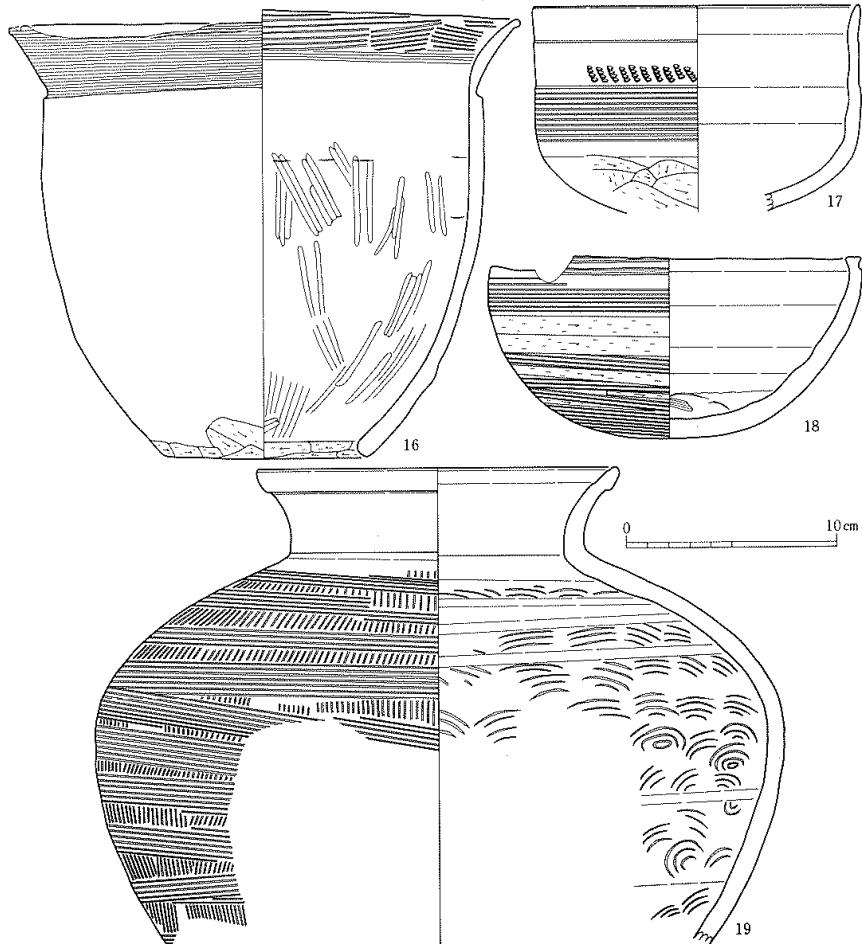
第10図 北東部構造群平面図



第11図 S I 491 出土遺物 (1)

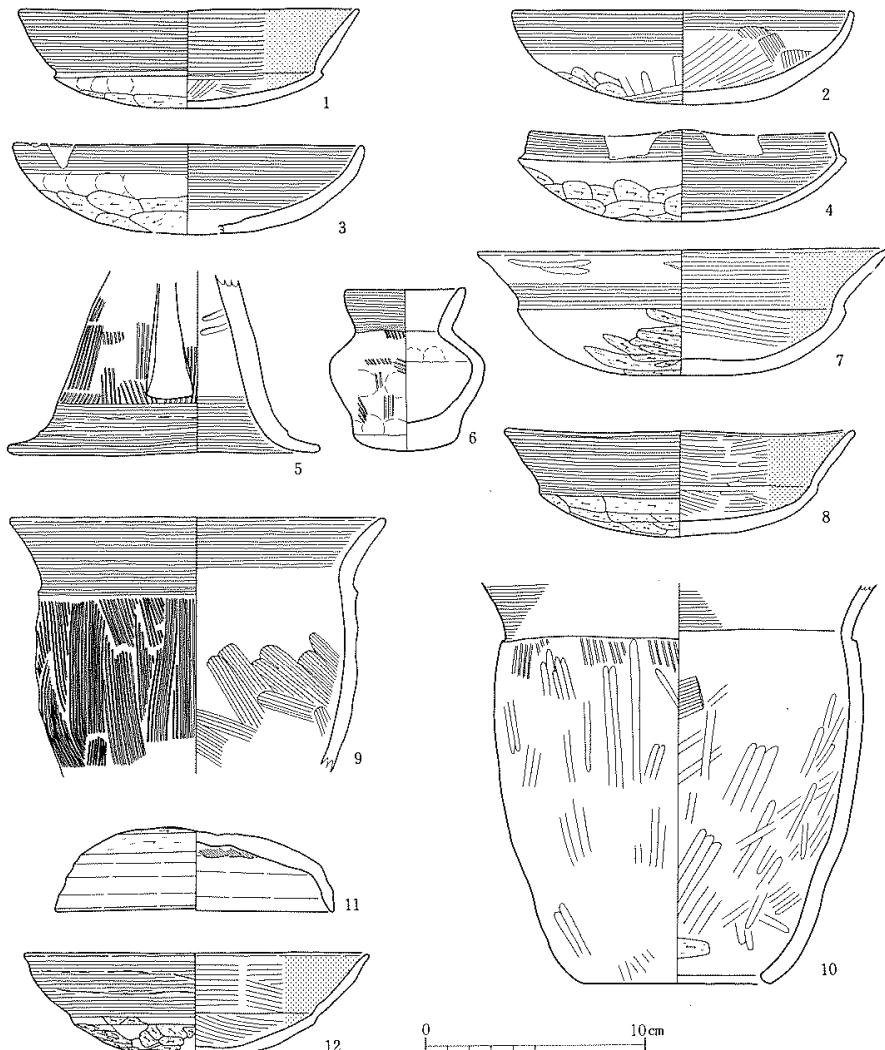


第12図 S 1491 出土遺物（2）



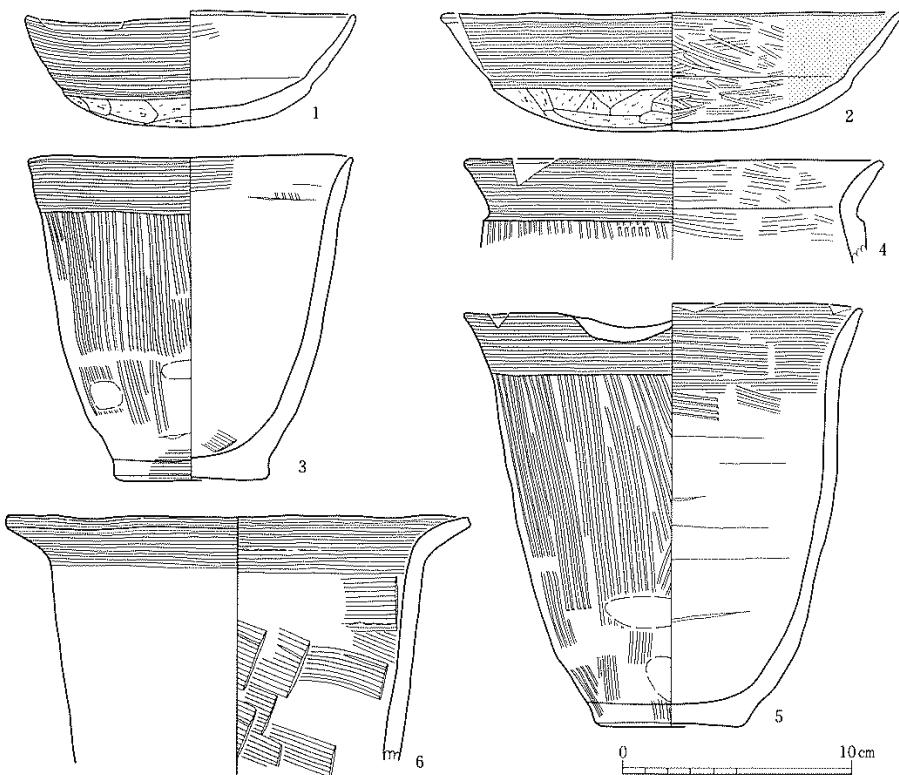
番号	種別	出土区・層	外面の調査	内面の調査	底	口径	底径	高さ	測定値	寸法
1	土師器 壺	SI-491 地植土	ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	17.4cm	12.3cm	4.9cm	R-518	
2	土師器 壺	SI-491 地植土	ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	14.0cm	8.9cm	4.3cm	R-519	
3	土師器 壺	SI-491 地植土	ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	9.0cm	4.0cm	4.7cm	R-520	18-1
4	土師器 高壺	SI-491 №8	坪ねじ、底部ハケズリ、脚ハケズリ、端部32mm	坪ねじミガキ、黒色処理、脚ヘラケズリ		15.2cm	10.6cm	8.3cm	R-522	18-2
5	土師器 高壺	SI-491 №8	脚ヘラケズリ、端部ヨコナデ	脚ヘラナデ、ヘラケズリ		—	11.4cm	—	R-521	
6	土師器 壺	SI-491 №2	口縁部ひげ、体部ハケメ、下部ヘラケズリ	口縁部ハケメ、ナデ、体部ナデ	ナデ	14.3cm	5.2cm	35.0cm	R-535	18-3
7	土師器 壺	SI-491 №1	口縁部ナデ、体部ハケメ	口縁部ナデ、ヘラナデ、体部ナデ	木製蓋	23.0cm	5.2cm	23.7cm	R-538	19-1
8	土師器 壺	SI-491 床面No.7	体部ハケメ、下部ヘラケズリ	体部ヘラナデ	ヘラケズリ?	—	7.7cm	—	R-526	
9	土師器 壺	SI-491 床面No.9	ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデ	19.6cm	8.0cm	13.2cm	R-537	
10	土師器 壺	SI-491 地植土	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ヨコナデ、体部磨感		17.4cm	—	—	R-524	
11	土師器 壺	SI-491 床面	口縁部ひげ、体部ハケメ、下部ヘラケズリ	口縁部ヘラナデ、体部ナデ、ヘラナデ		20.2cm	—	—	R-523	
12	土師器 壺	SI-491 床面No.4	体部ヘラケズリ	体部ヘラナデ	ヘラケズリ?	—	3.3cm	—	R-527	
13	土師器 壺	SI-491 床面No.5	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ		26.3cm	—	—	R-539	
14	須恵器 壺	SI-491 地植土	腹部平行状線、体部吹焼、施釉剥落	ロクロナデ	カキメ	10.2cm	—	14.2cm	R-531	18-4
15	須恵器 壺	SI-491 地植土	ロクロナデ、回形ハケメ	ロクロナデ		16.0cm	—	5.3cm	R-533	20-7
16	土師器 壺	SI-491 床面No.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ヘラケズリ	口縁部ひげ、ハケメ、体部ナデ、△328		24.4cm	9.8cm	21.5cm	R-536	19-2
17	須恵器 高壺?	SI-491 地植土	口縁部ひげ、体部細溝点列、回転状ヘリテ	ロクロナデ		15.6cm	—	—	R-532	
18	須恵器 転用壺	SI-491 地植土	回転状ヘリテヘラケズリ	ロクロナデ		—	3.7cm	—	R-530	18-6
19	須恵器 壺	SI-491 床面No.10	口縁部ひげ、体部平行印彫、回転状	ロクロナデ、体部同心円状板紋、ひげ		17.3cm	—	—	R-534	18-7

第13図 S I 491 出土遺物 (3)



番号	種別	出土区・層	外 面 の 調 査	内 面 の 調 査	底 部	口 径	底 径	高	壁 厚	総厚
1	土師器 瓢	SB-503 1層	ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	15.6cm	12.2cm	4.5cm	R-559	19-4
2	土師器 瓢	SB-503 1層	ヨコナデ	口縁面ヨコナデ、体・底部ハラメ、手付	ナデ、ケズリ、ミガキ	15.7cm	14.8cm	4.4cm	R-556	
3	土師器 瓢	SB-503 1層	口縁部ヨコナデ、体部オサユ	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ	16.1cm	15.0cm	4.2cm	R-557	
4	土師器 瓢	SB-503 1層	口縁部ヨコナデ、体部磨滅	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ	13.9cm	15.0cm	4.2cm	R-557	19-3
5	土師器 高 瓢	SB-503 1層	縦筋ナデ、ハケメ、横筋ヨコナデ	脚筋ナデ、横筋ヨコナデ	ナデ	14.2cm	—	—	R-558	19-9
6	土師器 瓢	SB-503 1層	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、オサエ	ナデ	5.6cm	4.8cm	7.4cm	R-559		
7	土師器 瓢	SB-516	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	18.8cm	15.0cm	5.8cm	R-626	
8	土師器 瓢	SB-516	ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	16.1cm	12.7cm	4.8cm	R-560	19-6
9	土師器 瓢	SB-516	口縁部ヨコナデ、体部ハラメ	口縁部ヨコナデ、体部ハラナデ	—	—	—	—	R-562	
10	土師器 瓢	SB-516	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	—	—	8.6cm	—	R-565	
11	須恵器 盖	SB-516	天井部包縫ケズリ、輪部ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	—	12.6cm	—	3.6cm	R-566	19-8
12	土師器 瓢	SE-505	ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	15.8cm	11.0cm	4.9cm	R-475	

第14図 北東部遺構群出土遺物（1）



番号	種別	出土区・層	外 面 の 調 整	内 面 の 調 整	底 部	口 径	底 径	器 高	登録No.	区分No.
1	土師器 壺	SI-489 堆積土	ヨコナデ	ヘラミガキ、大部分剥落	手持ちヘラケズリ	14.4cm	10.7cm	49 cm	R-541	19-7
2	土師器 蓋	SI-490 堆積土	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	ヘラミガキ	—	—	—	—	R-545	—
3	土師器 瓢	SI-498 カマド跡	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、ヘラナデ	木葉痕	14.2cm	5.5cm	14.1cm	R-546	—
4	土師器 蓋	SI-499 カマド内	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	木葉痕	17.4cm	6.1cm	16.2cm	R-544	19-5
5	土師器 蓋	SI-506 堆積土	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	—	—	—	29.2cm	—	R-540

第15図 北東部遺構群出土遺物（2）

住居埋土中から土師器壺(1~3)・甕(10)、須恵器高壺(17)・蓋(15)・匂(14)鉢(18)がそれぞれ出土している。

C. 溝跡

【S D503溝跡】C区北東隅で検出された南北溝で、溝の方向はN-10°-Wである。調査区の北端に分布する堆積層第3層に覆われる。S B530掘立柱建物跡、S D486・507溝跡と重複し、これらよりも古い。調査区の東端で検出され、しかも後世の削平により深さ0.2m程を残すのみで規模については不明である。埋土は土地山ブロックを多く含む自然堆積土からなる。埋土中から土師器壺(第14図1~4)・高壺(5)・甕(6)、須恵器甕が出土している。

【S D516溝跡】C区北東部で検出された東西溝で、溝の方向はE-10°-Nである。調査区北東端に分布する堆積層第3層に覆われる。S B526掘立柱建物跡、S I 505堅穴住居跡と重複

し、これらよりも古い。上幅約2.1m、下幅1.6m、深さ0.2m程である。埋土は炭化物を含む黒褐色の自然堆積土である。埋土中から土師器坏(第14図1・2)・甕(10)・甌(9)、須恵器蓋(11)が出土している。

【S D545溝跡】C区北東部で検出された東西溝で、溝の方向はE-15°～20°-Sである。S B 553掘立柱建物跡、S E511井戸跡、S D487溝跡、S K517・545土壙と重複し、これらよりも古い。規模は上幅2.0～3.0m、下幅1.5～2.5m、深さ約0.1m程で、大部分が他の遺構や後世の削平により壊されている。埋土は地山ブロックを多く含む自然堆積土からなる。埋土中から土師器坏・甕が出土している。

2. 古代

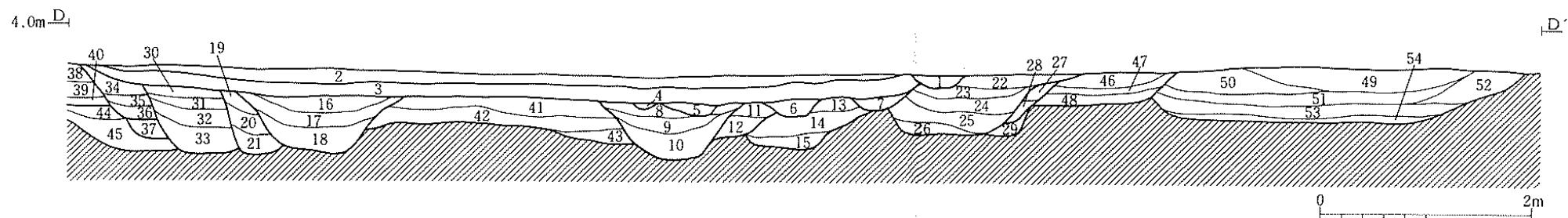
古代の遺構としては道路跡4条、掘立柱建物跡20棟以上、堅穴住居跡1軒、井戸跡5基、土器埋設遺構1基、畝状遺構4面の他に多数の溝跡、土壙などがあり、他に河川跡がある。

A. 道路跡

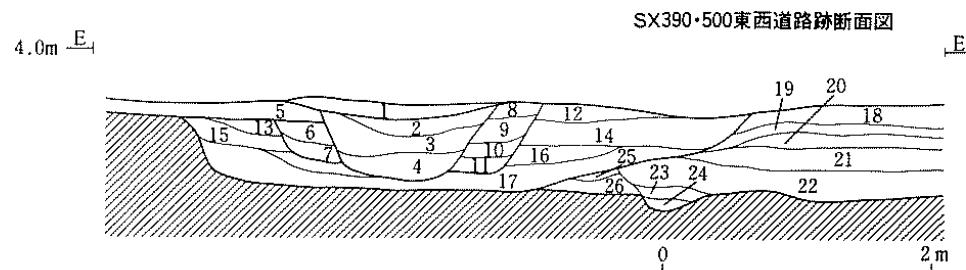
【S X299道路跡】A区およびA-B区で検出された東西道路跡で、A-B区北端でS X400南北道路跡・S X390東西道路跡と、南端でS X5150南北道路跡・S X300東西道路跡とつながる。昨年度の調査で、A区でS X300東西道路としたものの西側部分を含む。S D14・100河川跡、S D27・40溝跡などと重複し、S D14・27・40よりも古く、S D100より新しい。道路跡は南北両側と東側に素掘りの側溝を持ち、路幅はA区西端では南北の側溝が平行しており6.5m程だが、交差部分では北側溝が広がっているため約28mある。道路の方向は南側溝でE-3°-Sで、バラス等の路面施設は確認されなかった。側溝には4時期の変遷が確認され、これらはほぼ同位置で作り替えられている。側溝は、規模のわかるC期では、S D107が上幅1.0～1.5m、下幅0.5m、深さ0.5m程で、埋土は地山砂や灰白色火山灰を含む黒褐色の自然堆積土である。

時期	北側溝	南側溝	東側溝	接続	統一	備考
A	S D112			S X390A、S X400A、S X300A、S X5150A		
B	S D108		S D212	S X390B、S X400B、S X300A、S X5150B		
C	S D107	S D88A	S D211	S X390C、S X400C、S X300B、S X5150C		堆積土に灰白色火山灰を含む
D		S D88B	S D205	S X300C、S X5150D		

【S X390道路跡】B区南端で検出された東西道路跡である。S X500道路跡、S D151・359・360・180溝跡、S K267土壙、S D14・100・420河川跡などと重複し、S D151・359・360、S K267、S D14よりも古く、S X500、S D100・420よりも新しい。道路跡は両側に素掘りの側溝を持ち、C区南西隅でS X299東西道路跡およびS X400南北道路跡とつながる。灰白色火山灰が路面を直接覆う部分があり、バラス等の路面施設はなかった可能性がある。道路の方向は

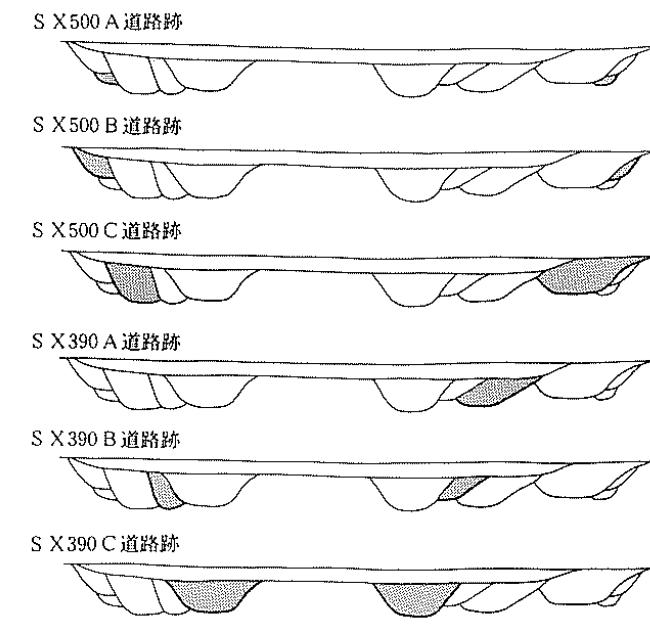


番号	土色	土性	備考	番号	土色	土性	備考	番号	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト		19	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	SD367 埋土 (SX390B南側溝)	37	リ-7黒色 (5Y3/1)	シルト	SD567 埋土 (SX500A南側溝)
2	黒色 (10YR2/1)	シルト	SD14 埋土	20	灰色 (5Y4/1)	粘土	SD367 埋土 (SX390B南側溝)	38	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	SD100 埋土
3	灰色 (5Y4/1)	シルト	SD14 埋土	21	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘質シルト	SD367 埋土 (SX390B南側溝)	39	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	SD100 埋土
4	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト		22	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト		40	黄褐色 (10YR4/3)	シルト	SD100 埋土
5	灰色 (5Y4/1)	粘質シルト		23	黒褐色 (7.5Y3/2)	シルト	SD379 埋土 (SX500C北側溝)	41	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	SD100 埋土
6	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘土質砂	SD386 埋土	24	リ-7黒褐色 (10YR4/3)	シルト	SD379 埋土 (SX500C北側溝)	42	黒色 (2.5Y2/1)	粘土	SD100 埋土
7	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘土質砂	SD387 埋土	25	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	SD379 埋土 (SX500C北側溝)	43	灰リ-7色 (5Y6/2)	粘土質砂	SD100 埋土
8	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	シルト	SD361 埋土 (SX390C北側溝)	26	灰色 (5Y4/1)	粘土質砂	SD379 埋土 (SX500C北側溝)	44	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	SD420 埋土
9	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト	SD361 埋土 (SX390C北側溝) 灰白色火山灰含	27	灰黃褐色 (10YR4/2)	シルト	SD425 埋土 (SX500B北側溝)	45	黒色 (5Y2/1)	シルト	SD420 埋土
10	灰色 (5Y4/1)	粘土	SD361 埋土 (SX390C北側溝)	28	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	SD425 埋土 (SX500B北側溝)	46	黄灰色 (2.5Y5/1)	シルト	
11	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂質シルト	SD373 埋土 (SX390B北側溝)	29	灰色 (5Y4/1)	粘土質砂	SD562 埋土 (SX500A北側溝)	47	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘質シルト	
12	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘質シルト	SD373 埋土 (SX390B北側溝)	30	暗灰黄色 (10YR4/1)	シルト	SD388 埋土 (SX500C南側溝)	48	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	
13	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	シルト	SD371 埋土 (SX390A北側溝)	31	灰黃褐色 (10YR4/2)	シルト	SD388 埋土 (SX500C南側溝)	49	灰黃褐色 (10YR4/2)	シルト	SD461 埋土
14	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘質シルト	SD371 埋土 (SX390A北側溝)	32	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	SD389 埋土 (SX500C南側溝)	50	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	SD461 埋土
15	灰色 (5Y4/1)	粘質シルト	SD371 埋土 (SX390A北側溝)	33	黒褐色 (2.5Y4/1)	粘質シルト	SD389 埋土 (SX500C南側溝)	51	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	SD461 埋土
16	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	シルト	SD362 埋土 (SX390C南側溝)	34	黒褐色 (7.5Y3/1)	シルト	SD428 埋土 (SX500B南側溝)	52	灰黃褐色 (10YR4/2)	シルト	SD461 埋土
17	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト	SD362 埋土 (SX390C南側溝) 灰白色火山灰含	35	灰色 (5Y4/1)	シルト	SD428 埋土 (SX500B南側溝)	53	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	SD461 埋土
18	灰色 (5Y4/1)	粘土	SD362 埋土 (SX390C南側溝)	36	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	SD428 埋土 (SX500B南側溝)	54	黒色 (2.5Y2/1)	シルト	SD461 埋土



番号	土色	土性	備考	番号	土色	土性	備考
1	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	SD380 埋土	14	灰色 (5Y4/1)	シルト	SD180 埋土
2	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	SD381 埋土 (SX400C東側溝) 灰白色火山灰粒含	15	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	SD180 埋土
3	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	SD381 埋土 (SX400C東側溝) 灰白色火山灰粒含	16	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘質シルト	SD180 埋土
4	リ-7黒色 (5Y3/1)	粘質シルト	SD381 埋土 (SX400C東側溝)	17	黒色 (2.5Y2/1)	粘土	SD180 埋土
5	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	SD400 堆積層A 灰白色火山灰含	18	リ-7黄色 (2.5Y6/3)	砂	
6	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	シルト	SD382 埋土 (SX400B東側溝)	19	リ-7色 (5Y5/2)	粘質シルト	
7	灰色 (5Y4/1)	粘質シルト	SD382 埋土 (SX400B東側溝)	20	浅黄色 (5Y7/3)	砂	荒砂
8	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	SD383 埋土 (SX400A東側溝)	21	浅黄色 (5Y7/3)	砂	シルト質砂
9	灰色 (5Y4/1)	シルト	SD383 埋土 (SX400A東側溝)	22	リ-7黄色 (5Y6/3)	砂	
10	リ-7黒色 (5Y3/1)	粘質シルト	SD383 埋土 (SX400A東側溝)	23	リ-7黒色 (5Y3/1)	粘土質砂	
11	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘質シルト	SD384 埋土 (SX400A東側溝)	24	リ-7黒色 (5Y3/1)	粘土質砂	
12	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	SD180 埋土	25	リ-7黒色 (5Y3/1)	粘土質砂	
13	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂質シルト	SD180 埋土	26	リ-7黄色 (5Y6/3)	砂	

SX400南北道路跡断面図



S X 390, 500東西道路跡の変遷模式図

途中やや蛇行するが、およそE-1° -NでS X300東西道路跡と平行しており、両道路間の距離は約30mを測る。側溝には3時期の変遷が確認され、これらはほぼ同位置で作り替えられている。

時期	北側溝	南側溝	接続	備考
A	S D371	S D366	S X299A、S X400A	
B	S D373	S D367	S X299B、S X400B	
C	S D361	S D362	S X299C、S X400C	堆積土に灰白色火山灰を含む

【S X400道路跡】B区で検出された南北道路跡である。S X500道路跡、S D180・250溝跡、S K267土壙、S D380・100・420河川跡などと重複し、S K267、S D380よりも古く、S X500、S D180・250・100・420よりも新しい。C区南西隅でS X299・S X390東西道路跡とながる。灰白色火山灰が路面を直接覆う部分があり、バラス等の路面施設はなかった可能性がある。道路の方向はN-2° -Eで、路幅についてはC区西端で東側溝が検出されただけで不明であるが、3時期の変遷が確認された。また、A-B区において、S X300北側溝とS X400西側溝がつながるコーナーを検出している。

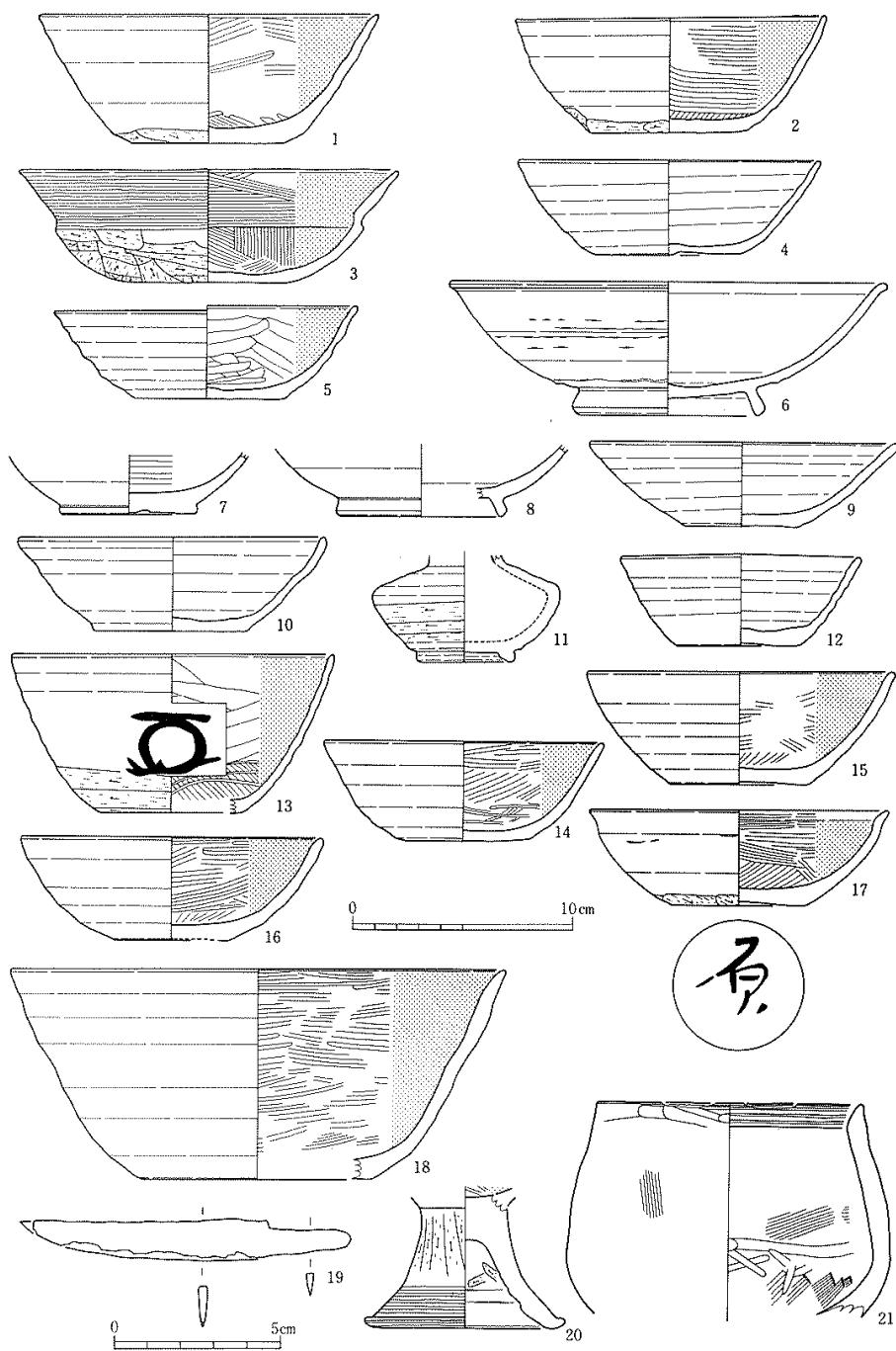
時期	東側溝	接続	備考
A	S D383	S X390A、S X400A	
B	S D382	S X390B、S X400B	
C	S D381	S X390C、S X400C	路面を灰白色火山灰が覆う

【S X500道路跡】B区で検出された東西道路跡である。S X390道路跡、S D180溝跡、S D100・420河川跡などと重複し、S X390よりも古く、S D100・420よりも新しい。両側に素掘りの側溝を持ち、道路の方向はE-3° -Nである。S X390とほぼ同位置で、これに壊されており路面施設については不明である。またS X400以西の方向については、調査区外のため不明である。側溝には3時期の変遷が確認され、これらはほぼ同位置で作り替えられている。路幅はA・B期ではおよそ8.0m、C期で6.0～8.0mである。

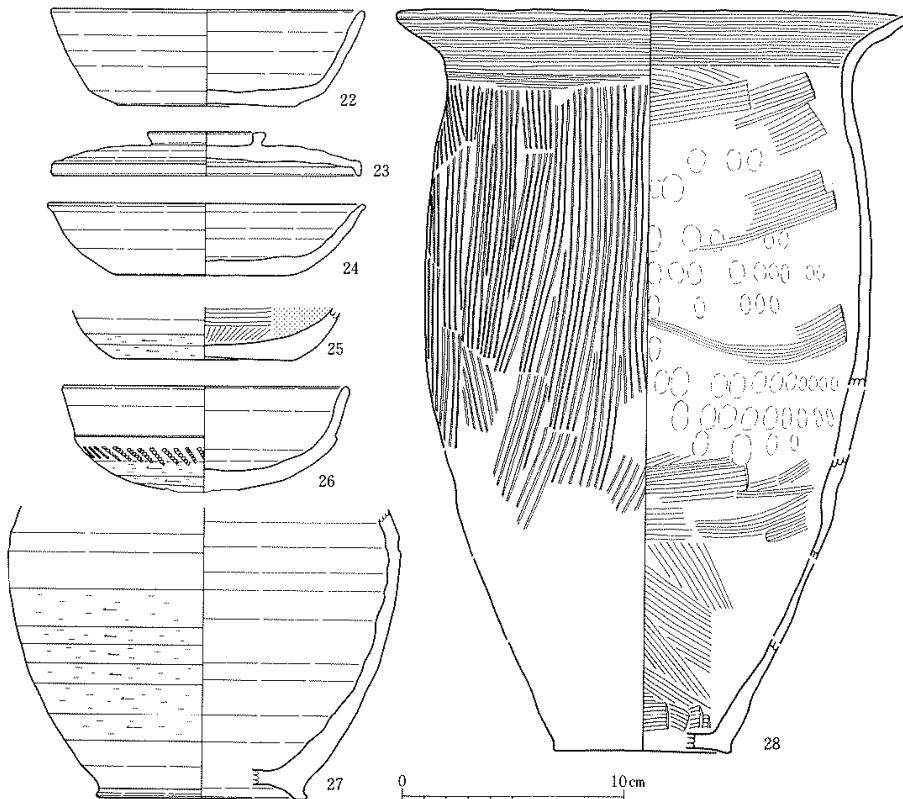
S X500A (北側溝)	S X500B → S D425 → S D379	S X500C
(南側溝)	S D567 → S D428 → S D389	

B . 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はC区で16棟以上、B区で新たに4棟検出された。なお、C区については、この他にも多数の柱穴が重複して検出されているが、未精査部分が多く現時点において詳細は不明である。以下、C区で検出された主な建物跡について説明する。



第17図 道路跡側溝出土遺物（1）



番号	種別	出土区・層	外面の調査	内面の調査	底	口徑	底径	器高	見出社	回数
1	土師器 环	SD-365	クロナデ、体下部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	—	—	—	R-477	
2	土師器 环	SD-371	クロナデ、体下部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	回転糸切り、手持ちヘラケズリ	14.2cm	7.2cm	5.2cm	R-478	
3	土師器 环	SD-371	ロ線彫コナデ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	17.3cm	7.2cm	5.2cm	R-474	
4	赤燒土器 环	SD-371	クロナデ	クロナデ	回転糸切り	13.7cm	6.7cm	4.4cm	R-379	
5	土師器 环	SD-367 2層	クロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	回転糸切り	13.9cm	6.7cm	4.2cm	R-462	
6	灰陶陶器 糙	SD-367	クロナデ、灰釉	クロナデ、灰胎	付高台、回転ヘラケズリ	20.0cm	8.1cm	6.1cm	R-404	21-6
7	縁付陶器 楕	SD-362-367	クロナデ、緑胎	ヘラミガキ、緑胎	蛇の目高台	—	6.1cm	—	R-395	21-5
8	灰陶陶器 糙	SD-366 3層	クロナデ、灰胎	クロナデ、灰胎	付高台、回転ヘラケズリ	—	7.3cm	—	R-400	21-7
9	赤燒土器 环	SD-362 1層	クロナデ	クロナデ	回転糸切り	14.1cm	5.2cm	3.9cm	R-367	
10	赤燒土器 环	SD-361 2層	クロナデ	クロナデ	回転糸切り	14.1cm	6.9cm	4.3cm	R-401	
11	須恵器 甕	SD-381 2層	クロナデ、体下部手持ちヘラケズリ	クロナデ	高台付、クロナデ	—	3.9cm	—	R-365	
12	須恵器 环	SD-325 1層	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り	11.0cm	5.1cm	4.3cm	R-607	
13	土師器 环	SD-366	クロナデ、体下部回転ヘラケズリ、墨書き	ヘラミガキ、黒色処理	回転ヘラケズリ	14.8cm	6.2cm	7.3cm	R-501	
14	土師器 环	SD-379	クロナデ、体下部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	手持ちヘラケズリ	12.8cm	6.1cm	4.7cm	R-374	
15	土師器 环	SD-379	クロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	回転糸切り	14.0cm	6.3cm	5.2cm	R-588	
16	土師器 环	SD-379	クロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	回転糸切り	13.9cm	5.0cm	4.8cm	R-589	
17	土師器 环	SD-379	クロナデ、体下部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	回転糸切り、墨書き「秋」?	13.7cm	6.0cm	4.4cm	R-586	23-3
18	土師器 环	SD-379	クロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	—	22.6cm	10.6cm	9.7cm	R-587	
19	刀子	SD-379				14.5cm	1.7cm	0.4cm		
20	土師器 高环	SD-379	脚上部手持ちヘラケズリ、端部ヨコナデ	ナデ、手持ちヘラケズリ	—	—	8.3cm	—	R-591	
21	土師器 鉢	SD-379	口縁部ヘラミガキ?、体部不明	口縁部ハナメ、体部ヘラナデ、ヘラミガキ	—	12.2cm	—	—	R-590	
22	須恵器 环	SD-379	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り	14.2cm	8.2cm	4.3cm	R-593	
23	須恵器 軽用甕	SD-379	クロナデ	クロナデ、磨痕、墨書き	—	14.0cm	—	2.0cm	R-594	21-4
24	土師器 环	SD-389 3層	クロナデ、体下部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	回転ヘラケズリ	—	8.0cm	—	R-569	
25	須恵器 环	SD-389 1層	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り	14.4cm	7.8cm	3.4cm	R-573	
26	須恵器 高环	SD-389	カブレ、細唐衣工具の連続剥離、回転糸切り	クロナデ	—	13.0cm (3.3cm)	—	—	R-574	
27	須恵器 鉢	SD-389 3層	クロナデ、体下部回転ヘラケズリ	クロナデ	高台付	—	9.6cm	—	R-572	
28	土師器 鉢	SD-389	口縁部ヨコナデ、体部ハナメ	口縁部ヨコナデ、体部オサエ、ヘラナデ	—	23.0cm	8.1cm	33.2cm	R-568	

第18図 道路跡側溝出土遺物（2）

【S B526掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の東西棟で、堆積層2層に覆われる。S I 506竪穴住居跡・S D507、516溝跡・S E505井戸跡などと重複しており、S I 506・S D507・S D516より新しい。1度建て替えられている(S B526A→526B)。

S B526Aは後続するS B526Bと同位置で重複し規模も同様である。

S B526Bの柱間は桁行が北側柱列で西から2.5m・2.6m・2.6m、梁行が西側柱列で北から1.9m・2.1mである。建物の方向は北側柱列でE-5°-Nである。柱穴は一辺が約0.5mの方形で、柱痕跡は直径が約10cmの円形である。

【S B530掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間以上の南北棟で、堆積層2層に覆われる。S I 498竪穴住居跡・S D486、503溝跡などと重複しており、S I 498・S D503より新しい。柱間は桁行が西柱列で北から1.6m・1.6m・1.6m、梁行が北側柱列で西から1.8m・1.8mである。建物の方向は西側柱列でN-7°-Wである。柱穴は一辺が約0.6mの方形で、柱痕跡は直径が約15cmの円形である。

【S B553掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間)南北棟である。S I 491竪穴住居跡・S D487、545溝跡、SK546などと重複しており、S B491・S D545・SK546より新しい。1度建て替えられている(S B553A→553B)。

S B553Aは後続するS B553Bとほぼ同位置で重複し、柱間は桁行が西側柱列で北から2.3m・2.4m・2.5m、梁行が北側柱列で西から2.2m・1.9mである。柱穴は一辺が約0.3~0.5mの方形で、柱痕跡は直径が約10cmの円形である。

S B553Bの柱間は桁行が東西柱列で北から2.2m・2.1m・2.3m、梁行が北側柱列で西から2.0m・2.2mである。建物の方向は西側柱列でN-15°-Wである。柱穴は一辺が約0.5mの方形で、柱痕跡は直径が約15cmの円形である。

【S B554掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の東西棟である。S I 533竪穴住居跡・S D402、482、483、484、532溝跡・SK527、531土壙などと重複しており、S D402、482より古く、S I 533・SK527、531より新しい。1度建て替えられている(S B554A→554B)。

S B554Aは後続するS B554Bと同位置で重複し規模も同様である。

S B554Bの柱間は桁行が北側柱列で西から1.8m・1.7m・1.9m、梁行が西側柱列で北から1.7m・1.9mである。建物の方向は北側柱列でE-3°-Sである。柱穴は一辺が約0.3~0.5mの方形で、柱痕跡は直径が約15cm円形である。

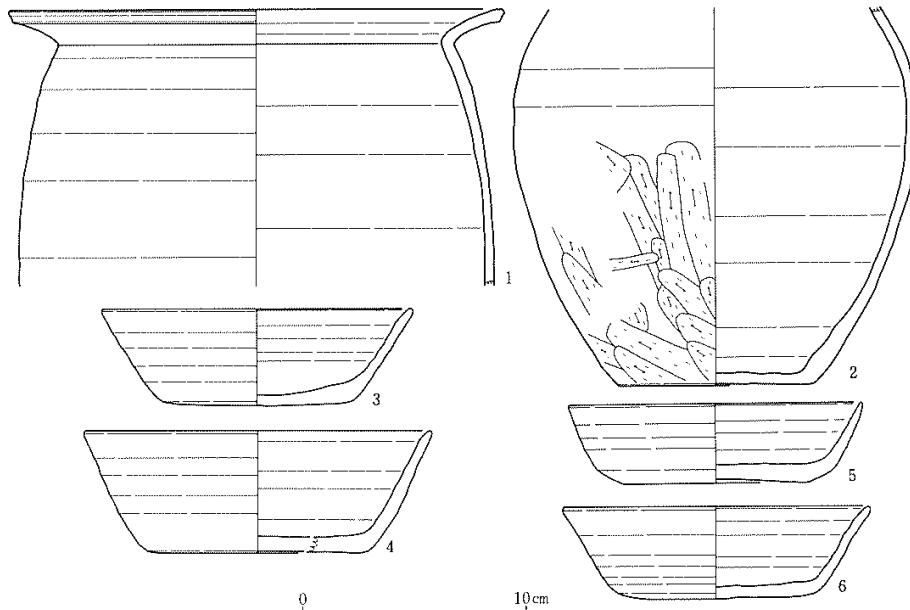
【S B575掘立柱建物跡】桁行2間、梁行2間の縦柱建物跡で、堆積層2層に覆われる。S I 498、499竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。柱間は西側柱列で北から1.7m・1.8m、南側柱列で西から1.6m・1.5mである。建物の方向は西側柱列でN-3°-Wである。柱穴は一辺が約0.4~0.6mの方形で、柱痕跡は直径が約15cmの円形である。

C. 壁穴住居跡

【S I 493壁穴住居跡】 S D402、482、484、521溝跡・S K494、540、542、552土壌などと重複し、S D402、482、484・S K494, 540, 552より古く、S D521・S K542よりも新しい。同位置、同規模で1度改築されている。東西約4.4m、南北約4.8mの方形で、住居の方向は北辺でE-5° -Nである。

S I 493 Aは壁高が約5cmであり、掘り方を掘り黒褐色土で貼床して床面としている。周溝は断面が「U」形、幅15~20cm、深さ約10cmで、東辺で一部途切れる。カマドは検出されなかったが、後続するS I 493 Bの燃焼部と煙出しピットが東辺南寄りで検出され、他に痕跡が認められないことからS I 493 Aについても同位置にあったものと思われる。柱穴や住居に伴う施設は検出されなかった。床面から土師器甕(第19図1・2)が出土している。

S I 493 Bは先行するS I 493 Aの上に地山砂を含んだ黒褐色土で貼床しているが、床面は削平されているものと思われる。周溝は断面が「U」形、幅約15cm、深さ約10cmで、カマド付近で途切れる。カマドの燃焼部は底面を僅かに窪ませ、地山土を貼って側壁として



番号	種別	出土区・層	外 面 の 調 整	内 面 の 調 整	底 部	口 径	底 径	基 高	直線高	容積cm ³
1	土師器 瓢	S I-493 古床	ロクロナデ	ロクロナデ		22.2cm			R-552	
2	土師器 瓢	S I-493 古床	体面ロクロナデ、体下部手持ちケズリ	ロクロナデ	ナデ		8.6cm		R-551	
3	須恵器 瓢	S I-493 新床	ロクロナデ	ロクロナデ	回転余切り	14.0cm	8.5cm	4.4cm	R-547	20-5
4	須恵器 瓢	S I-493 墓土	ロクロナデ	ロクロナデ	回転余切り	15.6cm	9.9cm	5.4cm	R-549	
5	須恵器 瓢	S I-493 新床	ロクロナデ	ロクロナデ	回転余切り	13.2cm	8.2cm	3.6cm	R-548	
6	須恵器 瓢	S I-493 新床	ロクロナデ	ロクロナデ	回転余切り	13.8cm	8.9cm	4.2cm	R-553	

第19図 S I 493 出土遺物

いるが、焼け面はその大部分がSK494土壌に壊されているため範囲は不明である。また煙道は検出されなかつたが、カマド延長線上には煙出しピットが検出された。柱穴は4個の主柱穴と10個の壁柱穴からなる。主柱穴は柱間隔が北辺で1.8m、西辺で2.1mあり、柱穴は一辺が約40cm、深さが50cm程の隅丸の不整方形で、柱痕跡は直径約15cmの円形である。壁柱穴は柱間隔が北辺で西から2.1m・2.1m、西辺で北ら1.8m・1.3m・1.3mであり、柱穴は一辺約30cm、深さが50cm程の隅丸の不整方形で、柱痕跡は直径約10cmの円形である。埋土はいずれも地山ブロックを含んだ黒褐色土である。住居に伴う施設はSI493Aと同様に検出されなかつた。床面から須恵器坏(第19図3・5・6)、住居埋土中から須恵器坏(4)がそれぞれ出土している。

D. その他の遺構

井戸跡は8基検出された。このうち3基については完全に掘り上げていないため詳細は不明だが、構造的には木組の井戸枠を有するものが多い(6基)。

土器埋設遺構はC区南西隅で1基検出された(SX292)。搅乱により詳細は不明だが、土師器甕1個を埋めている。SX299・390東西道路跡とSX400南北道路跡の交差部分の路面上にある。埋設された土器は、年代的にみて道路存続時のものである。

畝状遺構は細長く浅い溝が数本、縦および横方向に平行して並ぶ小溝からなるもので、これまでに4面検出されている。これらは方向性によって次の2種類に分類することができる。1つは真北方向を基調とし東西および南北道路跡に沿って存在するもので、調査区の中でも標高が低い堆積層や河川跡とその周辺で多く検出された(SD348、SD394・395、SD429・430)。大半のものがこの方向をとり、埋土に灰白色火山灰を含むものもある(SD394・395)。もう1つは東西方向を基調とし、約30°北に振れるもので、C区北西隅で1面検出された(SD578)。これは周辺で検出された遺構の中で最も古く、前者とは時期的にも異なるものと思われる。

河川跡は昨年A区で検出したSD14・100河川跡の延長で、C区南半を東流する。B区北端で検出した堆積層もSD100と一連のもので、SX500東西道路跡はこれらが自然に埋まつた後に作られている。またSD100の下でこれよりも古く、部分的に流路の異なるSD420河川跡も検出されている。埋土中から土師器坏(第2図1・2・4)・高坏(3)、須恵器坏瓶?(5)・鉢(6)などが出土している。

溝跡は大小あわせて80条以上検出された。これらは多くの遺構と重複し、方向もさまざまである。ここでは規模が大きく、しかも遺物が多いSD180とSD461溝跡について説明する。

SD180はSX300, 390, 400, 500道路跡、SD100, 420河川跡よりも古く、B区からC区にかけ

て北西方向へ延びる溝である。上幅約3.0m、下幅約1.5m、深さ約0.6mで、方向はN-約35° - Wである。埋土は上部で灰黄褐色、下部で粘性のある黒褐色と地山砂を多く含むにぶい黄褐色の自然堆積土からなる。埋土中から土師器坏(第21図1・2)・高坏・甕・須恵器坏(3)・高台付坏・壺・甕、瓦などが出土している。なお、B区南側の調査区(今年度多賀城市調査分)において、この溝の延長が検出されている。

S D461はC区東半部で検出された「L」形に巡る溝で上幅3.5~4.0m、下幅2.0~3.0m、深さ0.4m程ある。溝全体は検出していないがS X390, 500道路跡の北側をこれと平行し東西方向に延び、調査区中央付近で北に直角に曲がる。S D100, 420河川跡と重複するが、これらとの新旧関係については不明である。埋土は上部で地山砂を含む灰褐色の自然堆積土、下部で粘性のある黒および黒褐色の自然堆積土からなる。埋土中から土師器坏(第20図8)・高坏(9)・甕・須恵器坏・蓋(10)・甕などが出土している。

3. 中近世

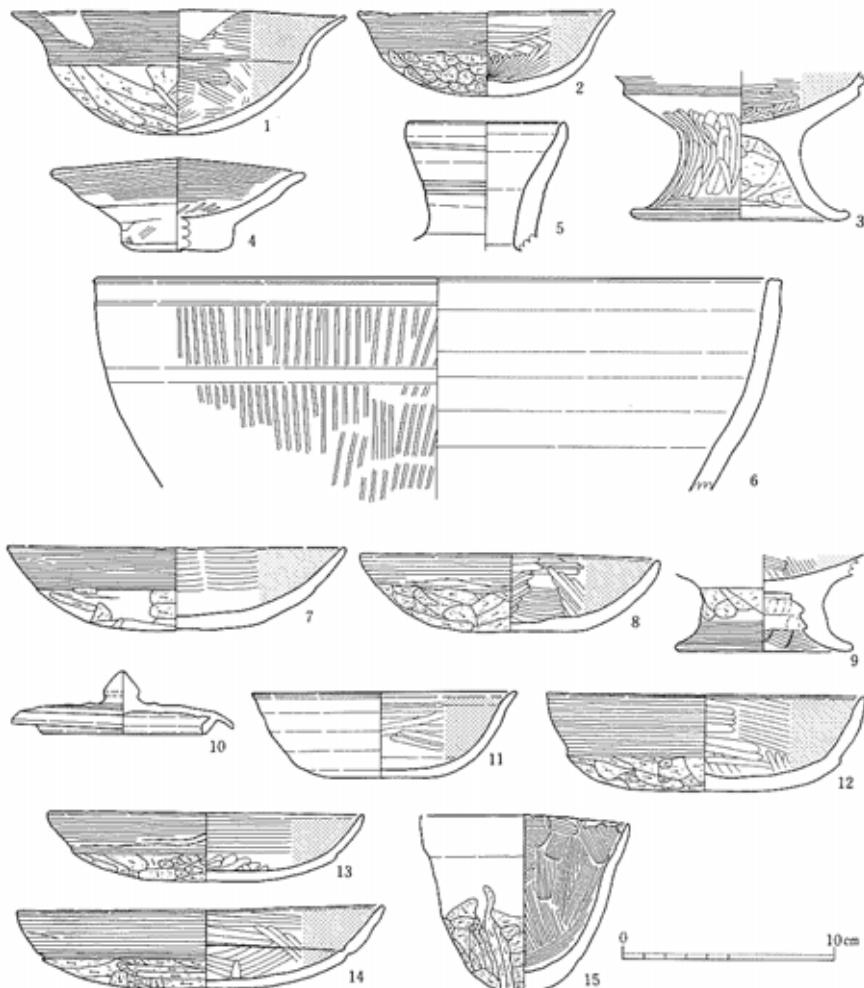
溝跡10条以上、土壙3基などが検出された。ただし、これらは他の遺構との重複関係や埋土の特徴により確認したもので、この時期に該当する遺物はほとんど出土しておらず、時期や性格など明らかにできたものは少ない。

【S D151溝跡】 S D14河川跡よりも新しい、B・C区の東端およびB区南側の調査区(今年度多賀城調査分)で検出された南北方向へ延びる溝である。ただし、C区南半で緩やかに東へ曲がっていることから「L」形に巡る溝の可能性もある。コーナー部分で外側にやや膨らむ。規模は上幅1.0~1.5m、下幅0.6~1.2m、深さ約0.5mで、埋土は粘性のある黒褐色の自然堆積土である。

4. その他の遺物

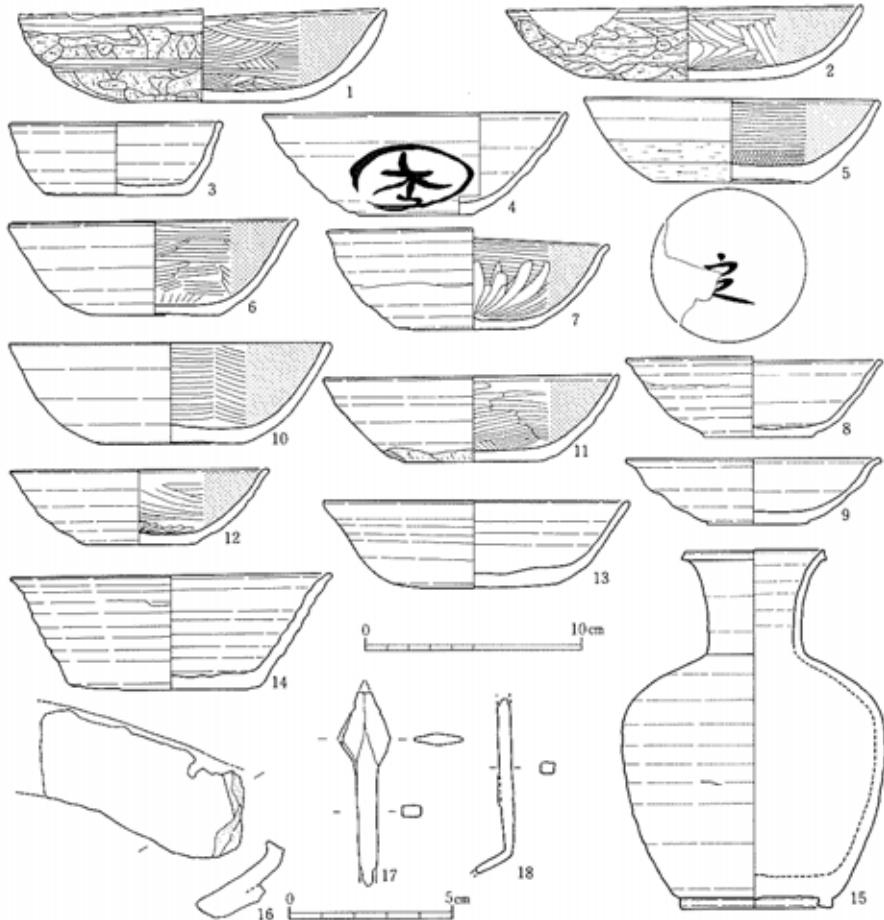
その他の遺構や表土などからも数多くの遺物が出土している。土師器には坏(第20図1・2・7・8・11~14、第21図5~7・10~12)・高台付坏・高台付皿・高坏(第20図9)・甕(第20図15)・甑などがある。須恵器には坏(第21図13・14)・高台付坏・高坏・蓋(第20図10)・甕・壺・長頸瓶(第21図15)・円面硯・風字硯がある。赤焼土器には坏(第21図4・8・9)・高台付坏がある。瓦には平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦がある。その他に緑釉陶器(第18図6・8)・灰釉陶器(7)が出土している。

また鉄製品では刀子・釘・鎌・斧・鎌、銅製品では耳環が出土している。土製品では勾玉・土錐・円盤状土製品・ミニチュア土器が出土している。石製品では跨帶(図版22-8)・砥石・石臼が出土している。古錢類では洪武通宝・永樂通宝が出土している。木製品では椀、曲物および曲物の蓋や底板が出土している。その他、轍羽口、鉄滓、ウマの骨が出土さいしている。



番号	種別	出土区・場	外 図 の 説 明	内 図 の 説 明	直 形	口 径	底 径	高 さ	盤 面	底 面
1	土器	环	SB-420 2号 ロコナデ	ヘラミガキ、黒色處理 手内もヘラケズリ	15.3cm	12.2cm	5.3cm	R-519 20-2		
2	土器	环	SB-420 ロコナデ	ヘラミガキ、黒色處理 手内もヘラケズリ	12.2cm	9.6cm	3.9cm	R-493 20-3		
3	土器	高环	SB-420 4, 5号 口縁部かが、腹部ミガキ、底部ヨコフ	研磨、ミガキ黒色處理、底部ケズリ	—	16.4cm	—	R-582		
4	土器	环	SB-420 1号 ヘラナデ	ヘラナデ	12.6cm	—	5.2cm	R-580		
5	土器	高环	SB-420 2号 ヘラナデ、上部に1本、中央に2本の凹部	ロフロナデ	7.4cm	—	—	R-585		
6	土器	环	SB-420 2号 口縁部かが、底部ヨコフ、ロフロナデ	ロフロナデ	22.5cm	—	—	R-584		
7	土器	环	SB-302 3号 ロコナデ	ヘラミガキ、黒色處理 手内もヘラケズリ	16.3cm	13.1cm	3.9cm	R-527		
8	土器	环	SB-461 ロコナデ	ヘラミガキ、黒色處理 手内もヘラケズリ	14.2cm	10.3cm	3.6cm	R-473		
9	土器	高环	SB-461 2号 腹部手持ちケズリ、底部ヨコナデ	底部ヨコナデ 手持ちケズリ	—	8.4cm	—	R-509		
10	土器	高	SB-461 3号 ロコナデ、天井部四隅ケズリ	ロコナデ	7.6cm	—	3.0cm	R-600 20-11		
11	土器	环	SB-445 1号 ロフロナデ	ヘラミガキ、黒色處理 口輪も切ら	12.5cm	9.6cm	4.0cm	R-479		
12	土器	环	SB-445 1, 2号 ロコナデ	ヘラミガキ、黒色處理 手内もヘラケズリ	15.0cm	12.9cm	4.5cm	R-478		
13	土器	环	SB-452 3号 ロコナデ	ヘラミガキ、黒色處理 手内もヘラケズリ	14.9cm	13.4cm	3.5cm	R-472		
14	土器	环	SB-452 1号 ロコナデ	ヘラミガキ、黒色處理 手内もヘラケズリ	17.4cm	14.3cm	3.7cm	R-485 20-1		
15	土器	高	SB-452 3号 口縁部ナデ、底部手持ちケズリ	ヘラナデ 手持ちケズリ	9.9cm	1.6cm	8.4cm	R-485		

第20図 その他の遺構出土物 (1)



番号	種別	出土区・場	作成の調査	内面の調査	底	径	底径	器高	直鉢形	圓錐形
1	土師器	坪	SII-180	3種 口縁部へラミガキ、底部手持ちケズリ	ヘラミガキ、黒色處理	手持ちヘラミガキ	17.1cm	13.6cm	4.4cm	R-373
2	土師器	坪	SII-180	3種 口縁部へラミガキ、底部手持ちケズリ	ヘラミガキ、黒色處理	手持ちヘラミガキ	16.6cm	9.6cm	3.3cm	R-362
3	土師器	坪	SII-180	2種 ロクロナデ		ロクロナデ	10.6cm	6.6cm	3.4cm	R-363
4	赤陶土器	坪	SI-II-63	3種 ロクロナデ、裏面「豆」	ロクロナデ	ロクロナデ	24.1cm	5.3cm	4.7cm	R-463 20-12
5	土師器	坪	SI-II-63	4種 ロクロナデ、体下部凹窓ケズリ	ヘラミガキ、黒色處理	ロクロナデ、裏面「豆」	13.7cm	7.4cm	3.9cm	R-385 22-2
6	土師器	坪	SI-257	4種 ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色處理	ロクロナデ	13.4cm	5.9cm	4.4cm	R-379 20-4
7	土師器	坪	SI-257	4種 ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色處理	ロクロナデ	13.1cm	5.4cm	4.7cm	R-377
8	赤陶土器	坪	SI-257	1種 ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	11.9cm	5.1cm	3.7cm	R-379 20-13
9	赤陶土器	坪	SI-257	1種 ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	11.7cm	4.6cm	3.1cm	R-400
10	土師器	坪	炭化物壺A	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色處理	ロクロナデ	14.9cm	6.6cm	4.7cm	R-480
11	土師器	坪	炭化物壺A	ロクロナデ、体下部手持ちケズリ	ヘラミガキ、黒色處理	ロクロナデ	13.5cm	6.4cm	4.0cm	R-482
12	土師器	坪	炭化物壺A	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色處理	ロクロナデ	12.9cm	5.5cm	3.5cm	R-481
13	土師器	坪	炭化物壺C	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	14.3cm	7.6cm	4.1cm	R-372 20-10
14	土師器	坪	炭化物壺C	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	15.6cm	7.5cm	5.3cm	R-489
15	土師器	炭化物壺C	炭化物壺C	ロクロナデ	ロクロナデ	高台付、ロクロナデ	6.4cm	7.6cm	16.7cm	R-487 21-2
番号	種別	出土区・場	備	考	高	幅	幅	厚	幅	厚
16	鏡	炭化物壺A	先端・基部欠損		—	—	—	—	—	0.5cm
17	鏡	炭化物壺A	先端・基部欠損		—	—	—	—	—	0.3cm
18	針	炭化物壺C	頭部・先端部欠損		—	—	—	—	—	0.4cm 0.3cm

第21図 その他の遺構出土遺物（2）

IV 考察

1. 古墳時代

(1) 古墳時代の遺構

A. 遺物包含層

遺物包含層は、古代の遺構検出面となった黄褐色シルト層下で検出された。自然堤防の落ち際に堆積したもので、9×8m程の範囲に広がり、最大厚で約70cmの厚さを持つことが明らかになった。堆積層は2~15cm程の厚さの層に細分され、層中からは古墳時代の土器、骨角器、木・竹製品、動植物遺体など多種多様の遺物が出土した。とくに、通常腐朽・消滅してしまうような有機質のものが大量に出土したことは特筆すべきことであり、当該期における諸活動や遺跡の性格を知る上で多くの情報が得られた。

1 土器

土師器壺、高壺、壺、甕が出土した。これらは遺物包含層の各層から出土しているが、土器の層による大きな違いがみられないことからこれらを一まとまりの土器群と見ても差し支えないと思われる。土器の特徴は以下のようである。

壺：小さな平底で体部が内彎し、口縁部が直立するもの、外傾するもの、屈曲して外傾するものの3者がある。

高壺：脚部は全て中空であり、裾部にかけて開く円筒状で、裾部は強く開いているものが多い。円窓はみられない。

壺：小型のものは口縁部と体部の最大直径がほぼ等しく、口縁部は外傾し、体部は潰れた球形である。大型のものは複合口縁で、体部は球形である。

甕：単純口縁で、体部は球形である。

このような特徴を持つ土器群は本調査区から約800m西の山王遺跡第3次調査の第3号遺構からまとまって出土している(高倉他; 1981)。この土器群は南小泉式の最も古い段階に位置付けられており(丹羽; 1983、加藤; 1989)、S X230出土の土器群もこの時期のものと考えられる。

2 骨角器

骨角器には骨鏃、弔、刀子把、刺突具、刀装具など多種多様なものがある。これらは鹿角およびニホンジカの中手・中足骨を素材としているものが多い。縄文時代以降利用される部位や部分に違いは認められず、これらが時代を問わず道具製作の素材として最も有効なものであったと言える。また、古墳時代においても鹿角や骨が頻繁に使われていたことを示している。

骨鏃は4種類の形態のものが出土した。素材としてはニホンジカの中手もしくは中足骨を用いたもの(第6図1・2・4)と鋸歯状を呈するエイの尾棘をそのまま利用したもの(6)とがある。さらに前者には3種類の形態のものがあり、素材として使用する部分にも違いが認められる。これについては目的とする形態に応じて、骨の特徴を生かした素材取りが行われたことによるものと理解され、この種の骨製品に形態的なバリエーションがあつたことを示しているものと思われる。この時期の骨鏃については、従来古墳の副葬品として出土することが多く、本遺跡のような集落遺跡から出土した例はほとんど知られていない。これは遺物の性質上残存しにくいということが大きく影響しているものと思われるが、実際には古墳の副葬品のみならず、この時期には集落でもかなり一般的に使われていたものと推測される。古墳出土のものについては形態的な分類および遺跡間対比が行われており、骨鏃に主体的な形態のあることが指摘されているが(三宅・茂木地;1989)、本遺跡出土のものとの間に形態上の共通性は見い出せない。

今回出土したものの中にニホンジカの中足骨を素材にして銅鏃もしくは鉄鏃を模したと思われるものがある(1)。本遺跡のものは素材と形態からみて必ずしも実用的とは言い難いもので、今のところ類例はない。非実用的という点において祭祀に関わる模造品(鏃形)という可能性も考えられる。

エイの尾棘を利用した鏃(3) 基部の形態が異なるものの、縄文時代の遺跡において時期や地域を問わず普遍的に見られるものである(小井川;1985、金子・忍澤;1986)。神奈川剣三浦市間口A遺跡(神澤;1988)や島根県松江市西川津遺跡(内田;1986)など弥生時代の遺跡からの出土例(「ヤス」と考えられているもの)も知られており、縄文時代からの伝統を受け継いだ一形態を示しているものと思われる。

弔は1点のみ出土した。鹿角を板状に加工したものであるが、とくに装飾性は見い出せない。類例としては石巻市五松山洞窟、福島県いわき市金冠塚古墳などに見られるが、出土例が少ないことや装着される弓本体が明らかになっていないことなどから、この種の角器が一般的に装着された実用的なものなのか、あるいはこれ自体が装飾的な意味も備えたものなのか明らかではない。一方、五松山洞窟出土の中には彫刻や線刻などの装飾が施されたものもあり、弔を使った道具には精粗、大小、格式などの違いがあった可能性も指摘されている(三宅・茂木地;1988)。なお、塩釜市崎山圓洞窟において、古墳時代中期南小泉式)に位置付けられる副葬品の中に尺度型骨器として報告されているものがある(永澤;1931)。3点(いずれも素材不明)出土しているが、これらは形態や大きさなどからみて弔と考えられる。

鹿角製刀子把は各地から出土しており、いずれも素材を生かした棒状を呈する形態のも

のである。県内では五松山洞窟から出土しているが、これらの中には形態や大きさ、つくりの精粗など異なるものもあり、大型のものについては武器として使われた可能性が指摘されている(三宅・茂木地;1988)。これに対して本遺跡のものは木製品を含め形態や大きさなどすべて同様なものからなり、加工方法などについても五松山洞窟で出土した小型のものに類似している。把基部の孔の大きさからみても、工作用の刀子の把と考えられる。

鹿角製刀装具は同様なものはすべて古墳から出土しており、名取市経の塚古墳や福島県上の原4号墳などから出土している(長谷川;1924、伊藤;1973)。一方、未製品などの出土から本遺跡で鹿角製刀装具を製作していることは明らかであり、古墳の副葬品なども近くの集落で製作されていた可能性が高くなつた。

3 木・竹製品

鍬、鋤、ザル、カゴ、堅櫛などがある。

鍬はナスビ形を呈する二叉状の膝柄鍬で、着柄軸部は傘状を呈さない棒状のものである。こうした形態の鍬は東北地方における出土例を見る限り、仙台市中在家南遺跡、小牛田町山前遺跡などから出土しており、山形県山形市鳴遺跡、天童市西沼田遺跡などで出土したものは傘状を呈するものがほとんどであるという(工藤・荒井;1990)。類例が少なく、どのような理由でこれらの違いがあるのか明らかではない。

鋤は同様の未製品が2本並んだ状態で出土した。いずれも完形の未製品で、同様な製作段階にある。こうした出土状況にある未製品については福岡県福岡市板付遺跡をはじめ湿田や水路において発見されており、これらは壊れにくくするために水漬けされたものであろうと考えられている(甲本・山崎;1984)。断定はできないが、本遺跡出土の鋤未製品もこうした状況を示している可能性がある。

なお、これら以外に未製品は出土していないものの、削り屑は各層から出土しており、こういった作業がかなり頻繁に行われていた可能性がある。

4 祭祀遺物

石製模造品、臼玉、ト骨などの祭祀遺物は、破損した生活用具やそれらの製作の際に生じた屑、食料残滓といった生活廃棄物と混在した状態で出土した。埋納および意図的に置かれたような痕跡も認められることから、祭祀行為やト占が行われた後の状況を示しているものの、出土状況に特別の意味はないものと思われる。こうした状況はト管の出土を見る限り全体的な傾向であり、ト占終了後の処置に特別な注意や関心が払われなかつたことを反映しているものと考えられている(神澤;1976)。これらのことから、遺物包含層出土の祭祀遺物についても、他の遺物と同様に廃棄されたものと推測される。

出土したト骨は焼灼面の調整後、内外両面に異なる焼灼を加えたもので、素材の片面に

鑽を掘り、その内部に焼灼を加えるという古墳時代以降の一般的な焼灼方法（神澤；1997）とは異なるものである。卜骨の出土例としては表杉ノ入式期に位置付けられる塩釜市表杉ノ入貝塚（伊東；1981）と七ヶ浜町東宮鳳寿寺貝塚（後藤；1981）のものとがある。いずれも本遺跡出土のものとは素材や焼灼方法が異なっており、焼灼については上記に示したような古墳時代以降の一般的な特徴を持つものである。こうした違いが何を意味するのか明らかではないが、素材の入手し易さやト占の目的・内容を反映したものと思われる。

石製模造品と臼玉は南小泉式期に特徴的な祭祀遺物で、県内では12遺跡で出土している。これらは遺構・器種の組合せ・甕・出土状況によって多様な様相を呈しており、こうした違いが祭祀を行う主体や性格の違いを反映しているものと考えられている（阿部・須田・岩見；1991）。ここでは、今回出土した石製模造品と臼玉の組合せや量について検討することはできないが、山王遺跡ではこの遺物包含層以外にも西町浦地区（高倉他；1981）、東町浦地区（相沢；1990）、八幡地区（今年度の多賀城市調査分）などで発見されており、西町浦地区と八幡地区は土壙墓から、東町浦地区では河川の堆積土から出土している。なお、西町浦地区では未製品や剥片、原石も発見されており、これらの遺物が集落内で生産されたことが明らかになっている。一方、今回これらの遺物が遺物包含層（ゴミ捨て場）から出土したことについては、埋納・遺棄や廃棄といった祭祀後の処置の違いを反映しているものと思われる。

5 その他の遺物

轍の羽口、鉱滓が出土した。鉱滓については金属学的な分析を行っていないことから詳細は不明だが、轍の羽口は高坏の脚部を転用したものであり、集落内において鍛冶が行われていたと示している。

6 動植物遺体

動物遺体は魚貝類や陸生の哺乳類など15種類、植物遺体は多量の炭化米を含む11種類が確認された。動物遺体ではニホンジカとイノシシが多く出土している。植物遺体もごく一部の種が明らかになっただけであり、全体の種組成や量については今後の課題である。なお、これらは散乱した状態で検出されており、他の人工遺物とともに廃棄されたものと考えられる。以下、各種類ごとに特徴を述べる。

ニホンジカ・イノシシは、解体や骨髓摘出、骨角器製作などの痕跡が認められるなど縄文時代の貝塚や低湿地遺跡出土のものと同様の遺存状況を呈している。このことは、農耕経済が生業活動の中で定着した時期と考えられている古墳時代においてもこれらの動物が縄文時代と同様に利用価値の高いものであったことを示していると思われる。また、当時の人々が生業活動全体の中でこれらの動物にどの程度の比重を置いていたかについては

明らかにすることはできないが、ニホンジカの頭骨などの特徴からみて、これらは冬を中心とした農閑期に捕獲されたものと考えられる。すなわち、狩猟については、骨鏃などの狩猟具の存在やこれらの製作が頻繁に行われていることも含め、生業活動の中で明確に位置付けられていたものと思われる。

魚貝類については量的に少なく、漁撈が盛んに行われたことを示すような積極的な資料も得られていない。一方、マイワシ・マアジ・カツオなど今回出土した魚種の多くは春～初秋の季節のごく短い時期に限って沿岸に出現するもので、これらは群れをなして回遊することから漁法によってはかなりの漁獲量が期待できたものと推測される。本遺跡において漁撈が生業の一部として位置付けられていたかどうかについては明らかではないが、古墳時代に少なくともこれらの魚種を目的とした季節的な漁が行われていたことを示している。

植物遺体については多量の炭化したコメやヒヨウタンなどの栽培種とともに、カヤ・クルミ・トチ・クリといった堅果類も出土した。これらはコメの不足を補うような役割を果していたと考えられている(渡辺;1986)。

B . 壇穴住居跡

地山面で検出され、C区で今回検出された遺構の重複関係においては最も古い段階の遺構群にあたる。年代的には、後述するようにS I 491が栗廻式期で7世紀前半に位置付けられる。出土遺物の特徴などからS I 489・492・498・499・506・533壇穴住居跡がほぼ同時期のものと思われる。平面形はいずれも方形で、規模は一辺が4~7.5m程である。方向にはばらつきが見られる。また、柱穴や周溝などの住居構造やカマドの位置などについても規則性は認められない。これらはC区北東部にのみ集中し、年代的に大きく違わない2~3軒の壇穴住居跡が重複あるいは近接して存在している。

これらの年代については、整理途中であり、すべての壇穴住居跡を位置付けることはできない。ここでは、比較的残りが良く、遺物量の多いS I 491壇穴住居跡について述べる。

S I 491からは土師器壙3点・高壙2点・甕7点・瓶2点、須恵器高壙・蓋・鏡・鉢・甕が各1点出土している。これらの土器の特徴は以下の通りである。

土師器・壙：口縁部が外反気味に外傾し、体・底部が丸底状のものと、口縁部が内彎し、体・底部が丸底状のものとがある。前者は口縁部と体・底部との境の内外面に段を形成する。いずれも内外面はヘラミガキ・黒色処理されている。

土師器・高壙：口縁部が外反気味に外傾し、体・底部が丸波状の壙部と、外反しながら強く開く脚部とからなる。壙部の口縁部と体・底部との境の内外面に段を形成する。

土師器・甕：口縁部が外反し体下部が膨らむもの、口縁部が外反し体部が外傾するもの、

体部が大きく脹らむものとがある。前二者は口縁部と体部との境に段を形成する。

土師器・甌：無底式で、口縁部が外反し体部が内彎しながら立ち上がり体下部がすぼまるもので、口縁部と体部との境に段を形成する。

須恵器・高坏：無蓋高坏の坏部の破片で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもので、体部上半に二つの段がつくりられており、その間に櫛描列点文が巡らされている。

須恵器・蓋：有蓋高坏の蓋で、中央部が凹むつまみがつけられ、天井部は丸みを持ち、端部は丸くおさまる。

須恵器・壺：体部がそろばん球形で、頸部は下部で細くすぼまり上半部で大きくラッパ状にひらくものである。体部の最大径は中央よりやや上にあり、この部分に平行沈線を巡らし、その間に注口部を開け、櫛描列点文を施している。頸部にも平行沈線が巡る。

須恵器・鉢：壺の体部下半を転用したもので、割れ口を磨って口縁としている。壺の体部の最大径のある部分に平行沈線を巡らしている。

須恵器・甕：口縁部が外反し端部が肥厚するものである。

次にこれらの時期について検討してみる。

〔土師器〕 このような特徴を持つものは東北地方南半の編集では栗団式とされている（氏家；1957）。栗団式は清水遺跡では第IV群土器→第V群土器への2時期の変遷が考えられ、第V群土器はさらに細分される可能性が指摘されている（丹羽；1981）。一方、栗遺跡では第I→II→III a→III b期の4群に細分され、第I期土師器は住社式との過渡的土器群としている（工藤；1982）。栗団式の細分についてはまだ定まっていないとの指摘があり（加藤；1989）、細かな限定はで音ないが、坏で口縁部が外反気味のものは栗団式の中でも古い方の段階に多いという点では両者が一致しており、S I 491出土の土師器は栗団式の新しい段階まで降らないと思われる。栗団式の年代については諸説があり、7世紀に開始することでは一致しているが、終末に関しては7世紀までや8世紀に入るなど意見が分かれている。ここでは、S I 491の土器を7世紀末までは降らないものと考えておきたい。

〔須恵器〕 宮城県内ではこの時期の窯跡や消費地での発見例が少ないので個別に検討する。

（高坏） 脚部がなく特徴が明らかではないが、このように深い坏部を持つものは陶邑古窯跡群のTK-209型式には存在する（田辺；1981）。本遺跡例では坏部に2段の軽い段があるが、陶邑例では2本の沈線が巡っている点が異なっている。

（蓋） 同様のものが仙台市郡山遺跡のS I 1018から栗団式の土師器坏と共に出土している（木村他；1989）。また、陶邑古窯跡群では有蓋高坏は第III段階には消滅するとされている（中村；1981）。本遺跡例は天井部と口縁部との境に稜がみられないことから、有蓋高坏の

消滅寸前のものと考えられる。

(麁) 頸部の形状は陶邑古窯跡群の第Ⅱ型式第5段階のものに類似している。しかし、体部最大径が中央よりやや上にある点は第Ⅱ型式第6段階以降にみられる特徴であり(中村;1981)、やや新しい様相も持っている。

甕と壺については特徴が不明で検討できない。

須恵器の年代は、以上のような検討から概ね7世紀前半頃ととらえておきたい。

なお、これらの須恵器は胎土や色調、焼成が同じであり、回転ハケメが多用されるなど技法的にも共通しており、同一の生産地のものであると思われる。

以上のようにS I 491出土の土器群は土師器は栗囲式に比定され、年代については須恵器がが7世紀前半頃と考えられ、土師器の年代観とも矛盾しない。

(2)遺跡の立地

ここでは、古墳時代中期と後期における遺跡の立地と場の使われ方について検討を加える。

古墳時代中期には遺物包含層が形成され、その遺物の内容から隣接する集落における一種のゴミ捨て場と考えられた。自然堤防の落ち際に形成されており、当時遺跡の北側に広がっていたと推測される後背湿地と接するような立地環境にあったと予測される。ただし、遺物包含層が形成されなかつた場所においては自然堤防と後背湿地とが接する境界が不明なため、今回の調査によってこの時期における周辺の微地形や集落の範囲を明らかにすることはできなかつた。また、ゴミ捨て場を形成した人々の居住域はこの南東側にあると思われ、当時調査区周辺は住居域からやや離れた集落の末端部に位置していたものと推定される。出土遺物の特徴としては日常的な生活残滓が多量に出土する反面、非日常的な遺物が目立つ。

一方、古墳時代後期に年代付けられる竪穴住居跡などの遺構群は、古墳時代中期に後背湿地であった場所に位置し、しかも遺物包含層を覆う黄褐色シルト層の上面で検出されている。すなわち、これらの遺構群は遺物包含層形成後の沖積作用によって新たに広がった自然堤防上に立地したものと思われる。なお、C区北東部における遺構の分布状況やこれまでの調査結果(鈴木;1988)からみて、この時期の遺構は北および東側にさらに延びるものと推測される。

2. 古代

(1) 古代の遺構

A. 道路跡

今回、新たにS X390東西道路跡、S X400南北道路跡、S X500東西道路跡の3条が見つかった。S X390およびS X400は、昨年度の調査で確認されたS X299とつながる道路跡である。規模や方向についてはこれまでに見つかっている道路と同様に、路幅がおよそ3m程で、方向はS X390が多賀城跡外郭南辺とほぼ平行し、S X400がこれと直交する。道路の変遷については、昨年度の調査で灰白色火山灰の降下を間に挟み2回の作り替え確認されているが、今回の調査によって灰白色火山灰降下以前に2回の作り替えが認められ、計画・4時期の変遷(A～D期)を持つことが明らかになった。ただし、S X390については灰白色火山灰降下以後、新たに側溝が作られていないことやS X299Dの東側溝(S D205)がS X400の東側溝と連続することから、D期には道路として機能していなかったことが明らかである。また、S X390とほぼ同位置にあり、これよりも古いS X500には3時期の変遷が認められ、この場所においては灰白色火山灰降下以前に6時期にわたって道路が存続していたことが明らかになった。

ここで、これまでに見つかっている道路跡との関係をみると、S X400は昨年度見つかった南北道路の北に延びる延長であり、山王遺跡八幡地区試掘調査(鈴木;1988)の道路跡とは約1町、多賀城跡第37次調査(白鳥;1981)の道路跡とは約3町離れた位置関係にある(赤澤;1990)。これに対して、S X390はS X300と同時に機能しこれと平行しているものの、S X300の約30m北に位置しており、他の道路跡相互に見られるような1町(1町=約109mとした場合)を基準とした計画性は見い出せない。

ところで、今回S X299の北側溝が確認され、S X299の路幅と調査区内における道路跡の接続状況が明らかになった。これによるとS X299はS X300およびS X390と三叉状につながっており、S X400とも変則的に交差している、このため路幅も一定せず交差部分ではかなり広くなっている。これはS X299の南北の側溝を見る限り、本来は南北通路(S X400・5150)と直角に交差してS X300と同じ路幅でつながるものか、S X390と接続するために変則的な路幅になったものと理解される。こうした状況は、S X500の性格および機能を路襲したことによるものと推測される。S X500は路幅が一定ではなく、蛇行し、他の道路との関係が現時点では判然としておらず、どのように位置付けるかは今後の課題である。

道路の存続年代は平安時代前半頃に位置付けられ、S X500についても現時点では奈良時代まで遡らないものと考えておきたい。相互に接続するS X299・300・390・400については、C期の側溝に灰白色火山灰が堆積していることから10世紀前半を中心とした時期が想定さ

れる。

B . 掘立柱建物跡

古代に属する掘立柱建物跡はC区で16棟以上、B区で新たに4棟確認した。C区については未精査部分が多く詳しい分布状況は不明だが、柱穴は場所的に偏ることなくC区全面で多数検出されている。しかもこれらの多くは数期にわたって重複していることから、調査区内において相当数の掘立柱建物が存在していたことが明らかになった。建物の規模は、明らかになっているものとしては桁行3間×梁行2間のものが多く(12棟)、この他についても2間×2間(総柱を含め3棟)、2間×1間(1棟)と概して規模の小さいものである。総長でも桁行が5.2m前後、梁行が3.5m前後のものが多い傾向にある。ただし、柱間寸法にはばらつきがあり、南西棟および南北棟といった棟方向についても数や配置の上で規則性は見い出せない。また、建物の方向はおよそ道路に沿った方向をとっているが、真北に対して東へ若干偏するもの(SB353・411)、西へ若干偏するもの(SB526・530・356・357・358・410・434・475・502・554・575・576・579・580・582、西へ大きく(10~15°)偏するもの(SB553・577・581)がある。

年代については、検出された他の遺構との重複関係により概ね平安時代に位置付けられるが、重複する個々の建物跡について年代を特定することはできなかった。しかし、方向の異なるこれらの建物跡が相互に重複して存在することから建物群相互の細かい時期差や変遷を示すものとも考えられる。いずれにしろ、道路と重複する建物跡ではなく、道路跡に沿った方向を示すことから、これらの掘立柱建物跡は道路跡を基調とした地割りの中で存在していたものと思われる。

C . 土器埋設遺構

土器埋設遺構はSX299・390東西道路跡とSX400南北道路跡の交差部分で1基(SX292)確認された。同様の遺構は、昨年度の調査においてSX299東西道路跡の路面上でも確認されている(SX01・133)。土器の出土状況などから甕棺墓として捉えたが、状況としてはSX292と同じものである。これらは道路存続期間中の他の遺構が道路跡とは重複しない位置関係にあるのに対して、いずれも路面上で確認されていることや、逆に道路以外の場所では見つかっていないことから道路と深い関わりを持つものと思われる。以上のような状況から単純に甕棺墓として捉えるわけにはいかず、道路に伴う地鎮など祭祀的な性格を持つ可能性がある。今後の類例の増加を待って、さらに検討を加えたい。

なお、山王遺跡東町浦地区の調査(相沢;1990)においても、路面上で土師器甕が出土している。後世の割平などにより道路跡との重複や掘り方については捉えられていないが、甕はいずれも道路の存続年代と一致する平安時代のもので、しかも路面に食い込むような

状態で出土している（相沢氏の御教示による）ことから本遺跡と同様のものである可能性が高い。

（2）遺跡の構成

古代に属するものとして道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、畝状遺構などが重複して多数確認されたが、現段階でこれらの遺構群の年代や変遷について詳述することはできない。ただし、道路跡については計7時期の変遷が捉えられ、その他の遺構の多くは道路跡とは重複せず、これと方向を揃えて存在することが明らかになった。一方、数は少ないが道路跡と明らかに方向が異なる遺構群も確認されている。これらは重複関係において前述の遺構群より古い段階のものであり、道路が建設される以前の遺構のあり方を示しているものと思われる。

したがって、遺構群は道路の有無によって、I道路建設以前、II道路機能時、III道路廃絶以後の3段階に大別される（千葉；1991）。以下、昨年度の調査および今年度の多賀城市による調査の成果を踏まえ、それぞれの段階について概要を述べていく。

I 道路建設以前：前述したような遺構群の方向の違いによって、a・bの2時期に細分される。

I a : 真北に対して西に大きく振れる遺構群で、重複関係からみて古代に属する遺構の中では最も古い段階のものである。重複および方向性らみて S B5151掘立柱建物跡、SD180溝跡、SD578畝状遺構などがこの段階に相当するものと思われるが、遺構の密度が低く、場の使われ方については不明である。年代の上限については明確ではなく、古墳時代まで遡る可能性もある。

I b : ほぼ真北を基準とする遺構群であるが、今回の調査において明確な遺構は確認されていない。昨年度の調査で奈良時代の遺構群として捉えたものに相当する。道路跡は未検出であるが、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などの方向性によりこの時期における「地割り」の存在が想定されている（赤澤；1991）。また、比較的標高の低い河川跡においては畑作（SD348）が行われており、住居と生産の場が区別されていたことを示している。

II 道路機能時：道路には1町を基準につくられた東西および南北の道路跡（b期）と、これより古い段階の道路跡（a期）がある。確認された遺構の多くはこの時期に属するものと考えられ、方向は I b期とほぼ真北を基準にしている。年代的には平安時代前半頃に位置付けられる。

II a : SX500道路跡が機能していた段階で、さらに3時期の変遷が確認されている。これと同時に存在していた道路跡やその他の遺構についても明らかになっているが、道

路跡をはじめ方向や建物の規模を規制するような計画的な「地割り」が存在していたものと思われる。

IIb : S X299・300・390・400・5150道路跡が機能していた段階で、さらに4時期の変遷が確認されている。東西および南北の道路跡からなり、これらは1町を基準にしてつくられた計画的なものと考えられる。ただし、II a 期の道路跡(S X500)と同位置で確認されたS X390はこうした基準に合わないが、道路としては機能しており S X299はこれと接続するために変則的な路幅を呈している。これと同時存在する建物跡は特定できていないが、道路跡と同様に灰白色火山灰によって埋まっている畠(S D394・395)や井戸跡(S E413)も検出されており、道路で区画された内部は居住と生産の場が共存していたと考えられる。年代的には10世紀前半を中心とした時期が想定される。

III道路廃絶以後:道路を覆うS D14河川跡や土壙などで構成される。遺構数も減少し、生活の場としての機能はII b 期を境にして衰退していくようである。

IV まとめ

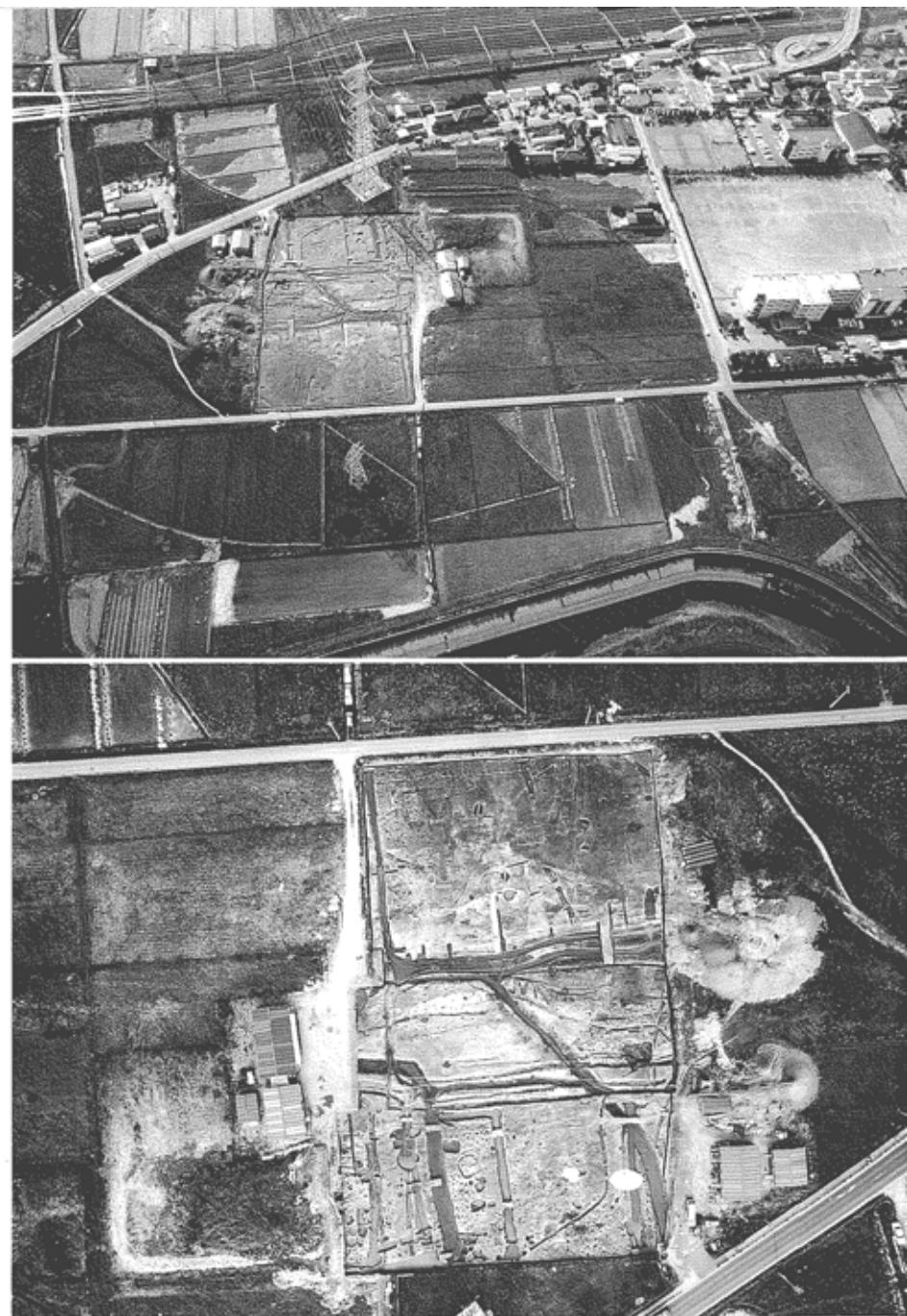
- 1 古墳時代の遺構として、遺物包含層(ゴミ捨て場)、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壙などが検出された。
 - ①遺物包含層は自然堤防の落ち際に形成されたもので、古墳時代中期に位置付けられる。層中からは通常腐敗して残らないような骨角器や木・竹製品、動植物遺体が多量に出土し、この時期における具体的な生活の一端が明らかになった。
 - ②竪穴住居跡をはじめとするこのほかの遺構群は古墳時代後期に位置付けられるもので、調査区の北東部に集中して存在する。これらは遺物包含層の形成後に新たに広がった自然堤防上に立地しており、この時期の遺構は北および東側にさらに延びるものと推測される。
- 2 古代の遺構として、多賀城の外郭南辺とほぼ方向を揃えた道路跡や、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、畠の畝などが多数発見され、多賀城層辺の計画的な「地割り」が明らかになるとともに、具体的な土地の使い分けなどが明らかになった。また、これらの遺構群は道路の有無によって、道路建設以前・道路機能時・道路廃絶後の3段階に大別され、道路機能時は平安時代前半頃に位置付けられる。遺構群の多くは道路機能時に存在したものと思われ、道路廃絶後は生活の場としての機能も衰退していくようである。一方、道路建設以前の状況については計画的な「地割り」に規制される遺構群とこれに規制されないさらに古い段階の遺構群が存在することが明らかになった。

引用参考文献

- 相沢清利（1990）；「山王遺跡－第8次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第22集 多賀城市教育委員会
- 赤澤靖章（1990）；「山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第138集 宮城県教育委員会
- 阿部恵・須田良平・岩見和泰（1991）；「新峯崎遺跡」『村田町文化財調査報告書』第9集 村田町教育委員会
- 伊藤玄三（1973）；「福島県上の原四号墳の鹿角製刀装具」『福島考古』第14号
- 伊東信雄編（1981）；「考古資料」『宮城県史』34
- 民家和典（1957）；「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 内田律雄（1986）；「弥生前・中期の低湿地遺跡－松江市西川津遺跡」『季刊考古学』第14号 雄山閣
- 加藤道男（1989）；「宮城県における土師器研究の現状」『考古学叢』II
- 金子浩昌・忍澤成視（1986）；「骨角器の研究－縄文篇I」『考古民俗叢書』22 慶友社
- 神澤勇一（1976）；「弥生時代古墳時代および奈良時代の卜骨・ト甲について」『駿台史学』38
- 神澤勇一（1987）；「ト骨」『弥生文化の研究－8祭りと墓と装い』 雄山閣
- 神澤勇一（1988）；「三浦半島の弥生時代漁具」『季刊考古学』第25号 雄山閣
- 木村幾多朗（1979）；「長崎県壱岐島出土のト骨」『考古学雑誌』64-4
- 木村浩二・及川格・千葉仁（1988）；「郡山遺跡VIII」『仙台市文化財調査報告書』第110集 仙台市教育委員会
- 工藤哲司・荒井格（1990）；「仙台市中在家南遺跡出土の木製品」『考古学ジャーナル』323
- 工藤哲司・成瀬茂（1982）；「栗遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第43集 仙台市教育委員会
- 小井川和夫（1983）；「里浜貝塚IV」『東北歴史資料館資料集』13 東北歴史資料館
- 甲元真之・山崎純男（1984）；『弥生時代の知識』 東京美術
- 後藤勝彦（1981）；「宮城県七ヶ浜町東宮浜鳳寿寺貝塚出発見のト骨について」『東北歴史資料館県研究紀要』7
- 小林行雄（1976）；「鹿角製刀剣装具」『古墳文化論考』 平凡社
- 白鳥良一（1981）；「第37次発掘調査－多賀城跡－」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1980
- 鈴木真一郎（1988）；「山王遺跡・市川橋遺跡の発掘調査について」『昭和63年宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨』 宮城県教育委員会
- 高倉敏明他（1981）；「山王遺跡－山王・高崎発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第2集 多賀城市教育委員会
- 田辺沼三（1981）；『須恵器大成』
- 千葉孝弥（1991）；「山王遺跡－仙塩道路関連（八幡地区）の発掘調査について」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 古代城柵官衙遺跡検討会
- 永澤譲次（1931）；「陸前国塙港字崎山圓洞窟の石器及古墳時代遺跡に関する略報」『史前学雑誌』3-1
- 中村浩（1981）；『和泉陶邑窯の研究』
- 奈良国立文化財研究所（1984）；「木器集成図録－近畿古代篇」『奈良国立文化財研究所史料』第27冊
- 丹羽茂・阿部博志・小野寺祥一朗（1981）；「清水遺跡－東北新幹線関係調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書』第77集 宮城県教育委員会
- 丹羽茂（1983）；「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集 宮城県教育委員会

長谷部言人(1924) ;「陸前名取郡増田村下増田経ノ塚出土鹿角製刀装具に就て」『人類学雑誌』39の、4, 5, 6
三宅宗議・茂木好光他(1988) ;「五松山洞窟遺跡」『石巻市文化財調査報告書』第3集石巻市教育委員会
渡辺誠(1986) ;「堅果類」『季刊考古学』第14号 雄山閣

写 真 図 版

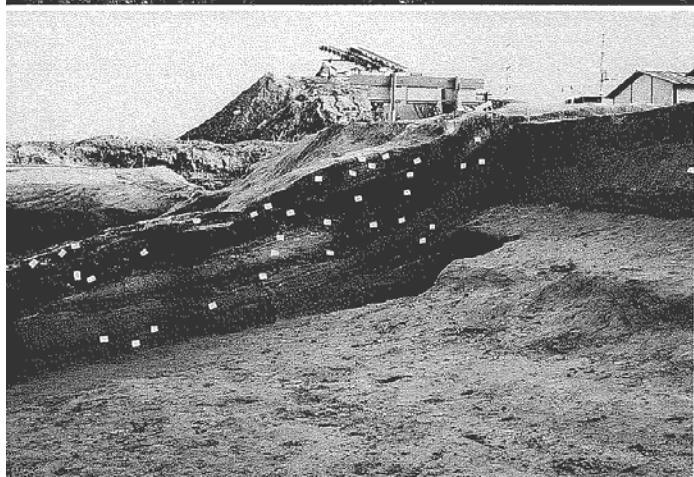


図版 1

上　遺跡遠景
下　調査区全景



B区SX230全景
(西から)



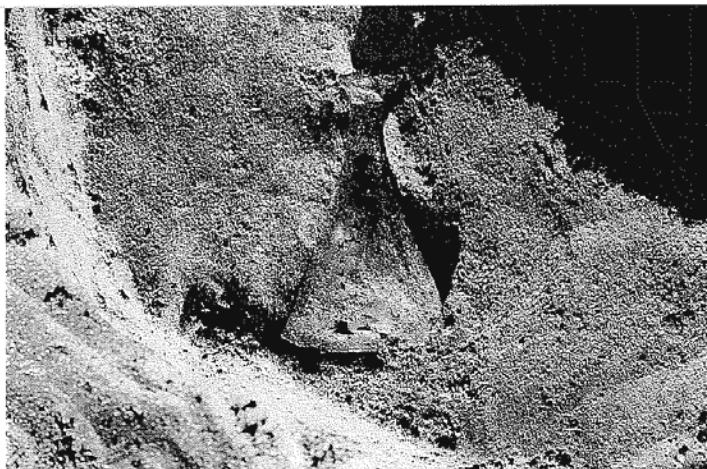
B区SX230断面
(西から)



B区SX230遺物出土状況
4層断面(北から)

図版 2

B区SX230
ト骨出土状況



B区SX230
ザル出土状況



SX230鋤未製品出土状況



図版 3



C区北東部(南から)



C区SI 491(西から)



C区SI 498, 499(西から)

図版 4

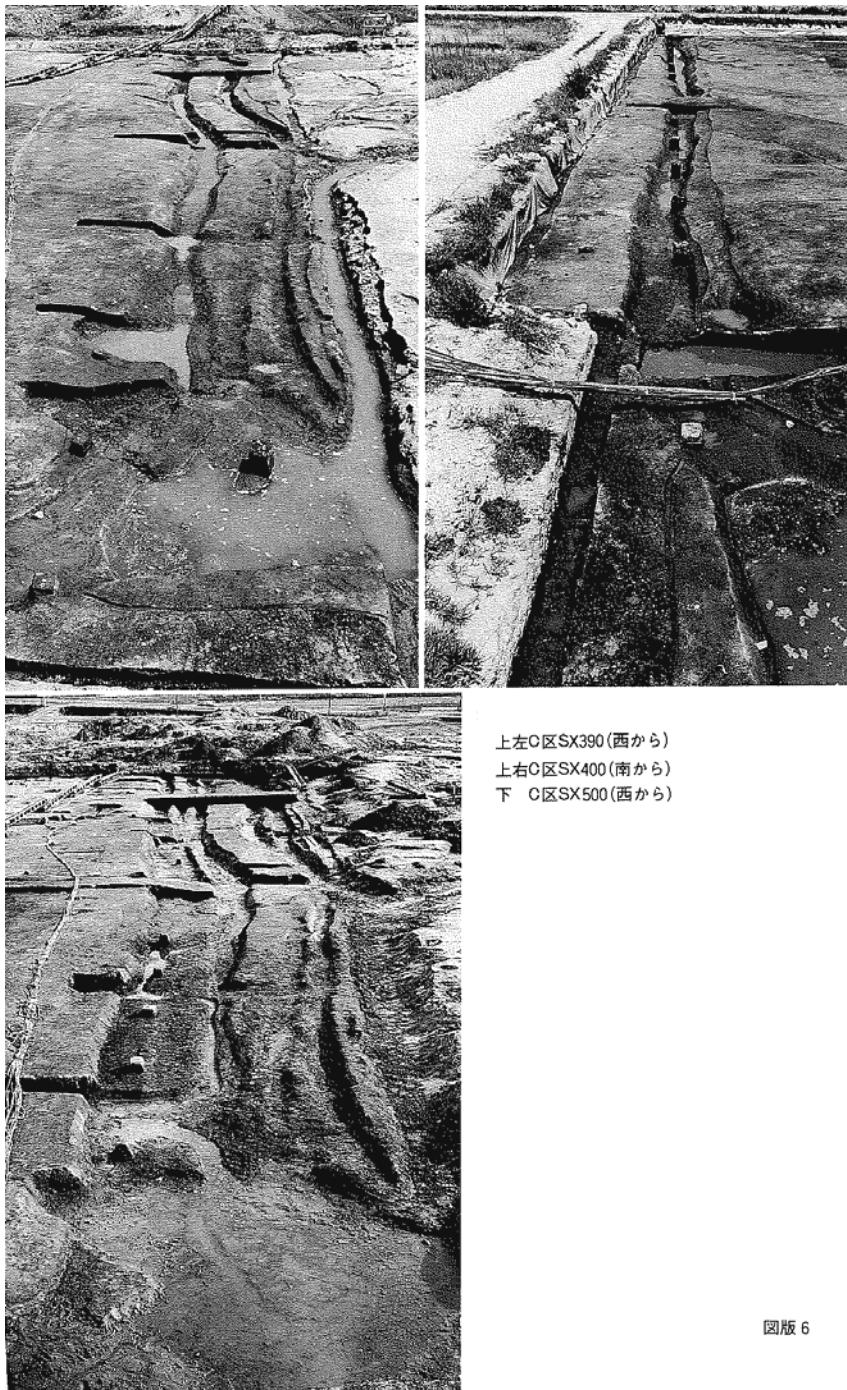
C区SI493(西から)



C区SX390確認状況
(西から)
白く帯状に平行するの
は灰白色火山灰層



図版 5



上左C区SX390(西から)

上右C区SX400(南から)

下 C区SX500(西から)

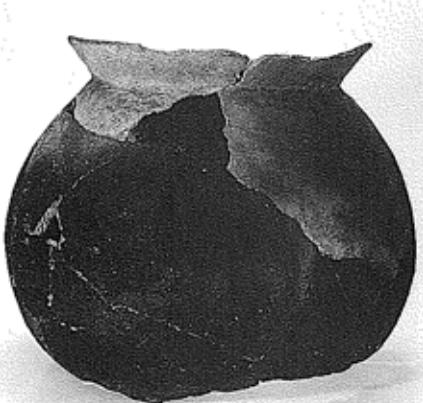
図版 6



圖版 7



1



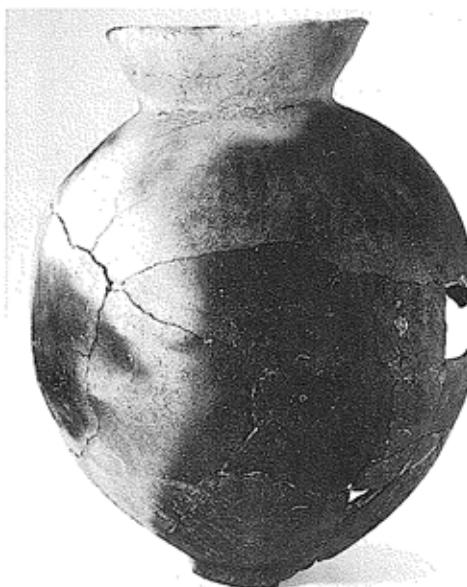
2



3



4

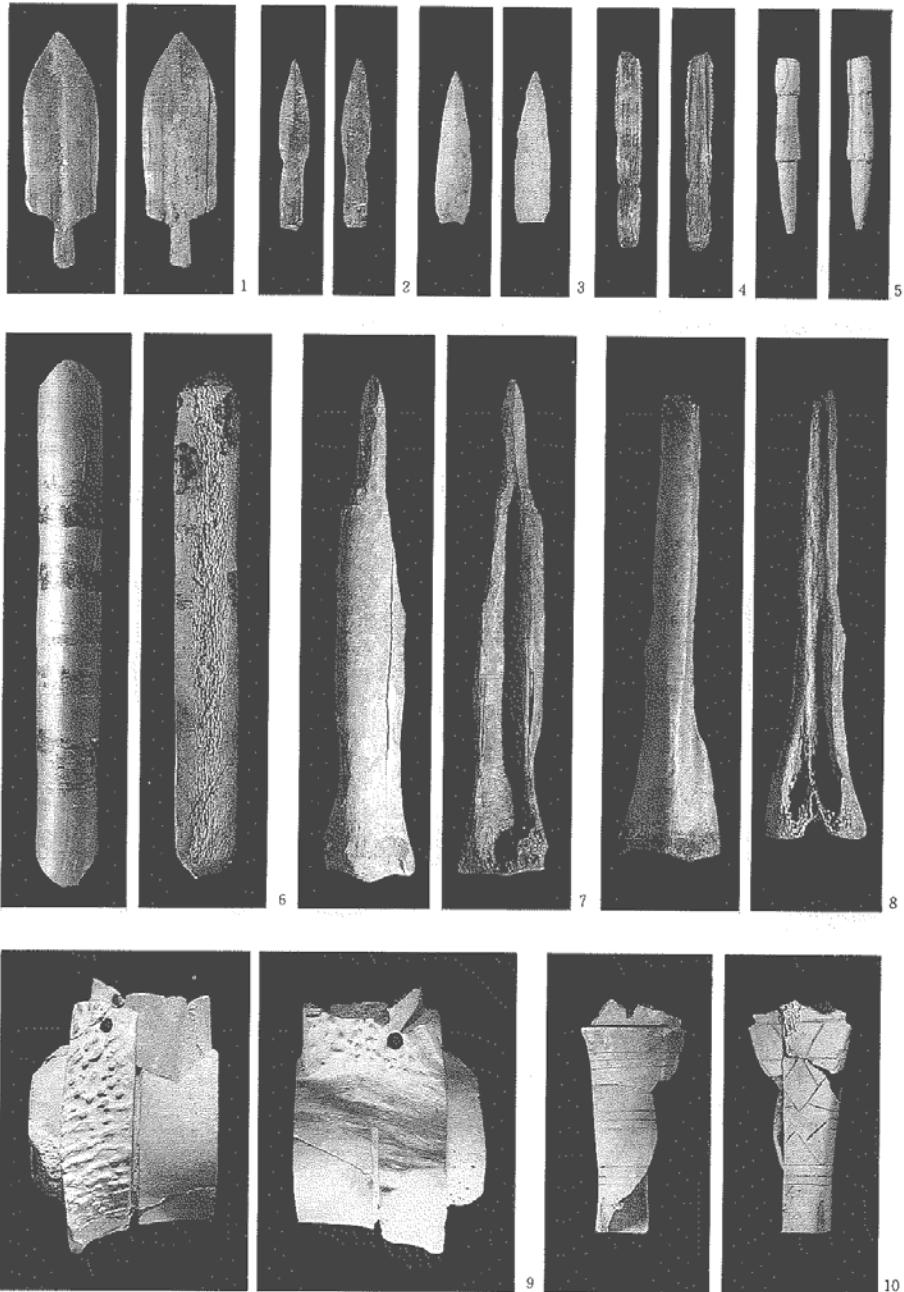


5



6

図版 8



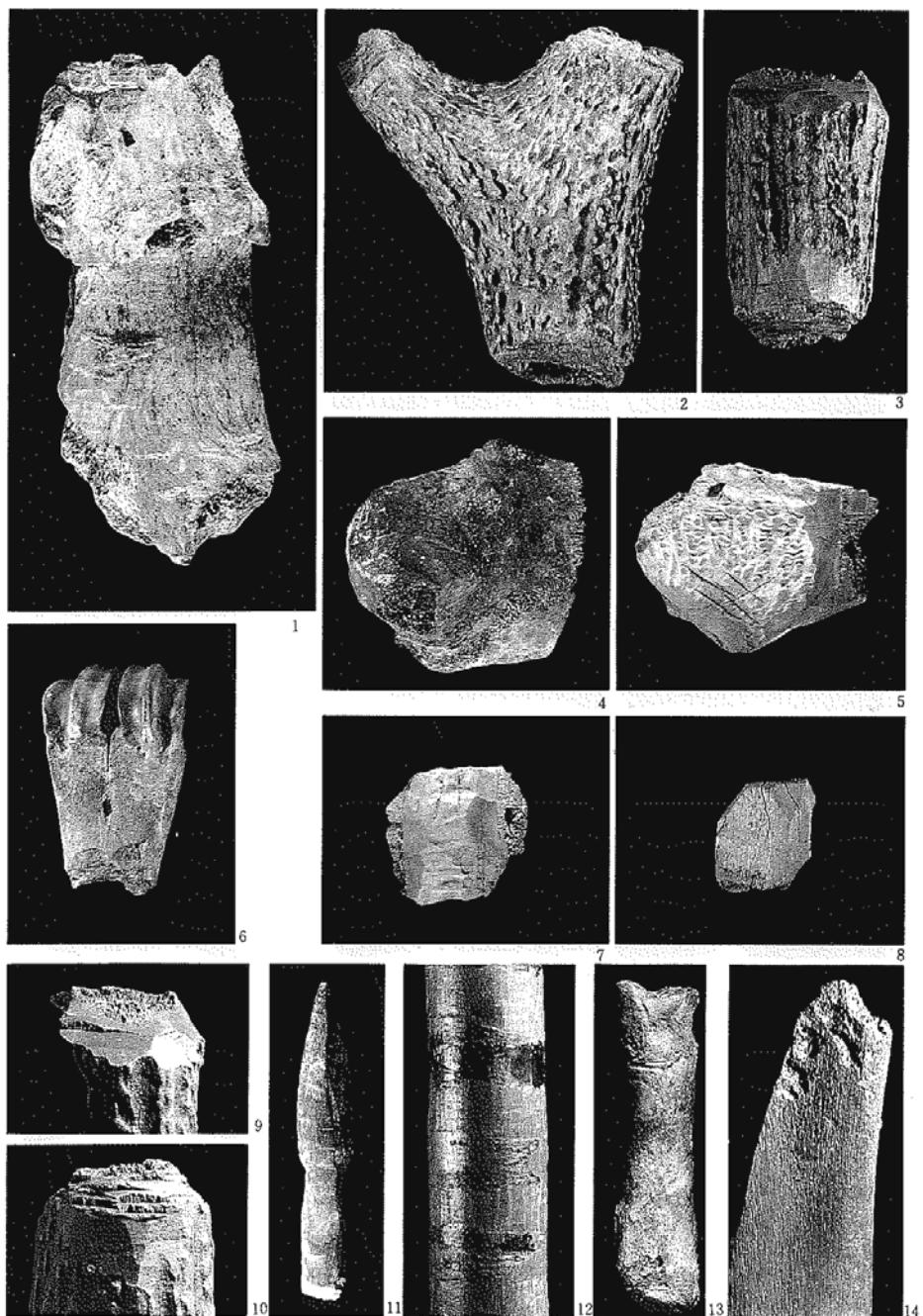
図版 9

(縮尺省)



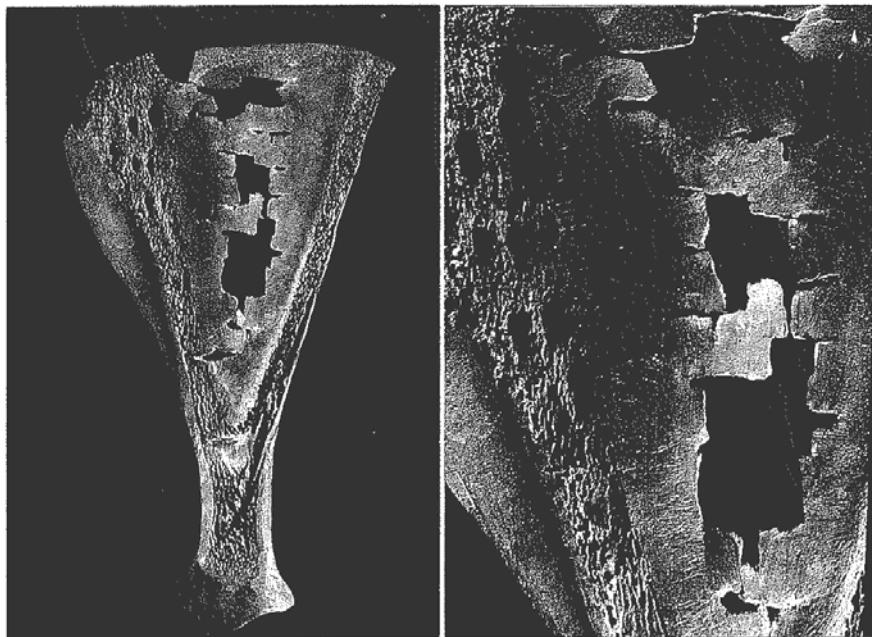
图版10

(缩尺3%)

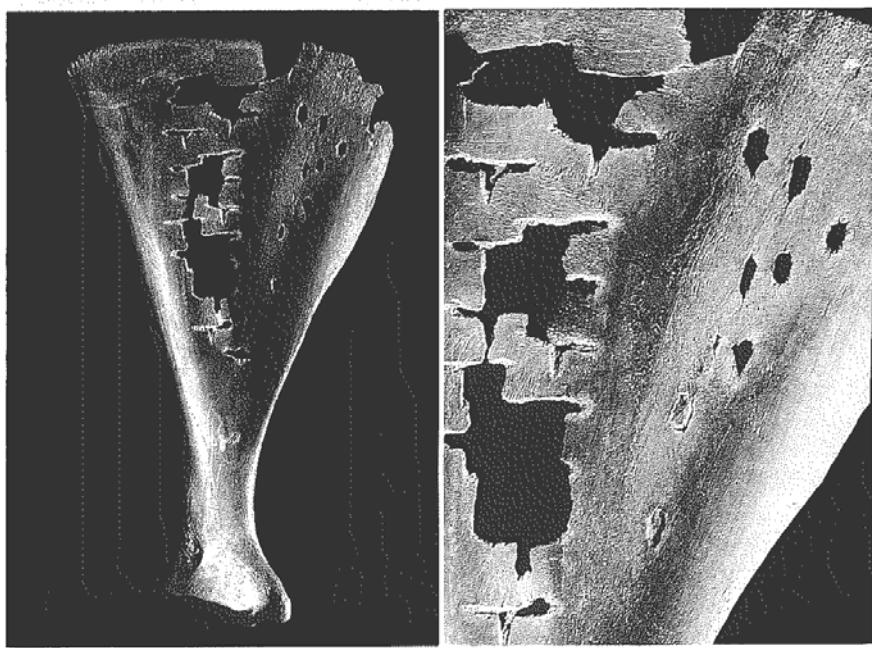


図版11

(1～8縮尺×、9～14縮尺任意)



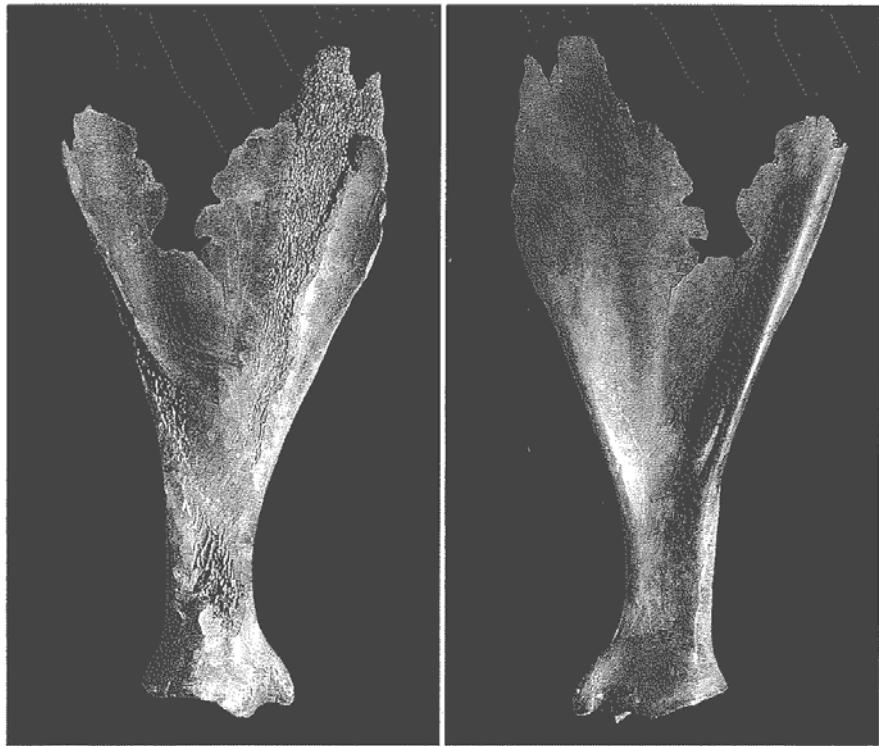
1 a



1 b

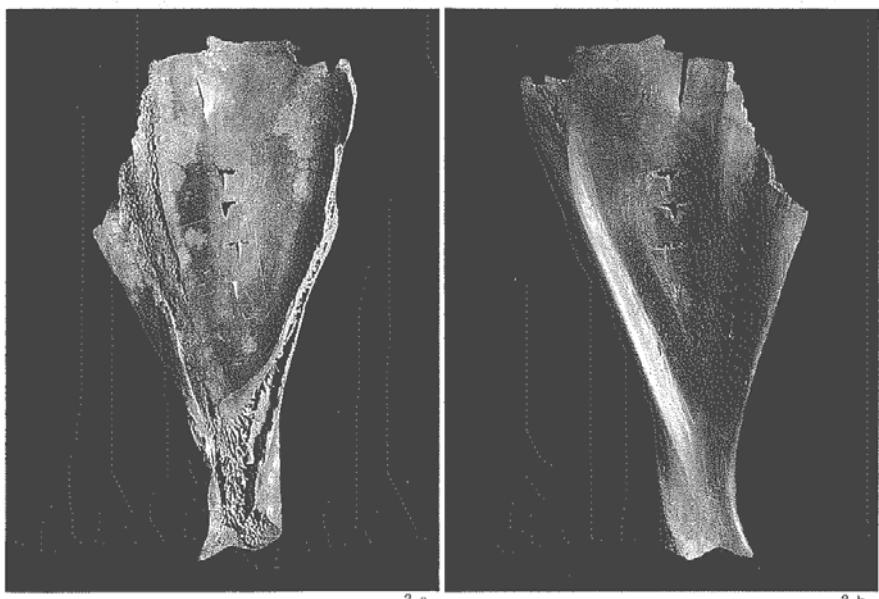
図版12

上左 背側面、上右 焼灼部拡大
下左 肋骨面、下右 焼灼部拡大



1 a

1 b

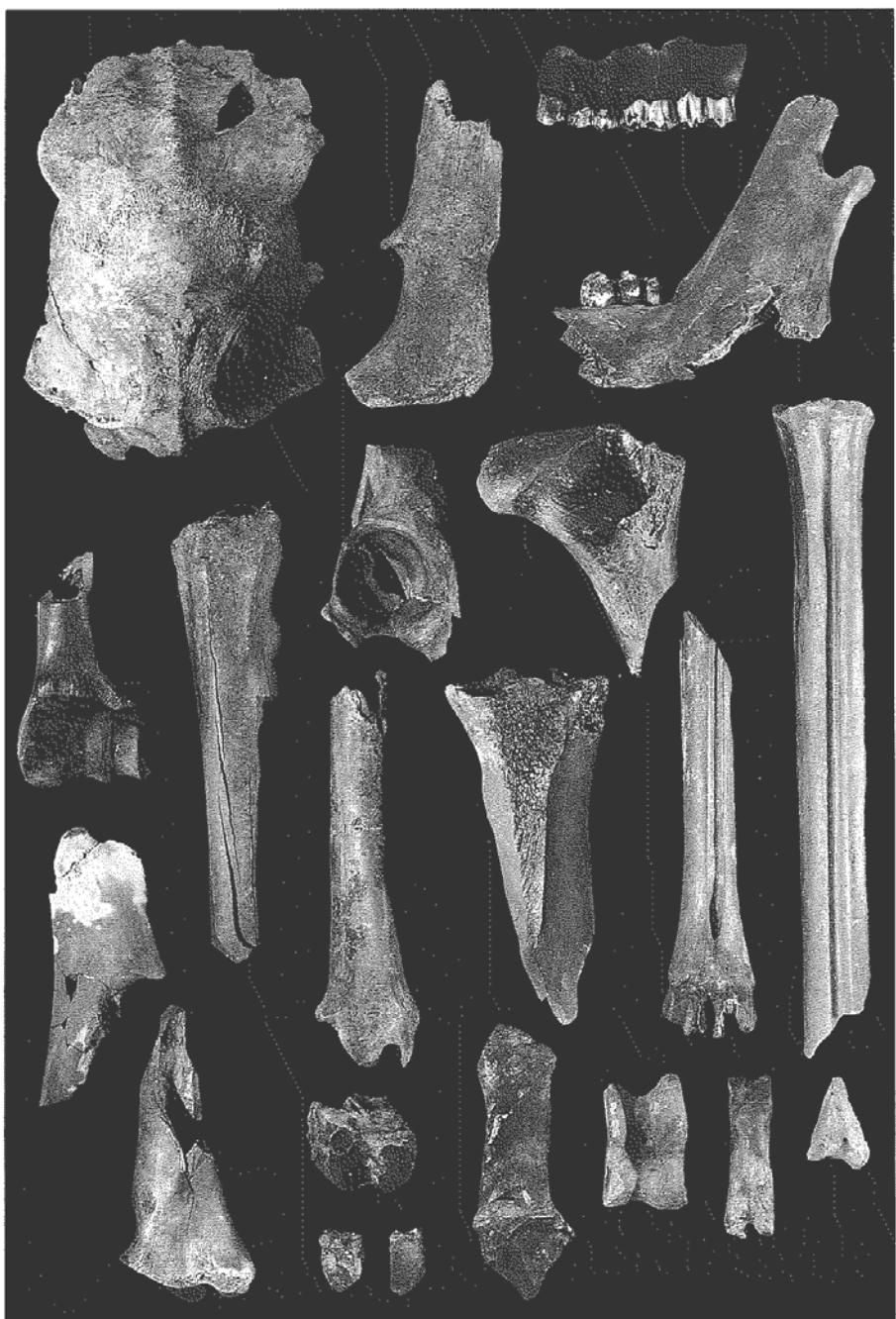


2 a

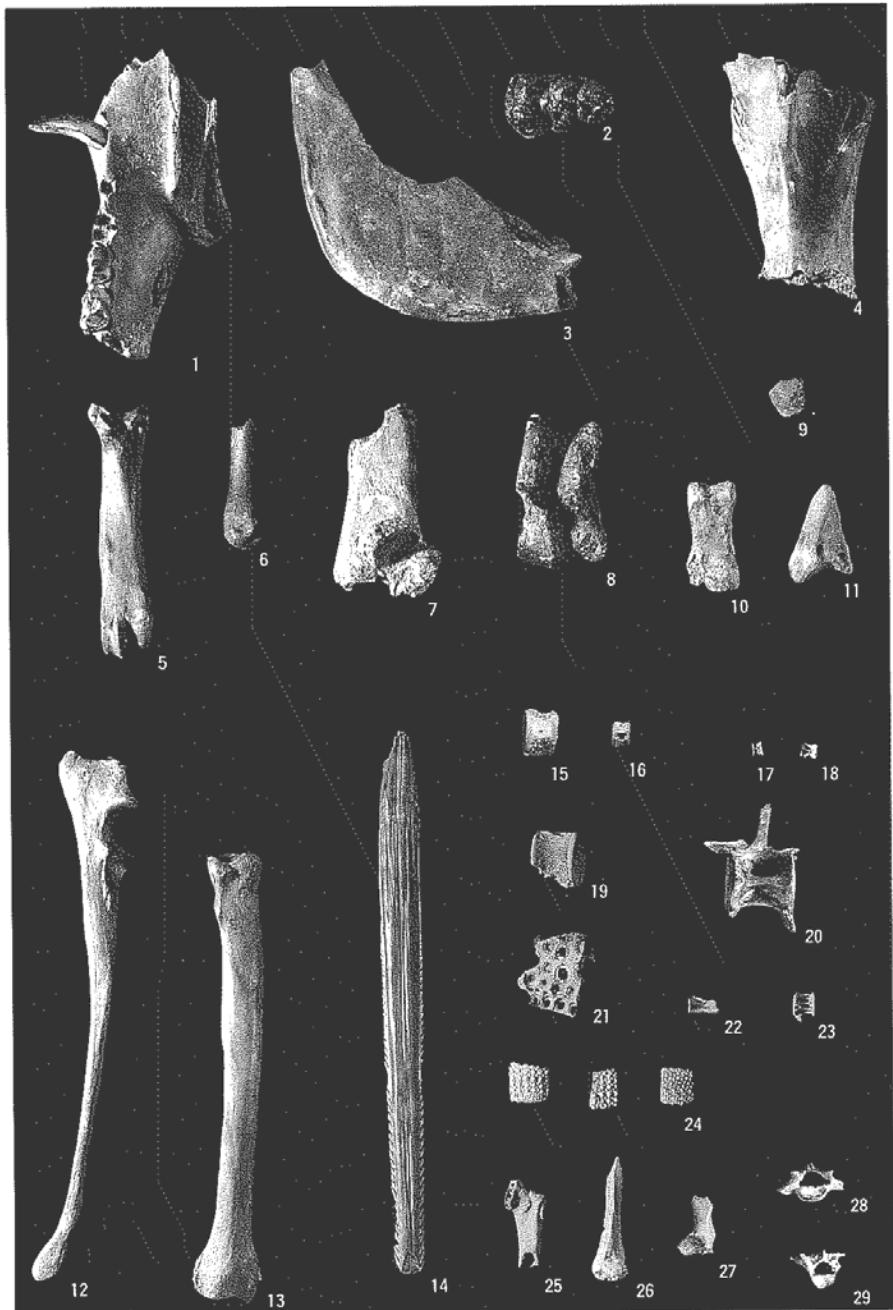
2 b

図版13

(縮尺 $\frac{1}{2}$)

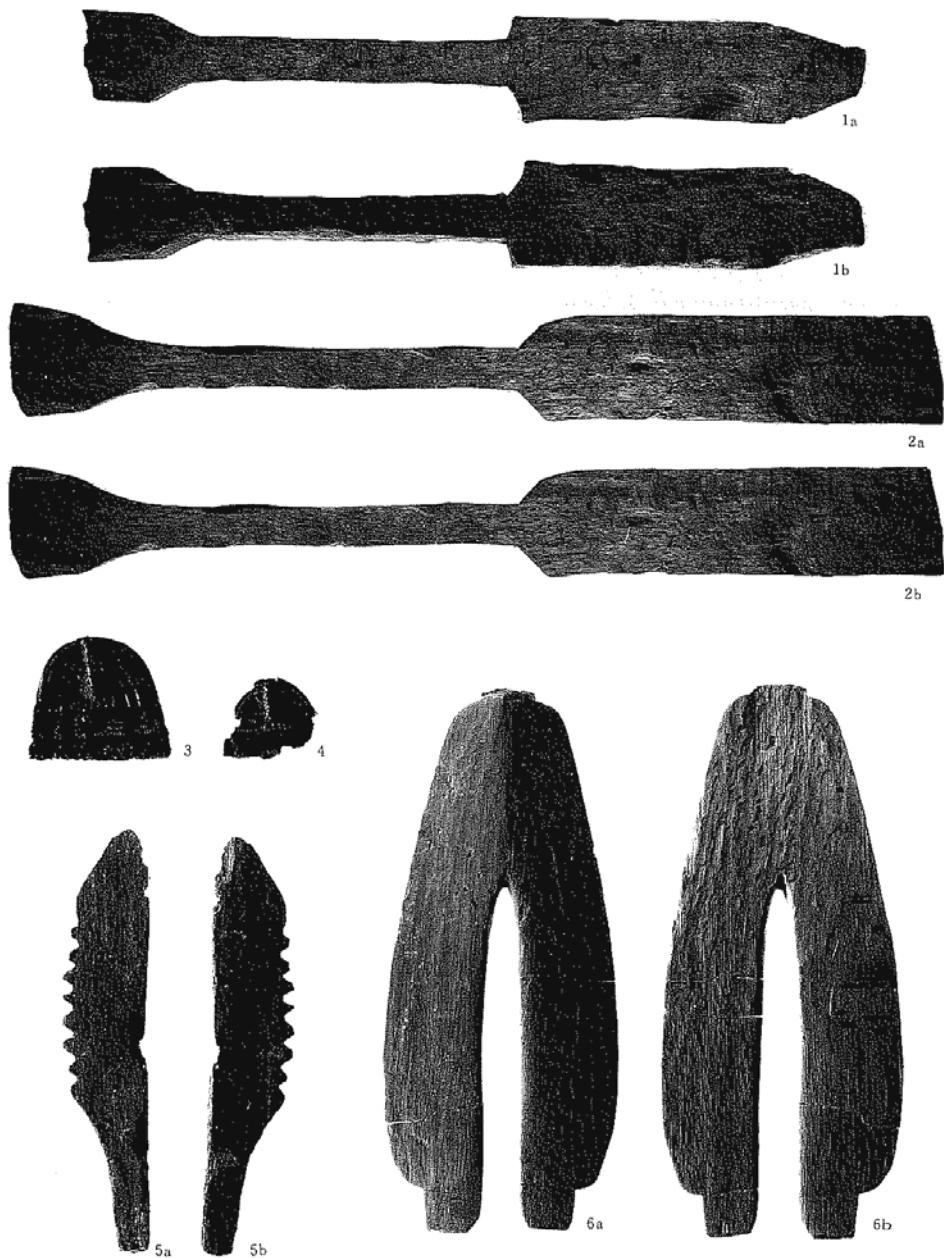


図版14 ニホンジカ（縮尺×2）

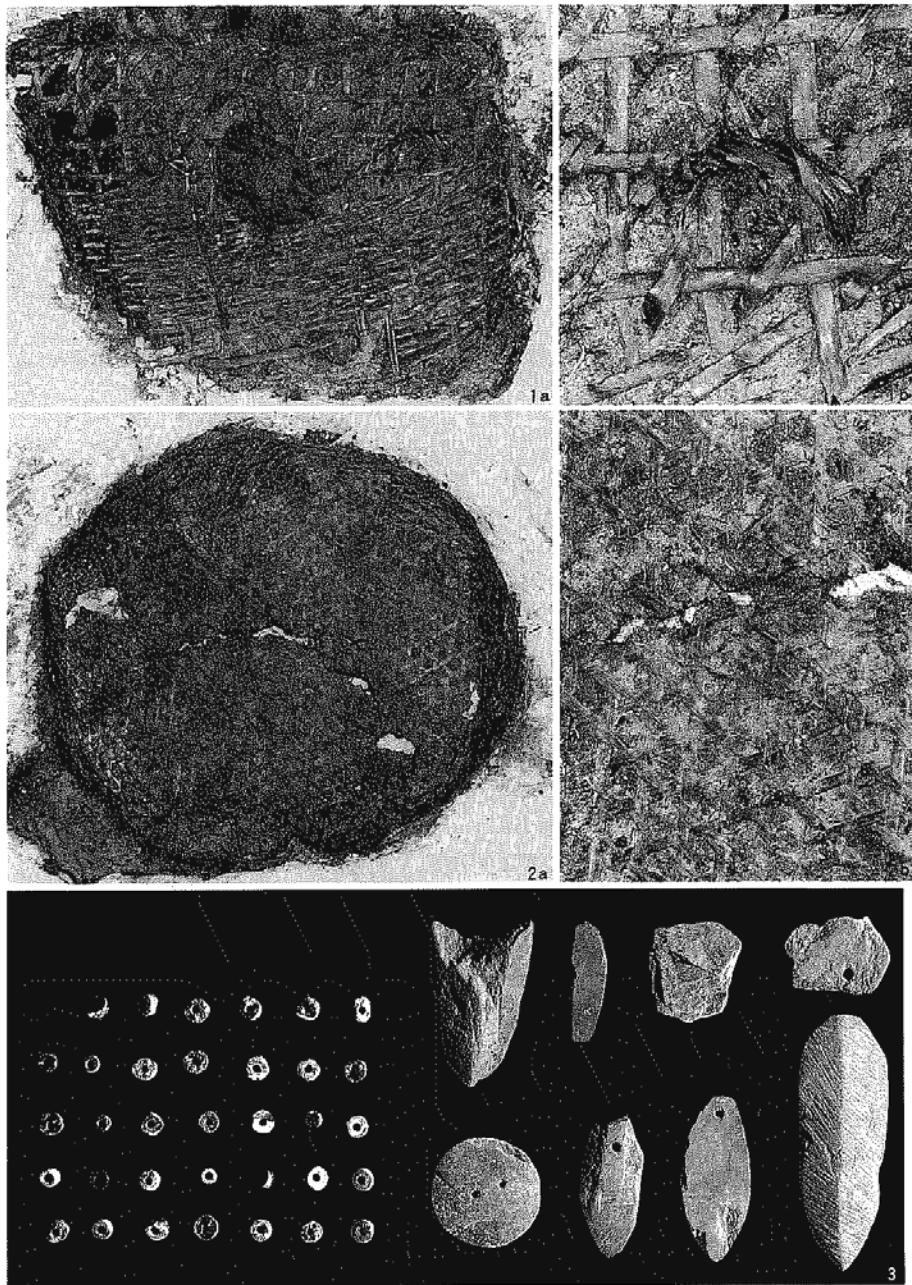


図版15

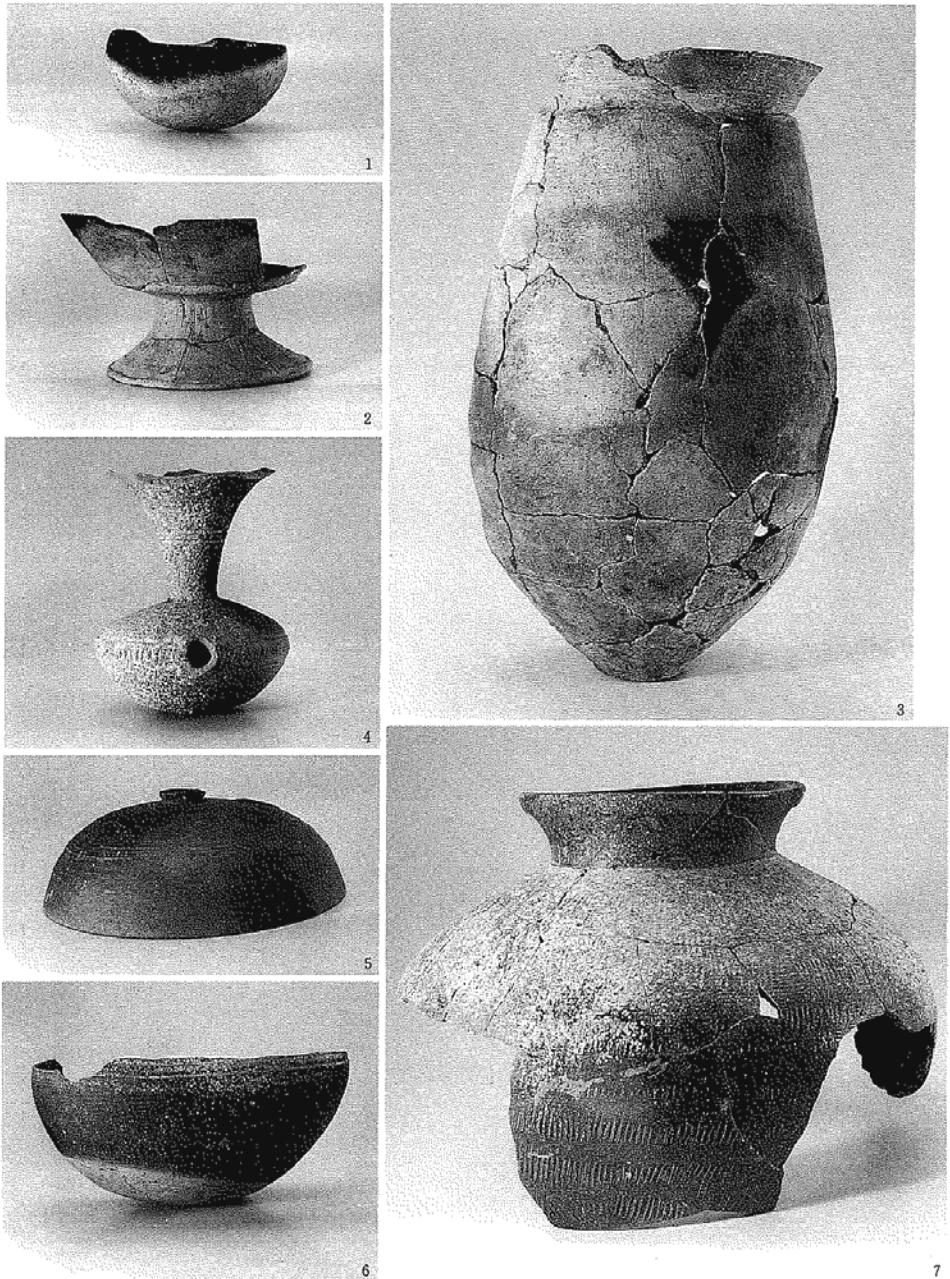
1～11イノシシ、12・13イス（縮尺約）
14～16エイ目、17・18マイワシ、19サケ科
20カツオ、21クロダイ、22マアジ、23種不明
24ムラサキウニ、25～29カエル類（縮尺約）



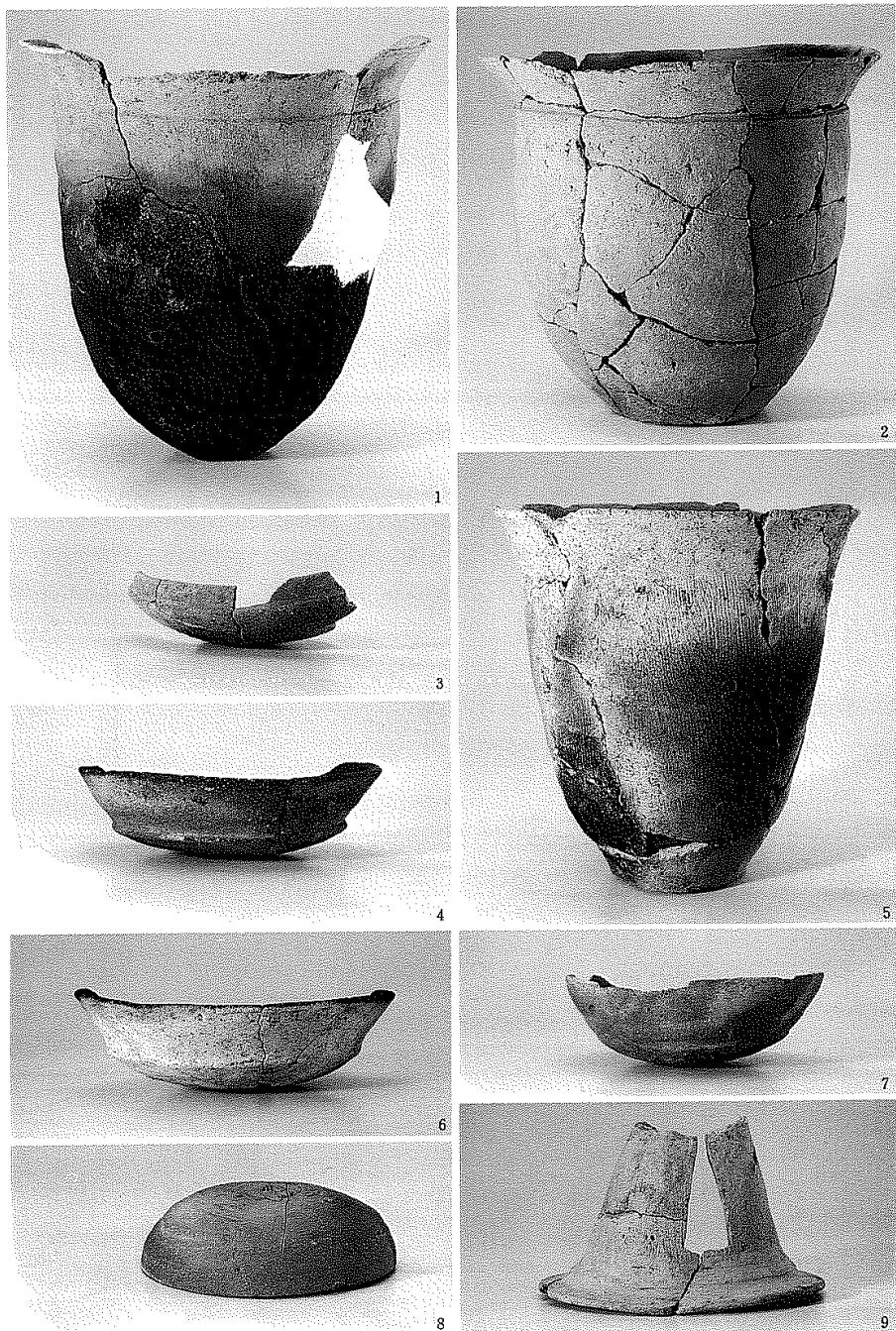
図版16



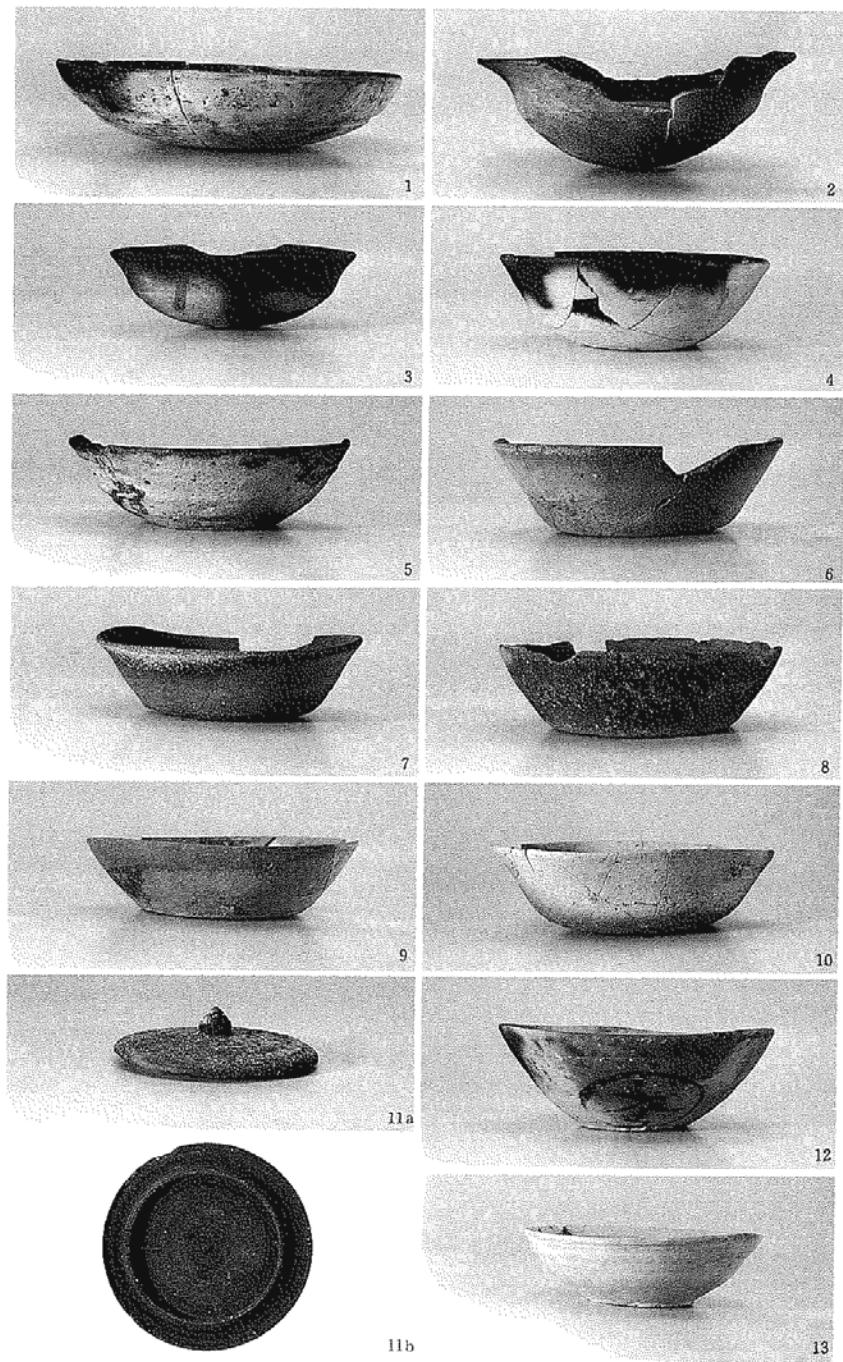
図版17



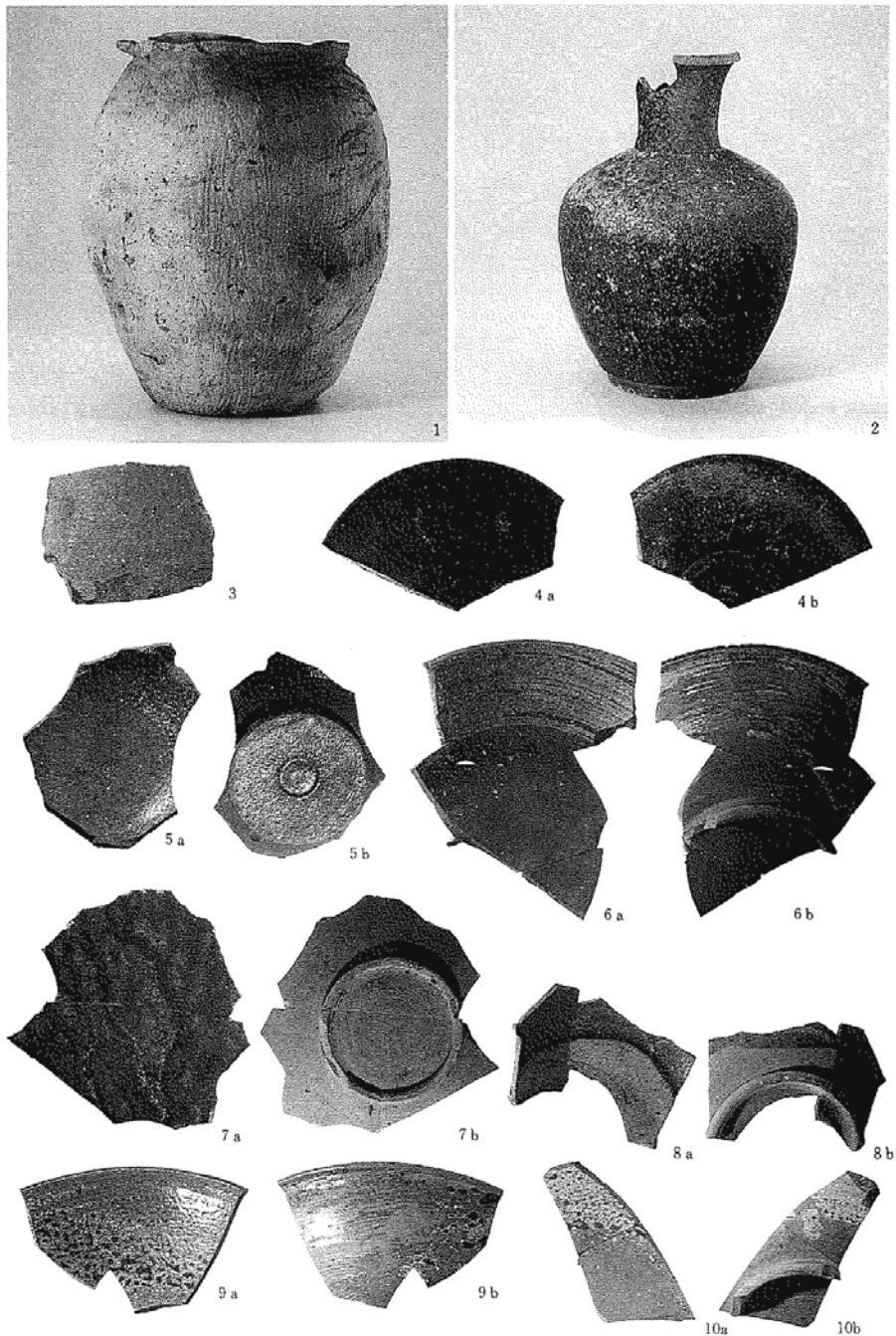
図版18



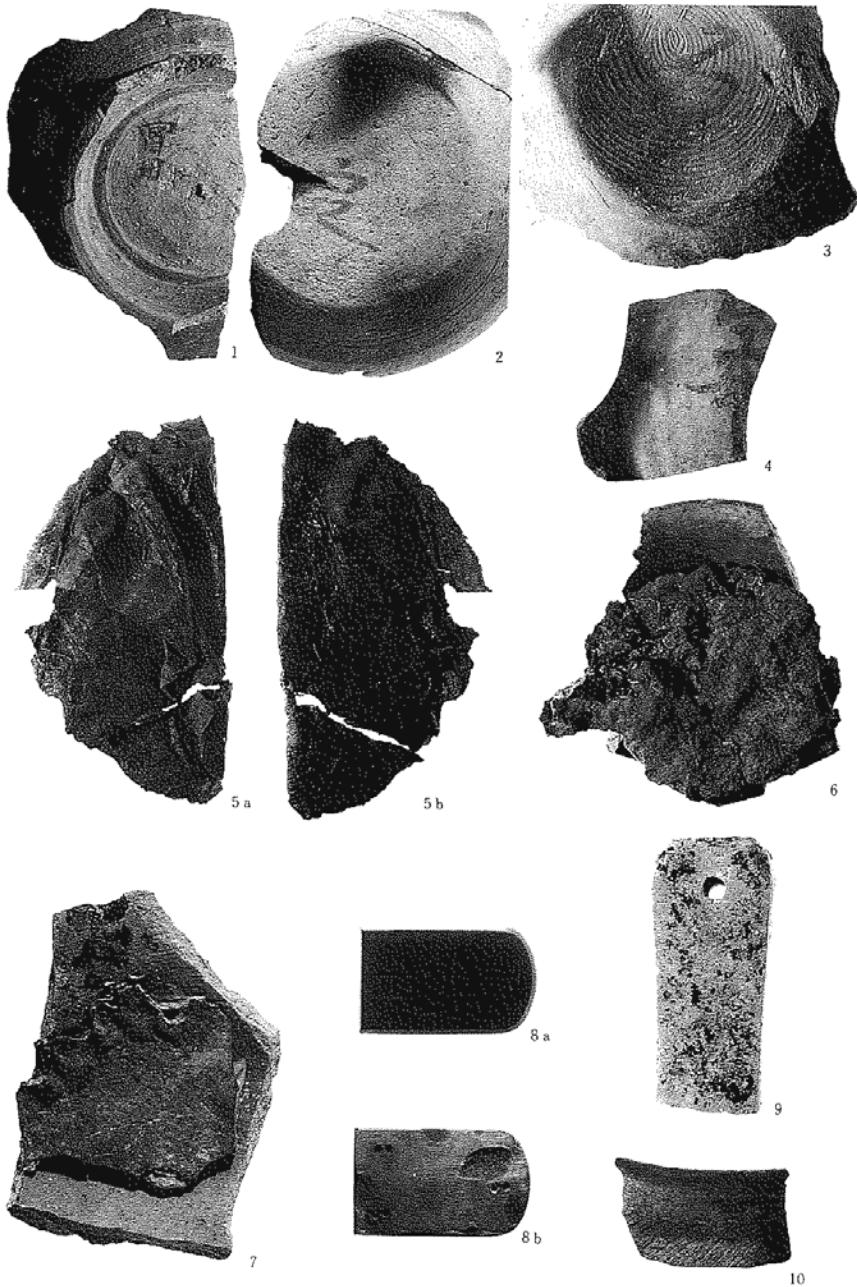
図版19



図版20



図版21



図版22